老年に喩ふ。【二九】渭北　渭水の北。故郷なり。【三〇】江西　江州なり。【三一】咸秦　秦の咸陽。卽ち長安の地。【三二】鄒魯　鄒は孟子の生れし國、魯は孔子の生れし國。【三三】繻　符なり。漢の制に關を出で傳に乘るに繻を裂きて以て符信となす。漢書終軍傳に棄繻の事見ゆ。【三四】鸚鵡　後漢の禰衡鸚鵡賦を作る。【三五】轆轤　詩韻を用ふるに轆轤韻といふ一格あり。【三六】戰文　文官試驗を受くること。掉鞅は馬の鞅を正すこと。【三七】射策　制擧に應ぜしこと。彎弧は弓を引くこと。【三八】揚馬　漢の揚雄、司馬相如。【三九】交分　交情。蕭朱は蕭育・朱博。【四〇】摩揣　揣摩に同じ、おしはかる。【四一】周行　高位なり。覬覦は非分を冀ふこと。【四二】昇平　太平。【四三】承明　承明廬。侍從の臣の居る所。【四四】建禮　宮門の名。【四五】王府　天皇の御庫。【四六】珍羞　珍味佳肴。【四七】白虎　宮殿の名。後漢の章帝の時、博士議郎郎官及び諸生諸儒白虎觀に會し、五經の同異を講議し、白虎議奏を作る。【四八】青蒲　敷物なり。漢書史丹傳に、丹親密の臣を以て侍して疾を視るを得。丹直に臥内に入り頓首して青蒲の上に伏す。【四九】笙竽　竝に樂器の名。【五〇】電策　電の鞭。【五一】吳歈　吳の歌。【五二】翠羽　翡翠の羽。【五三】三琖　三杯。【五四】仇家酒　樂天の詩に、時到仇家非爲酒、醉時心勝醒時心とある。【五五】葛氏　氏なり。姝は美女。【五六】十千　一斗十千錢の美酒。曹植の詩に美酒斗十千とある。【五七】二八　十六歳の少女。壚は酒を煖むる處。史記に「司馬相如卓文君をして壚に當らしむ」とある。【五八】杓胡律　杓は李建、字は杓直。胡律は磊落の貌。【五九】鞏囁嚅　鞏は竇鞏。囁嚅は口言はんとして言ふ能はざる貌。【六〇】蔫迂　蔫は物の鮮明ならざるをいふ。【六一】骰盤　さいころの盤。【六二】采成盧　采は彩なり。樗蒲五子皆黑なるを盧といふ。最勝の采なり。【六三】籌　罰杯を飲ませる數を示すもの。【六四】觥　罰杯。【六五】頹玉　玉山の頹るること。醉ひつぶれること。【六六】中樞　尙書省。【六七】金吾　執金吾なり。天子の先驅をする官。【六八】霄漢　天上の雲。宮中に喩ふ。【六九】博望縣名。河南省に在り。【七〇】潯陽　江州なり。【七一】錙銖　微細なり。【七二】望日　十五日。雙闕は宮門。【七三】九衢　長安の市街。【七四】峴陽　峴山の南。峴山は湖北省襄陽縣の南に在る。【七五】夏口　今の漢口。【七六】中丁　中年の人。殳は兵器。【七七】綠蕪　綠野。【七八】角　つのぶえ。嗚嗚は角聲の貌。【七九】鶗鴂　もず。鳥の名。【八〇】晩節　晩年。茱萸はグミ。九月九日囊に茱萸を盛りて臂に懸け、高きに登りて菊花酒を飲み、以て息災を祈る。【八一】八區　八方。天下。【八二】錘鍛　鍛へること。洪爐は大爐、以て天地に喩ふ。【八三】栖遲　遊息なり。【八四】懸磬　室中空しくして物なきをいふ。【八五】端憂　正しく憂ふること。守株は舊慣を墨守すること。【八六】指點　非難なり。【八七】揶揄　嘲弄する。【八八】兀兀　動かざる貌。【八九】長吁　長嘆なり。【九〇】友于　兄弟。【九一】席八　席は姓、八は排行。

【題義】此詩は元和十二年の作で、先づ江州貶謫の慘狀を寫し、飜つて長安に在りし時の得意の狀を述べ、感慨を以て結んだ。江州は長安より東南に當るから東南行と題したのである。通州（今の四川省達縣）司馬に貶せられてゐる元稹澧州（湖南省澧縣）刺史に貶せられてゐる李建・果州刺史の崔韶・開州（今の四川省開縣）刺史の韋某（長男を大といふ）庾補闕（補闕は官名）杜拾遺（拾遺は官名）李逢吉・竇鞏の八友に寄せて以前の友情を偲んだのである。

【詩意】吾は長安を去り三楚を經、幾山川を越えて五湖の邊なる江州に來た。此地は遠く江畔に在りて殆ど東海に接せんとする。吾が身の飄零せることは落葉の如く、浩蕩として際涯なきこと桴に乘つたやうである。長安に比べると此地の風俗は全く違つてゐる。其語は鳥の囀るやうで態度が如何にも質朴である。水上の市場が市街に通じ、煙村に接して船が澤山碇泊してゐる。吏は魚戸の稅を取立て民は火田の租を納れ、市場の開ける日には鰕や蟹が多く賣られ、寅年には虎や貙が多く現はれる。成人した男は總角を結ひ、女は鬼神に事へて巫となり、小暗き樓上には倡婦が羣を成して居り、隄上には小商人が集つてゐる。船中では夜蒲團を賃借し、瓶を割いて春酒を買ひ、果物といへば盧橘ばかりで、鳥といへば鷓鴣ばかりであり、山嶺相連つて雲が棧の如く斷續し、江畔は水が城郭に當り、月が移つて柱上の鶴を翹げ、風が吹いて舟の檣烏を動かし、（白樂天の詩に華表雙棲鶴、聯檣幾點烏とある。）

鼈が邪魔をするので潮の時刻が狂ひ、蛟が驚くので不意に大浪が起り、鼉は鼓を擂るやうな聲で江中に鳴き、蜃氣樓が昔の河圖のやうに海上に浮び、山魈だの水弩だのといふ怪物が居り、喘ぐ牛は紫芋の田を犁き、痩せた馬は青い菰を食つてゐる。いれずみなどをした僕婢などが、泥中の菱を採つたり、燒後に生えた草などを刈つてゐる。鍋や盆などは鼈や鱸の爲に腥くなる。かの鍾儀や張翰は何故にこんな處を慕つたのかと怪まれる。氣候も寒熱定りがない。吾は老衰の身を以て此地に漂泊し、早く長安へ歸りたいと思つて心も一向に落ちつかない。飜つて念へば吾は嘗て長安に遊び儒學を修め、經國濟民の志を立て、詞賦を作ることを學び、再度の試驗にも及第し更に制擧をも突破し、崔・杜・元・韋諸君と相伍して進み、竊に他日の榮達を期した。幸に風雲に會し君恩に浴することを得、承明廬に宿直したり建禮門に參朝したりして、美服や佳肴を賜り、君側に侍して宴に陪し、鳥獸を畫いた旗を立て天籟の音樂を奏する行幸に扈從し、美妓の舞を觀たり歌を聽いたりしたこともある。又別に閑遊の仲間を作つて潛に相招飲し、美酒を酌み佳人を侍せしめ、杓直の議論を笑つたり賓輩の嘯嘯を憐んだり、互に醉うて罵りなどし、酒令（酒席の遊戲）をしたり骰子を投げたりして樂しみ、入つては尙書の上奏文を視、歸るには御廐の馬に乘り、醉うては宰相にも楯を衝き侍從職を見ても挨拶もせぬやうな驕傲ぶりであつた。されば天顏に咫尺して重恩に預つたが、忽ち失脚して江州司馬に貶せられることになり、その明朝長安に別れ去り、諸君も亦僕と相前後して貶謫の憂目に遇ひ帝京を出たのであつた。因つて僕は秦嶺から商山を經、襄陽・夏口を過ぎて東に下つたが、淮西の賊が未だ平

がざりし故、到る處荒廢して壯丁は皆戈を執り警備を嚴にしてゐた。さて江州に到著して見ると、林は東林・西林の二寺と對し、山は大姑・小姑二山に分れ、蓮花峰は刻削して成せるが如く、湓水は帶の如く繞り、分流して青草湖に注ぎ、孤城が綠野に圍まれてゐる。かかる處に春秋を過し、或は菊花が黃金の如く蘆花の白雪の如きを見、或は春筍の抽んで雛燕の飛ぶを見て、歲月忽ち遷り、感慨なきを得なかつた。そもそも孔子は何故に窮厄したのか、顏回は何故に短命であつたか。窮通の運命は聖哲と雖も如何ともすることは出來ないのだ。況んや僕は自ら謀ることが拙であつたから、厄運にとりつかれるのも當然である。波のまにまに身を漂はせ、天地の賦與に任せると致さう。殘藥を和して病を防ぎ、舊襦を補つて寒を防ぎ、貧居謹愼してゐるが、それでも時としては人の非難を受けたり神の嘲を蒙つたりする。夢のやうに愚者のやうにとぼとぼとしてゐるので、女兒は驚いて朝になつても起きず、妻は怪んで夜長嘆してゐる。朋友にも兄弟にも三年以來遇はないので、自然と離散を悲む情が起るので、敢て身の零落を恨むのではない。殊に去年の夏は元微之（稹の字）が瘧に罹り、今年の春は席八が死んだ。微之には手紙をやつたが屆いたかどうか。席八は地の下でかくとも知らずに眠つてゐるであらう。所在なき儘に詩卷を寫し、酒を飮みなどして見るが、唯悵恨を新にするだけで歡娛を復びすることは出來ず、壯志は減じ衰容は增すばかりだ。若し相逢ふとも頷に滿つる此白鬚では恐らくはわからぬであらう。

【餘論】 唐宋詩醇に「波瀾壯闊、筆力沈雄、代書百韻（卷十三に見ゆ）に較ぶれば更に勝れり。杜甫よ

り下輿に儷をなすこと罕なり」と評してある。馮舒曰く「先づ東南行の情景を敍し、情景に因りて前時を追念し、以て題の後先輕重を見す。代書一篇と體勢殊ること甚だし、各〻その情を致す。文章の變化物に因りて形を賦すること多く此に類す」と。

初到江州寄翰林張・李・杜三學士

初めて江州に到り、翰林の張・李・杜三學士に寄す

早攀霄(一)漢上天衢。
晩落風波委世途。
雨(二)露施恩無厚薄。
蓬(三)蒿隨分有榮枯。
傷禽側翅驚弓箭。
老婦低顏事舅姑。
碧(四)落三仙曾識面。
年深記得姓名無。

早に霄漢を攀ぢて天衢に上り、
晩に風波に落ちて世途に委す。
雨露恩を施して厚薄なく、
蓬蒿分に隨つて榮枯あり。
傷禽は翅を側てて弓箭に驚き、
老婦は顏を低れて舅姑に事ふ。
碧落の三仙曾て面を識る、
年深くして姓名を記得するや無や。

【字解】【一】霄漢　大空。天衢は天街、並に宮中に喩ふ。【二】雨露　天子の御恩に喩ふ。【三】蓬蒿　よもぎ。臣下に喩ふ。【四】碧落　天空なり。三仙は三人の翰林學士に喩ふ。

【題義】初めて江州に到著してから、翰林學士たる張・李・杜三氏に寄せた詩である。

【詩意】吾は宮中に奉仕するを得たが、後に失脚して俗界に降り、江州司馬に貶せられた。天子の御恩に厚薄はないのであるが、臣下の才分に應じて榮枯のあるのは已むを得ない。吾は傷禽と同じで弓矢の音を聞いても心を驚かし、顏を低れ謹んで舅姑に事へる老婦も同樣である。君等三人とは曾て相識の間柄であつたが、今後いつまでも吾が姓名を記憶に殘して下さるであらうか。

庾樓曉望

庾樓の曉望

獨憑朱(一)檻立凌晨。
山色初明水色新。
竹霧曉籠銜嶺月。
蘋(二)風煖送過江春。
子(三)城陰處猶殘雪。
衙(四)鼓聲前未有塵。
三百年來庾(五)樓上。
曾經多(六)少望鄉人。

獨り朱檻に憑り立つて晨を凌げば、
山色初めて明にして水色新なり。
竹霧曉に籠む嶺に銜まる月、
蘋風煖かに送る江を過ぐる春。
子城の陰處猶雪を殘し、
衙鼓聲前未だ塵あらず。
三百年來庾樓の上、
曾て多少望鄉の人をか經たる。

【字解】【一】朱檻　朱塗の欄干。【二】蘋風　浮草の上を吹く風。【三】子城　でじろ。本城に附屬して其外に張り出して築いた城。【四】衙鼓　役所で、時を告げるために鳴らす鼓。【五】庾樓　晉の庾亮が江州太守たりし時、僚屬を宴せし樓。【六】多少　どれだけ。いくらほど。

【題義】庾樓の上から曉に四方を眺めて作つた詩である。

【詩意】朱塗の欄干に憑り獨り立つて眺むれば、山も川も曉色明で目が覺めるやうだ。竹霧が山の端に懸る殘月を籠め、春風が暖に吹いて江上の蘋を撫で、子城の陰には猶雪が殘り、役所の鼓もまだ鳴らず塵も亦立たない。さて此樓が建てられてから既に三百餘年を經るが、其間に幾人の人が望鄉の淚を流したことであらう。

宿西林寺(一)

西林寺に宿す

木落天晴山翠開。
愛山騎馬入山來。
心知不及柴桑令(二)。
一宿西林便却回(三)。

木落ち天晴れて山翠開く、
山を愛し馬に騎り山に入り來る。
心に知る柴桑の令に及ばざるを、
一たび西林に宿して便ち却回す。

柴桑令、劉遺民也。

【題義】西林寺に一宿したことを述べた詩である。

【詩意】秋になつて木の葉が落ち天が晴れたので、山の翠色が一入よく見えるやうになつた。因つて

【字解】【一】西林寺　廬山に在る寺の名。
【二】柴桑令　柴桑は縣名。江西省九江縣の西南に在り。縣の長官を令といふ。柴桑令は劉遺民を指して言ふ。
【三】却回　還ること。

余は馬に乘つて廬山に遊んだが、柴桑令劉遺民の長逗留に似ず、僅に西林寺に一泊して早速立ち歸るのは誠に惜しい。

江樓宴別

江樓宴別

樓中別曲催離酌(一)。
燈下紅裙間綠袍(二)。
縹緲楚風羅綺薄(三)。
錚鏦越調管絃高(四)。
寒流帶月澄如鏡。
夕吹和霜利似刀(五)。
尊酒未空歡未盡(六)、
舞腰歌袖莫辭勞。

樓中の別曲離酌を催し、
燈下の紅裙綠袍に間る。
縹緲たる楚風羅綺薄く、
錚鏦たる越調管絃高し。
寒流月を帶びて澄鏡の如く、
夕吹霜に和して利刀に似たり。
尊酒未だ空しからず歡未だ盡きず、
舞腰歌袖勞を辭する莫れ。

【題義】江邊の樓上で送別の宴を張つたことを述べた詩である。

【詩意】美妓が離別の歌を歌つて別れの杯を勸め、燈下に紅裙が綠袍と相間つてゐる。風がそよそよ

【字解】【一】別曲　別れの歌。離酌は別れの杯。
【二】紅裙　美妓なり。綠袍は唐書車服志に、七品は服に綠を用ふとあり。衣服令に、六位は深綠衣、七位は淺綠衣とあり。司馬の服なり。
【三】縹緲　輕く擧る貌。羅綺は薄絹。
【四】錚鏦　音樂の聲。越調は商調樂律の名。
【五】夕吹　夕の風。
【六】尊酒　樽の酒。

と薄絹の衣を吹き、哀調の音が特に甲高く響く。江流は月を浮べて鏡のやうに澄み、夜の風は霜を帯びて刀のやうに利い。まだ酒も澤山あり歡興も盡きないから、歌ひつ舞ひつ十分に酒を勸めてくれよ。

題山石榴花

山石榴の花に題す

一叢千朶壓欄干、
剪碎紅綃却作團。
風嫋舞腰香不盡、
露銷粧臉淚新乾。
薔薇帶刺攀應懶、
菡萏生泥翫亦難。
爭及此花簷戸下、
任人採弄盡人看。

一叢千朶欄干を壓す、
紅綃を剪碎して却つて團と作す。
風舞腰を嫋して香盡きず、
露粧臉を銷して淚新に乾く。
薔薇は刺を帶びて攀づること應に懶かるべし、
菡萏は泥に生じて翫ぶこと亦難し。
爭でか及ばん此花簷戸の下、
人に任せて採弄せしめ人を盡して看しむるに。

【字解】【一】山石榴　やまつつじ。
【二】千朶　千枝。
【三】紅綃　紅の絹。
【四】嫋　うごかす。
【五】粧臉　化粧した顔。
【六】菡萏　蓮花。

【題義】山躑躅の花に題した詩である。

【詩意】山躑躅の花が叢を成して欄干を壓するほどの勢である。その花は紅の絹を剪り碎いて團となしたやうだ。風の吹く時は舞姫の腰の如く動いて香氣あたりに散じ、露のかかつた樣は花の顔に涙の始めて乾いたやうである。薔薇の花は美しくはあるが刺があるので一寸手が出せず、蓮の花は泥に生えてゐるので亦翫び難い。されば此花の簷先に咲き誇つて人の採弄に任せ人の看るに任せてゐるには到底及ばない。

代春贈

春に代りて贈る

山吐晴峰水放光。
辛夷花白柳梢黄。
但知莫作江西意、
風景何曾異帝鄉。

山は晴峰を吐き水は光を放つ、
辛夷花白く柳梢黄なり。
但知つて江西の意を作す莫れ、
風景何ぞ曾て帝鄉に異ならん。

【字解】【一】辛夷　木の名、こぶし。春花開く。
【二】江西意　江州に貶せられてゐる心持。
【三】帝鄉　天子の都、長安。

【題義】春に代つて己に贈つたといふ意である。

【詩意】山は晴峰を現し水は光を湛へ、辛夷の花は白く柳の梢は黄色に煙つてゐる。實に美しい春景色である。君自ら心して江州に貶謫せられてゐるといふ考を棄て給へ。此景色は長安の春色と少しも異る所はないではないか。

答春　春に答ふ

草煙低重水花明。　草煙低れ重くして水花明かなり、
從道風光似帝京。　從道らく風光帝京に似たりと。
其奈山猿江上叫。　山猿の江上に叫ぶを其奈せん、
故鄉無此斷腸聲。　故鄉は此斷腸の聲なし。

【題義】樂天が春に答へる詩で、前の代〻春贈に對する答である。

【詩意】山上には草煙が重く低れ水邊には花が美しく咲いてゐる。春色は長安と異ひはないと言ふが成程尤もである。ただ山猿が江邊に鳴くのを如何ともすることが出來ない。長安にはあんな腸を千切るやうな猿聲はない。

【字解】【一】帝京　天子の都、長安。

【二】故鄉　長安を指して言ふ。

櫻桃花下歎白髮　櫻桃花下白髮を歎ず

逐處花皆好。隨年貌自衰。　處を逐うて花皆好し、年に隨つて貌自ら衰ふ。
紅櫻滿眼日。白髮半頭時。　紅櫻眼に滿つる日、白髮頭に半なる時。
倚樹無言久。攀條欲放遲。　樹に倚つて言無きこと久しく、條に攀ぢて放たんと欲して遲し。

【字解】【一】櫻桃花　ゆすらうめ。

【題義】櫻桃の花の下で白髮を歎息した詩である。

【詩意】花は到處美しいが吾は一年增しに老いる。今や見渡す限り紅の櫻桃の花が咲いてゐるが、吾は淋しく斑白の頭をして此に對してゐる。感慨に滿ちて樹に倚りて久しく立ち、枝を攀ぢて容易に放さうともせず、春風に臨んで雪の如く絲の如き白髮を嘆ずるのみである。

臨風兩堪歎。如雪復如絲。　風に臨んで兩ながら歎くに堪へたり、雪の如く復絲の如し。

【字解】【一】櫻桃花　ゆすらうめ。

【題義】櫻桃の花の下で白髮を歎息した詩である。

【詩意】花は到處美しいが吾は一年增しに老いる。今や見渡す限り紅の櫻桃の花が咲いてゐるが、吾は淋しく斑白の頭をして此に對してゐる。感慨に滿ちて樹に倚りて久しく立ち、枝を攀ぢて容易に放さうともせず、春風に臨んで雪の如く絲の如き白髮を嘆ずるのみである。

惜落花。贈崔二十四　落花を惜む、崔二十四に贈る

漠漠紛紛不奈何。　漠漠紛紛として奈何ともせず、
狂風急雨兩相和。　狂風急雨兩ながら相和す。
晚來悵望君知否。　晚來悵望君知るや否や、
枝上稀疎地上多。　枝上は稀疎にして地上は多し。

【題義】落花を惜む詩で、崔二十四に贈つたのである。

【詩意】狂風と急雨との爲に紛紛と散り落ちて奈何ともすべからず。晚來吾が悵望した所の狀をば君

【字解】【一】漠漠紛紛　落花の貌。

【二】稀疎　まばらに殘る。

知るや否や。枝に殘つてゐる花は稀で地上に落ちてゐるのは多い。

移二山櫻桃一

山櫻桃を移す

亦知二官舍非一レ吾宅一。　亦官舍の吾宅に非ざるを知るも、
且劚二山櫻一滿レ院栽。　且く山櫻を劚り院に滿ちて栽う。
上佐近來多二五考一。　上佐近來五考多し、
少レ應二四度見一花開一。　應に四度花の開くを見るべきこと少し。

【題義】野生の櫻桃樹を移し植ゑたことを述べた詩である。

【詩意】官舍は自分の家ではなく、一時の假住ひに過ぎないことは知つてゐるが、且らく山の櫻桃樹を斬つて來て庭中に植ゑた。併し近來司馬の職は大抵五年で遷任になる例だから、今後四度花の開くのを見ることは出來まい。

【字解】【一】上佐　司馬をいふ。五考は五年目に成績を吟味し、その善惡によりて黜陟すること。

官舍閒題

職散優閒地。身慵老大時。

官舍閒題

職は散なり　優閒の地、身は慵し老大の時。

送レ春唯有レ酒。銷二日不一レ過レ碁。
祿米舂二麼牙一稻。園蔬鴨脚葵。
飽餐晨晏起。餘暇弄二龜兒一。

龜兒卽小姪名。

【字解】【一】散　閑散なり。【二】銷レ日　日をすごす。【三】麼牙稻　鹿の齒の如き白米。【四】園蔬　畠の野菜。鴨脚葵は鴨の掌に似てゐる葵。【五】龜兒　樂天の姪の名。

【題義】閑暇の時、官舍の壁に題した詩である。

【詩意】吾が職は至つて閑散であるが、年老いて萬事に大儀である。ただ酒を飲んで春を送り、碁を打つて日を過ごし、鹿の齒の如き祿米と鴨の脚の如き野菜とを飽食し、朝もゆつくり寢て、暇になれば龜兒を相手に遊んでゐる。

晚春登二大雲寺南樓一贈二常禪師一

晚春大雲寺の南樓に登る、常禪師に贈る

花盡頭新白。登レ樓意若何。
歲時春日少。世界苦人多。

花盡きて頭新に白し、樓に登つて意若何。
歲時春日少く、世界苦人多し。

愁酔非レ因レ酒。悲吟不二是歌一。愁酔は酒に因るに非ず、悲吟は是れ歌ならず。
求二師治一此病一。唯勸讀二楞伽一。師に此病を治せんことを求むれば、唯楞伽を讀まんこと」を勸む。

【字解】【一】楞伽　佛經の名。

【題義】春の末に大雲寺の南樓に登り常禪師に贈つた詩である。

【詩意】花が散つて吾が頭髪は更に白い。此時南樓に登つて心を痛ましめた。春の日は特に過ぎ易く、世間には苦勞してゐる人が多い。吾も酒を飲まずとも愁酔し、歌ならずして悲嘆してゐる。常禪師に此病を治する法を問へば、ただ楞伽經を讀むがよいと勸めた。

北樓送客歸二上都一

北樓にて客の上都に歸るを送る

憑レ高眺レ遠一悽悽。高きに憑つて遠きを眺むれば一に悽悽たり、
却下二朱欄一手共攜。却つて朱欄を下つて手共に攜ふ。
京路人歸天直レ北。京路人歸つて天北に直り、
江樓客散日平レ西。江樓客散じて日西に平かなり。
長津欲レ渡廻二船尾一。長津渡らんと欲して船尾を廻し、
殘酒重傾簇二馬蹄一。殘酒重ねて傾けて馬蹄を簇す。

【字解】【一】上都　京都、長安なり。
【二】悽悽　かなしむ貌。
【三】朱欄　朱塗の欄干。
【四】長津　長き渡場。
【五】強飲　強ひて酒を飲む。

不獨別レ君須二強飲一。獨君に別れて強飲するを須ふるのみならず、
窮愁自要醉如レ泥。窮愁は自ら醉うて泥の如くならんことを要す。

【題義】北樓で長安に歸る客を送つた詩である。

【詩意】高樓の上から遙に長安の方を眺めて心を痛ましめ、客と手を攜へて朱塗の欄干を下つた。客は此から北を指して長安に歸るのであるが、江樓には人散じて日も西に傾いた。客は舟に乘つて長津を渡らんとし、人は重ねて殘酒を傾けて其行を送る。吾はただ君と別れるのを惜んで強飲するばかりではなく、己の窮愁が自然と泥の如く醉ふことを要するのである。

北亭招レ客

北亭に客を招く

疎散郡丞同二野客一。疎散なる郡丞は野客に同じく、
幽閒官舍抵二山家一。幽閒なる官舍は山家に抵る。
春風北戶千莖竹、春風北戸千莖の竹、
晚日東園一樹花。晩日東園一樹の花。
小盞吹レ醅嘗二冷酒一。小盞醅を吹いて冷酒を嘗め、
深爐敲レ火炙二新茶一。深爐火を敲いて新茶を炙る。

【字解】【一】郡丞　郡の司馬をいふ。野客は野人。
【二】幽閒　閑靜なこと。山家は野人の家。
【三】小盞　小き杯。醅は濁酒。
【四】盡日　終日。宮槀は槀を園むこと。

能來盡日宮棊否。能く來つて盡日宮棊するや否や、
太守知慵放晚衙。太守慵きを知つて晚衙を放せり。

【題義】北亭に客を招く詩である。

【詩意】閑散な司馬の職は野人も同樣で、又その官舍は民家と相對してゐる。今や北窓の竹林には春風が吹き、夕方の東園には花が咲いてゐる。吾は爲す事もなく濁酒を傾けたり新茶を煮じたりしてゐるが、君も一日碁を打ちに來ては如何であるか。長官も吾の疎懶を知つて今日は晚衙を廢してくれたから。

宿西林寺早赴東林滿上人之會因寄崔二十二員外

西林寺に宿し、早に東林の滿上人の會に赴く、因つて崔二十二員外に寄す

謫辭魏闕鵷鸞隔。謫せられて魏闕を辭して鵷鸞に隔り、
老入廬山麋鹿隨。老いて廬山に入りて麋鹿に隨ふ。
薄暮蕭條投寺宿。薄暮蕭條として寺に投じて宿し、
凌晨清淨與僧期。凌晨清淨にして僧と期す。
雙林我起聞鐘後。雙林我起きて鐘を聞いて後、
隻日君趨入閣時。隻日君趨つて閣に入る時。
鵬鷃高低分皆定。鵬鷃高低分皆定まる、
莫勞心力遠相思。心力を勞して遠く相思ふこと莫れ。

【題義】西林寺に宿し翌朝早く東林寺の滿上人の會に赴きし事を述べて長安の崔員外(崔韶であらう)に寄せた詩である。

【詩意】貶謫せられて宮闕を去り官列を隔り、今は老いて廬山に入り麋鹿を侶としてゐる。昨夕は物淋しき山寺に投じて一泊し、今朝は東林寺の僧と會談する。我は寺に起きて鐘の音を聞いてゐるが、君は奇日に宮廷に參朝するであらう。君は鵬の如く高く飛び、我は尻鷃の如く低く飛ぶのは、定まれる天分の致す所で、自分もそれに安んじてゐるから、遙遙心を勞して我を心配して下さるな。

【字解】【一】西林寺　廬山に在る寺の名。【二】東林　廬山に在る寺の名。【三】魏闕　宮闕。鵷鸞は百官の列。【四】蕭條　淋しき貌。【五】凌晨　朝早く。【六】雙林　寺をいふ。【七】隻日　奇數の日。唐書穆宗紀に「唐制、天子隻日を以て朝を視る。乃ち轂朝放朝を命ずる皆隻日を用ふ」とある。【八】鵬鷃　鵬は大鳥の名、崔員外に喩ふ。鷃は小鳥の名、樂天自ら喩ふ。

【五】太守　郡の長官。晚衙　は夕方官吏が長官の前に集つて禮式を行ふこと。

遊寶稱寺

寶稱寺に遊ぶ

竹寺初晴日。花塘曉欲春。
野猿疑弄客。山鳥似呼人。
酒嫩傾金液。茶新碾玉塵。

竹寺初めて晴るる日、花塘曉けんと欲する春。
野猿客を弄するを疑ひ、山鳥人を呼ぶに似たり。
酒嫩にして金液を傾け、茶新にして玉塵を碾る。

可(三)憐幽靜地。堪(レ)寄(二)老慵身(一)。　憐むべし幽靜の地、老慵の身を寄するに堪へたり。

【字解】【一】金液　酒の色を見立てていふ。【二】玉塵　ひき茶の粉。【三】可(レ)憐　愛すべし。

【題義】寶稱寺に遊んで作つた詩である。

【詩意】寶稱寺は竹林の側、花塘の邊に在つて、余の遊んだ時は正に晴れた曉であつた。あたりに出沒する猿は人を愚弄するが如く、飛びかふ鳥は人を呼ぶが如くである。黃金色をした美酒を酌み、玉塵の如き新茶を飮みなどして樂んだ。實に愛すべき閑靜な地で、余の老いて萬事に懶き身を寄せるには究竟な處だ。

早春聞(二)提壺鳥(一)因題(二)隣家(一)　早春提壺鳥を聞き、因つて隣家に題す

厭(レ)聽秋猿催(二)下淚(一)。　聽くを厭ふ秋猿の下淚を催すを、
喜聞春鳥勸(二)提壺(一)。　喜び聞く春鳥の提壺を勸むるを。
誰家紅樹先花發。　誰が家の紅樹ぞ先づ花發く、
何處靑樓有(レ)酒沽。　何處の靑樓にか酒有つて沽る。
進士麤豪尋(レ)靜盡。　進士の麤豪は靜を尋ねて盡きぬ、
拾遺風彩近(レ)都無。　拾遺の風彩は都なるに近きや無や。
欲(レ)期(二)明日東林(一)醉。　明日東林に醉ふことを期せんと欲すれば、
變作騰騰一俗夫。　變じて騰騰たる一俗夫と作る。

【字解】【一】提壺鳥　鳥の名。【二】下淚　淚を落す。【三】提壺　壺を挈へて酒を買ふこと。【四】拾遺　官名。樂天嘗て左拾遺たり。【五】東林　廬山に在る寺の名。

【題義】早春の候、提壺鳥の鳴くのを聞き、隣家に題した詩である。

【詩意】秋の猿の淚を催す聲を聞くのはいやなものだが、春になつて提壺鳥の壺を挈へて酒を買ふことを勸めるのを聞くのは嬉しいものだ。誰の家か知らぬが先づ花の開いてゐるのを見るにつけ、何處か酒樓を尋ねて酒を買はうと思つた。吾が嘗て進士たりし頃の豪氣は今既に消し、拾遺たりし時の都雅なる風彩も今は既に存しない。且明日は東林寺に遊んで醉はうと思つてゐるので、忽ち騰騰たる一俗人と化してしまつた。

見(二)紫薇花(一)憶(二)微之(一)　紫薇花を見て微之を憶ふ

一叢暗(二)澹將何比。　一叢暗澹たり將何にか比せん、
淺碧籠(レ)裙襯(二)紫巾(一)。　淺碧裙に籠めて紫巾に襯す。
除(二)却微之見應(レ)愛。　微之が見ば應に愛すべきを除却して、

【字解】【一】紫薇花　百日紅なり。花は紅紫或は白。【二】暗澹　鮮艷ならざること。【三】除却　のぞく。

(四)人間少レ有二別レ花人一。　人間花を別つ人有ること少し。　〜【四】人間・世間。

【題義】百日紅の花を見て元稹を憶うた詩である。

【詩意】一叢のあまり冴えない百日紅の花がある。此花を何に比すべきかとならば、淺碧の裙に紫巾を取合せた姿に似てゐるとでも言はうか。若し元稹が見たら必ず氣に入るであらうと思ふ。彼を除いては世間に能く花を識別する人は極めて少い。

薔薇花一叢。獨死不レ知二其故一。因有二是篇一

薔薇花一叢、獨り死れて其故を知らず、因つて是篇あり

(二)柯條未二嘗損一。(三)根蘡不二曾移一。　柯條未だ嘗て損せず、根蘡曾て移さず。
同類今齊茂。孤芳忽獨萎。　同類今齊しく茂り、孤芳忽ち獨萎む。
仍憐委レ地日。正是帶レ花時。　仍て憐む地に委する日、正に是れ花を帶ぶる時。
碎碧初凋レ葉。(二)燋紅尚戀レ枝。　碎碧初めて葉を凋ませ、燋紅尚枝を戀ふ。
(四)乾坤無二厚薄一。草木自榮衰。　乾坤厚薄無く、草木自ら榮衰す。
欲レ問レ因二何事一。春風亦不レ知。　何事に因るを問はんと欲するも、春風亦知らず。

【字解】【二】柯・條。枝。【三】根・蘡。薔字意義未詳。【二】燋・紅　火の如き紅色。【四】乾・坤　天地の恩惠。

【題義】一叢の薔薇の花が何故とも知らず枯死したのを見て此詩を作つて感慨を寓したのである。

【詩意】枝をも損せず根をも移さない。然るに今迄同類相倚つて皆齊しく茂つてゐたのが、ただ一叢だけ枯れた。丁度それが花の咲く大事な時に地に落ちたのである。碧玉を碎いたやうな葉が凋み、火のやうに紅な花が尚枯枝についてゐる。これは天地の惠に厚薄があるわけではあるまい。草木が自ら榮えたり衰へたりするのであらう。何故に枯れたかと春風に問うたが、春風も知らぬさうな。

湖亭望レ水

湖亭にて水を望む

久雨南湖漲。新晴北客過。　久雨南湖漲り、新晴北客過る。
日沈看二紅影一。風定綠無レ波。　日沈みて紅影有り、風定まつて綠波無し。
岸沒(三)閭閻少。灘平(三)船舫多。　岸沒して閭閻少く、灘平かにして船舫多し。
(四)可レ憐心賞處。其奈二獨遊一何。　憐むべし心に賞する處、其れ獨遊を奈何せん。

【字解】【二】北・客　北地から來た人。樂天自ら謂ふ。【三】閭・閻　里巷の門。【三】船・舫　ふね。【四】可・憐　愛すべしの意。

【題義】湖亭の上から湖水を眺めて作つた詩である。

律詩　薔薇花一叢獨死不知其故因有是篇　湖亭望水

【詩意】久雨が降つて湖水が漲つてゐる時、北客たる我は新晴に乘じて湖亭に遊びに來た。折しも日は西に傾いて紅影を沈め、風が靜まつて綠波も立たない。水が增してゐるので岸が隱れて里門まで水にひたり、灘が平かで船が澤山碇泊してゐる。誠に賞玩するに足る好い景色であるが、ただ語らふ友もなき獨遊であるのが物足りない。

閒遊

外事因㆑慵廢。中懷與㆑靜期。　外事は慵きに因つて廢し、中懷は靜と期す。
尋㆑泉上㆑山遠。看㆑笋出㆑林遲。　泉を尋ね山に上ること遠く、笋を看て林を出ること遲し。
白石磨㆓樵斧㆒。青竿理㆓釣絲㆒。　白石樵斧を磨ぎ、青竿釣絲を理む。
澄清深淺好。最愛夕陽時。　澄清にして深淺好し、最も愛す夕陽の時。

【字解】【一】中懷　心中のおもひ。【二】樵斧　木を伐る斧。

【題義】春日閑遊の情景を述べた詩である。

【詩意】疎懶の性から一切世事を拋擲し、ただ靜寂を以て心を樂ましめてゐる。或は谷川の泉を尋ねて山に登り、或は筍を視て林の中をさまよひ、白石を見ては斧を磨ぎ、青竹を見ては釣絲を作りなどして、湖邊に往つて釣を垂れると、水が澄んでゐて深さも程よく、夕日のさす頃の景が殊に宜しい。

憶㆓微之㆒傷㆓仲遠㆒　李三仲遠は去年春喪す
幽獨辭㆑羣久。漂流去㆑國賒。　微之を憶ひ仲遠を傷む
只將㆑琴作㆑伴。唯以㆑酒爲㆑家。　幽獨にして羣を辭すること久しく、漂流して國を去ること賒し。
感㆑逝因看㆑水。傷㆑離爲見㆑花。　只琴を將て伴と作し、唯酒を以て家と爲す。
李三埋㆓地底㆒。元九謫㆓天涯㆒。　逝に感じて因つて水を看、離を傷んで爲に花を見る。
舉㆑眼青雲遠。回㆑頭白日斜。　李三は地底に埋まり、元九は天涯に謫せらる。
可㆓能勝㆒賈誼㆒。猶自滯㆓長沙㆒。　眼を擧ぐれば青雲遠く、頭を回せば白日斜なり。
能く賈誼に勝る可けんや、猶自ら長沙に滯る。

【字解】【一】賈誼　漢の文帝に仕へて寵あり超遷して太中大夫に至る。絳灌等の毀に遇ひ、出されて長沙王の太傅となる。帝の ち誼を思ひ宣室に召見し、鬼神の事を問ひ夜半に至る。梁王の太傅に拜せられ、治安策を上る。

【題義】元稹の謫せられて通州に在るを憶ひ、李仲遠（名は固言か、卷六に具ゆ）の死亡を傷んで作つた詩である。

【詩意】僕は友達の仲間を離れて孤獨になり、貶謫せられて遠く國都を去つてから、既に久しき歲月を經た。ただ琴を彈いて自ら慰め、酒を飮んで憂を霽らしてゐる。李三の死に感じては一度去れば復

と還らぬ逝く水を看、元九に離れてゐることを傷んでは、倶に花を賞した昔を追想して、感慨深く花を見などしてゐる。今や李三は地下に埋められ、元九は天涯に謫せられ、眼を擧げても青雲遠くして見えず、頭を回らせば唯白日の西に傾けるを見るのである。飜つて自ら思へば、我身は遙に漢の賈誼に劣り、今以て長沙（江州に喩ふ）に留滯して君の召見に預ることも出來ずにゐる。

過鄭處士

鄭處士に過る

聞道移居村塢間。聞道らく居を村塢の間に移し、
竹林多處獨開關。竹林多き處獨關を開くと。
故來不是求他事。故に來るは是れ他事を求むるならず、
暫借南亭一望山。暫く南亭を借りて一たび山を望まん。

【題義】鄭處士の新宅を訪うて作つた詩である。

【詩意】君は此頃村堤の邊に新居を構へ、竹林の茂つた處に門を設けたと聞いた。今日故に僕が來たのは他に求むる所があるのではない。ただ暫く君の南亭を借りて山を眺めて樂まうといふ魂膽だ。

【字解】【一】村塢　村堤といふが如し。

霖雨苦多。江湖暴漲。塊然獨望。因題北亭

霖雨苦だ多く、江湖暴に漲るとき、塊然として獨り望み、因て北亭に題す

自作潯陽客。無如苦雨何。潯陽の客と作つてより、苦雨を如何ともする無し。
陰昏晴日少。閒悶睡時多。陰昏晴日少く、閒悶睡時多し。
湖闊將天合。雲低與水和。湖闊うして天と合ひ、雲低れて水と和す。
籬根舟子語。巷口釣人歌。籬根舟子語り、巷口釣人歌ふ。
霧鳥沈黃氣。風帆蹴白波。霧鳥黃氣に沈み、風帆白波を蹴れり。
門前車馬道。一宿變江河。門前車馬の道、一宿にして江河に變ず。

【字解】【一】霖雨　ながあめ。【二】塊然　孤獨の貌。【三】潯陽　江州なり。【四】陰昏　くもつて暗きこと。【五】舟子　船頭。

【題義】霖雨が降り續いて江も湖も俄に漲りし時、獨り四方を望見した景情を述べた詩である。

【詩意】江州司馬に貶せられてから以來、いつも霖雨にやまされて如何ともすることが出來ない。常に曇つてゐて晴れる日は少く、氣もくさくさして睡てばかりゐる。遠くを見れば湖水が急に闊くなつて天と合し、雲が垂れて水と相接してゐる。近くを見れば垣根のあたりにも船頭が語り合ひ、巷の口にも釣師が歌つてゐる。いつしか夕方になつて、霧の中の鳥も夕闇に沒し、風を孕んだ帆が白波を蹴立てて走る。吾が門前の車馬の往來する道すら、一晩越せば忽ち江河と變じてしまふ。

春末夏初閒遊江郭二首

溢浦多レ魚、浦西有二楊侍郎宅一、多二好竹一。

林逈穿レ籬筍。藤飄落レ水花。
雨埋釣舟小。風颺酒旗斜。
嫩剝青菱角。濃煎白茗芽。
淹留不レ知レ夕。城樹欲レ栖レ鴉。

【字解】【一】輕屐　輕い下駄。【二】溢浦　溢水の長江に注ぐ口。江西省九江縣に在る。【三】白茗　茶なり。【四】淹留　久しく留る。

【題義】春の末、夏の初に江邊の町を遊びまはつた景況を述べた詩である。

【詩意】輕い下駄をはいて軟な沙原を徐行し、溢浦の邊で游魚を觀、楊家に入つて竹を賞した。近くには垣根を衝き拔いて聳える筍や、水上に落ちる藤の花などが見え、遠くには雨に埋められた釣舟や風に飜る酒店の旗などが見える。菱の果の嫩なのを剝いで食べ、新茶を煎じて飮みなどして、覺えず時刻を移して夕方になり、いつしか烏が樹の上に啼くやうになつた。

〔一〕

柳影繁初合。鶯聲澁漸稀。
早梅迎レ夏結。殘絮送レ春飛。
西日韶光盡。南風暑氣微。
展二張新小簟一。熨二帖舊生衣一。
綠蟻杯香嫩。紅絲鱠縷肥。
故園無二此味一。何必苦思レ歸。

【字解】【一】澁　鶯の舌の能くまはらぬこと。【二】殘絮　絮は柳の花。【三】韶光　春光。【四】熨帖　ひのしをかけて皺を伸ばす。生衣は夏著。かたびらの類。【五】綠蟻　濁酒。【六】紅絲　膾なり。我邦の刺身の如きもの。【七】故園　故郷。長安を指して言ふ。

【詩意】早や春も過ぎて夏になつたので、柳の絲も繁り合ひ、鶯の舌も滑になり、早梅の實も結び柳絮も飛び散り、春光も盡きて暑氣が催したので、新しい簟を展べ、古い夏著を出して熨斗をかけなどした。杯中の濁酒は香氣が高くて風味柔かに、絲の如き膾は細くして肉が肥えてゐる。此味は到

底故郷の長安では得られない。」して見れば何も、くよくよ歸りたがるにも及ばぬ事ぢや。

紅藤杖　杖出二南蠻一。

南詔紅藤杖。西江白首人。
時時攜歩レ月。處處把尋レ春。
勁健孤莖直。疎圓六節勻。
火山生處遠。瀘水洗來新。
粗細纔盈レ手。高低僅過レ身。
天邊望レ鄉客。何日拄歸レ秦。

【字解】【一】南詔　南方の國の名。【二】西江　江州。白首人は白髪の人、樂天自ら謂ふ。【三】火山　神異經に「南荒の外に火山あり。晝夜火燃え、暴風雨と雖も滅せず」とある。【四】瀘水　方輿紀要に「瀘水は其源を若水といふ。下流を瀘水といふ。金沙江に入る」とある。【五】秦　長安を指して言ふ。

【題義】紅藤の杖を詠じた詩である。

【詩意】江州に貶謫せられてゐる白髪の老人たる我は、常に南詔産の紅藤の杖を攜へて、或は月下を散歩し、或は春色を探りなどする。此杖は眞直で丈夫であり、又圓味があつて六つの節が正しく整つてゐる。火山といふ遠地に産し瀘水の水で洗つた珍品である。僅に把に滿つる程の太さで身の丈を過ぎる程の高さである。天涯に故郷を望みつつある我は、いつ此杖をついて長安に歸れるであらう。待ち遠しいことだ。

風雨中尋李十一。因題船上

匹馬來郊外。扁舟在水濱。
可レ憐衝レ雨客。來訪阻レ風人。
小榼沽清醑。行厨煮白鱗。
停レ杯看柳色。各憶故園春。

【字解】【一】匹馬　一匹の馬。【二】扁舟　小舟。【三】衝レ雨客　樂天自ら謂ふ。【四】阻レ風人　李十一を指す。【五】小榼　小さき酒樽。清醑は清酒。【六】行厨　辨當。【七】故園　故郷。長安を指していふ。

【題義】李十一は李建、字は杓直であらう。其の澧州（湖南省に屬す）に貶せられたことは前の東南行と題する詩に見える。此詩は李十一が風雨に阻てられて、其船に題したのである。

【詩意】僕は馬に跨つて郊外に來り、君は扁舟を泛べて水濱に居る。僕が雨を冒して君を訪へば、君

は風に阻てられて僕を待つてゐた。因つて清酒を買つて來て酒樽を傾け、白い煮魚の辨當を開いて歡をなした。が、俱に貶謫の身であるから、杯を停めて岸頭の柳色を看、遙に故郷の春を憶ひ遣つた。

題廬山山下湯泉

廬山山下の湯泉に題す

一眼湯泉流向東。一眼の湯泉流れて東に向ふ、
浸泥澆草煖無功。泥を浸し草に澆いで煖にして功無し。
驪山溫水因何事。驪山の溫水何事に因り、
流入金鋪玉甃中。流れて金鋪玉甃の中に入る。

【題義】廬山の麓に在る湯泉に題し、暗に感慨を寓した作である。

【詩意】一筋の湯の川が東に向つて流れてゐる。泥や草の間を流れ煖ではあるが何の效能もない。此に比すれば驪山の溫泉などは雲泥の相違で、金鋪の飾つてある門の中の玉を敷き詰めた流しの上を流れてゐる。これといふも治病の效能があるからだ。

【字解】【一】一眼　一筋の細き流をいふ。顧況の送李山人還三玉溪一詩に、若爲種得千竿竹、引取君家一眼泉とある。【二】驪山　長安の近所に在る山の名。山に溫泉あり。【三】金鋪　門の上を飾る金具。玉甃は玉を敷きつめた流し。

寄薪州簟與元九因題六韻

薪州簟を寄せて元九に與へ、因つて六韻を題す　時に元九鰥居す

笛竹出薪春。霜刀劈翠筠。
織成雙鎖簟。寄與獨眠人。
卷作筒中信。舒爲席上珍。
滑如鋪薤葉。冷似臥龍鱗。
清潤宜乘露。鮮華不受塵。
通州炎瘴地。此物最關身。

【字解】【一】笛竹　笛にする竹。陳鼎の竹譜に「薪竹は三節の稱あり、色瑩なるものは簟となし、節疏なるものは笛となし、鬚を帶ぶるものは杖となす」とある。●薪春は薪州なり。【二】霜刀　霜の如く鋭く光る刀。●翠筠は綠の竹。【三】薤葉　大韭の葉。

【題義】薪州（湖北省黃州府に屬し、竹の名所である）產の簟を通州司馬に貶せられてゐる元稹に寄贈するに就いて其上に題した詩である。時に元稹は妻を喪つて鰥居であつた。

【詩意】薪州から產出する笛竹を刀で劈いて二束の簟を織り獨寢の君に贈る。今之を卷いて筒中の書信に代用し、舒べて君が席上の珍具とする。滑なことは薤の葉を敷いたやうで、冷なことは龍の鱗に臥したやうである。その淸潤なことは露をも乘すべく、鮮麗なことは塵をも留めない。君の居る通州は炎暑の烈しい地だから、此が殊に身の爲に必要であらう。

秋熱

西江風候接南威(一)、暑氣常多秋氣微。
猶道江州(二)最涼冷、至今九月著生衣(三)。

【題義】江州の秋熱の狀を述べた詩である。

【詩意】西江の風候は南威に近いので、常に暑氣が烈しく、秋になつても涼しくはない。それにも拘らず、土地の人は慣れたもので、江州は此邊では一番涼しいのだと謂つて、九月の今日まで猶夏著を著てゐる。

【字解】【一】南威　南方の地名。
【二】江州　樂天の居る處。
【三】生衣　夏著をいふ。かたびらの類。

題元八溪居

溪嵐漠漠樹重重(一)、水檻山牕次第逢(二)。
晩葉尚開紅躑躅(三)、秋房初結白芙蓉(四)。
聲來枕上千年鶴、影落杯中五老峯(五)。
更媿殷勤留客意(六)、魚鮮飯細酒香濃。

【題義】元八が溪間に作つた居室に題した詩である。

【詩意】溪間の嵐氣が深く罩めて樹林の鬱鬱と茂つてゐる處に、元八の居室が在つて、あちらには水檻があり、こちらには山窓がある。山窓を開けば遲唉の躑躅の花がまだ唉いて居り、水檻に凭れば白蓮の實が既に結んで居る。午睡をすれば千年の齡を保つ鶴の聲が聞え、酒を飲めば五老峯の影が杯にうつる。誠に一仙境である。更に感謝に堪へぬことは主人元公が懇に我を引留め、魚飯・酒すべて吟味して饗せられたことだ。

【字解】【一】溪嵐漠漠　布列の貌。
重重は茂る貌。
【二】水檻　水に臨める欄干。山牕は山に向へる窓。
【三】紅躑躅　紅のつつじの花。
【四】秋房　蓮の實。白芙蓉は白蓮。
【五】五老峯　廬山の峯の名。
【六】更媿　其上にも感謝すべきはといふ意。殷勤は、ねんごろに。

晩出西郊

散吏閒如客(一)、貧州冷似村(二)。
早涼湖北岸、殘照郭西門(三)。

晩に西郊に出づ

散吏は閑にして客の如く、貧州は冷にして村に似たり。
早涼湖北の岸、殘照郭西の門。

嬾(四)鑷從鬚白。休醫任眼昏。　鑷するに嬾くし鬚の白きに從せ、醫するを休め眼の昏き
老來何所用。少興不多言。　老來何の用ふる所ぞ、興少くして多く言はず。に任す。

【字解】【一】散吏　閑散な官吏。樂天自ら謂ふ。【二】貧州　貧しき州。江州を指して言ふ。【三】殘照　夕日。【四】鑷　毛拔で拔くこと。

【題義】秋の初に郊外を散歩した情景を述べた詩である。

【詩意】我は官史とはいひながら、まるで閑散で御客分みたいなもので、また江州は貧州だから村よりも淋しい位だ。爲す事もなく、秋の初の夕に湖北郭西の郊外を散歩する我は、拔くのも面倒なので鬚の白きに任せ、療治もせずに見えぬ眼を抛つて置く。老いて以來何をしてゐるかといへば、萬事に感興が湧かないので、ただ默默としてゐるばかりだ。

階下蓮　階下の蓮

葉展影翻當砌(一)月。　葉展び影翻る砌に當る月、
花開香散入簾風。　花開き香散ず簾に入る風。
不如種在天池上。　如かず種ゑて天池の上に在らんには、
猶勝生於野水中。　猶野水の中に生ずるに勝れり。

【字解】【一】砌　みぎり。階の石疊。

【題義】階下の蓮花の高潔な樣を述べて暗に感慨を寓した作である。

【詩意】まともに砌にさす月の下に葉が展び影が飜り、簾に入る涼風の中に香氣が漂つてゐる。實は天池の上に種ゑ置くべきもので、野水の中に置くのはあまりに惜しい。

端居(一)詠懷　端居して懷を詠ず

賈(二)生俟罪心相似。　賈生罪を俟つ心相似たり、
張(三)翰思歸事不如。　張翰歸を思ふ事如かず。
斜(四)日早知驚鵩鳥。　斜日早く知る鵩鳥に驚くを、
秋風悔不憶鱸魚。　秋風鱸魚を憶はざるを悔ゆ。
胸襟曾貯匡(五)時策。　胸襟曾て貯ふ匡時の策、
懷袖猶殘諫(六)獵書。　懷袖猶殘す諫獵の書。
從此萬(七)緣都擺落。　此より萬緣都て擺落し、
欲攜妻子買山居。　妻子を攜へて山居を買はんと欲す。

【字解】【一】端居　平居といふが如し。正しく坐すること。【二】賈生　漢の賈誼。漢の文帝に仕へて寵あり。絳灌等の毀に遇ひ、出されて長沙王の太傅となる。居ること三年鵩鳥あり飛んで舍に入り座隅に止る。乃ち鵩鳥賦を作りて以て自ら廣うす。鵩鳥は、みみづく。不祥の鳥なり。【三】張翰　晉の吳の人、洛陽に入る。齊王冏辟して大司馬東曹掾となす。秋風の起るに因りて吳中の菰菜・蓴羹・鱸魚膾を思ひ、遂に駕を命じて歸る。【四】斜日　夕日。【五】匡時策　時弊を匡救する策。【六】諫獵書　漢の司馬相如諫獵書を作る。【七】萬緣　世間の係累。

【題義】閑居して自己の感想を述べた詩である。

【詩意】吾が心は長沙に貶せられた賈誼の心に似、故郷に歸りたくは思へども、張翰が其思を全うしたのには及ばない。されば夕方に鵬鳥に驚くことは賈誼と同じであるが、秋風に鱸魚の膾を憶ひ出すことは張翰に及ばぬ譯である。時弊を匡救する意見も君主を諫むる赤誠も持ち合せては居るが、不幸にして施行する機會を得ない。いつそ世間の羈絆を振り拂つて、妻子を攜へて山にでも籠らうかと思ふ。

夜宿江浦聞元八改官因寄此什

夜江浦に宿し、元八の官を改むるを聞き、因つて此什を寄す

君遊丹陛已三遷。　君は丹陛に遊んで已に三たび遷る、
我汎滄浪欲二年一。　我は滄浪に汎んで二年ならんと欲す。
劍珮曉趨雙鳳闕。　劍珮曉に趨る雙鳳闕、
煙波夜宿一漁船。　煙波夜宿す一漁船。
交親盡在青雲上。　交親盡く在り青雲の上、
鄉國遙拋白日邊。　鄉國遙に拋つ白日の邊。
若報生涯應笑殺。　若し生涯を報せば應に笑殺すべし、
結茅栽芋種畬田。　茅を結び芋を栽ゑ畬田に種う。

【題義】夜江邊に宿し元八（汪立名は元宗簡であると註してゐる）が轉任になつた事を聞いて此詩篇を寄せたといふのである。

【詩意】君は宮廷に仕へて三たび官が遷り、吾は江州に貶せられて最早二年にならんとしてゐる。君は曉に劍珮を鏘鏘と鳴らして宮門に參内するであらうが、吾は煙波の間に漁舟を泊して魚蝦を侶としてゐる。知友諸君はいづれも青雲の上に時めいてゐるが、吾は白日の彼方なる故郷を遠く離れて尾羽打ち枯らしてゐる。若し今の吾が生活狀態を報告したらば皆我を笑ふであらう。茅を結んで屋根を葺き、芋を栽ゑ新墾の田地を耕して食つてゐる始末だもの。

【字解】【一】丹陛　天子の宮殿。　【二】滄浪　川の名。　【三】劍珮　劍幷に珮玉。雙鳳闕は宮門。　【四】青雲　高官に喩ふ。　【五】生涯　生活といふが如し。笑殺は笑ふこと。殺は助辭で意味なし。　【六】畬田　新に開墾した田地。

百花亭

朱檻在空虛涼風八月初。
山形如峴首江色似桐廬。
佛寺乘船入人家枕水居。
高亭仍有月今夜宿何如。

【字解】【一】朱檻　朱塗の欄干。空虚は空墟であらう。【二】峴首　山の名、峴山なり。今の湖北省襄陽縣の南に在る。【三】桐廬　今の浙江省桐廬縣。

【題義】百花亭(亭の名)の位置風景を述べた詩である。

【詩意】此亭は空墟の間に在る。時は恰も八月の初である。あたりの景色はといへば、山の形は峴山に似てゐる。江流の樣は桐廬に似てゐる。船から上れば直に佛寺があり、水邊には人家が立ち竝んでゐる。此亭は獨り高い處に在つて月を觀るのに宜しい。今夜此亭に宿つたら、如何ばかりよいであらうか。

江樓早秋

南國雖レ多レ熱。秋來亦不レ遲。
湖光朝霽後。竹氣晩涼時。
樓閣宜二佳客一。江山入二好詩一。
清風水蘋葉。白露木蘭枝。
欲レ作二雲泉計一。須レ營二伏臘資一。
匡廬一步地。官滿更何之。

【字解】【一】水蘋　水草の名。【二】木蘭　香木の名。【三】雲泉計　隱棲の計。【四】伏臘資　生活資料。伏は夏の三伏、臘は十二月の祭。【五】匡廬　廬山なり。殷周の時、匡俗兄弟七人廬を此に結ぶ。故に此名あり。

【題義】江樓の上から初秋の風物を眺めて感懷を述べた詩である。

【詩意】南國は熱くはあるが秋の來るのが遲い譯ではない。朝霽れた後の湖上の眺、晩涼の時の竹風の快さは得も言はれず。之を大にしては樓閣の佳客の遊賞に適するあり、江山の好詩に入るに足るものあり、之を小にしては清風の蘋末にそよぐあり、白露の木蘭の枝に湛湛たるあり、その快適言ふべからざるものがある。吾は此江山の間に隱遁しようと思ふが、それには吾が生を支へる資料がなければならない。願はくは匡廬の山に一步の地を占めて永く住みたいものだ。たとひ任期が滿ちても更に他處に往かうとは思はない。

送客之湖南

客の湖南に之くを送る

年年漸見南方物。
事事堪レ傷北客情。
山鬼趫跳唯一足。
峽猿哀怨過二三聲一。

年年漸く見る南方の物、
事事傷むるに堪へたり北客の情。
山鬼は趫跳唯一足、
峽猿哀怨三聲を過ぐ。

【字解】【一】北客　北地から來てゐる客。【二】趫跳　をどりはねる。【三】峽猿　峽中に住む猿。宜都山川記に、峽中猿鳴。行者歌曰、巴東三峽、猿鳴長悲。猿鳴至三三聲一、聞者淚沾レ衣。とある。【四】青草湖　湖南省湘陰縣の北一百里に在り、南

帆開青草湖中去。帆開いて青草湖中に去り、
衣濕黃梅雨裏行。衣濕うて黄梅雨裏に行く。
別後雙魚難定寄。別後雙魚定めて寄せ難からん、
近來潮不到湓城。近來潮湓城に到らず。

づく。【七】湓城　今の九江府。樂天の居る處。

【題義】湖南（洞庭湖の南）に往く人を送る詩である。

【詩意】段段南方に居著いて樣樣の物を見聞きすると、すべて吾吾北客の心を痛ましめる。山鬼の一本足で跳り躓ねるのを見、峽猿の哀怨深き聲を聞くなど皆然らざるはなしである。況んや君は此から孤舟に乘つて梅雨のしとしとと降りそそぐ中を青草湖に向つて往くのであるから、一入悲も深いであらう。殊に君と一別の後は容易に手紙を寄せることも出來まいと思ふ。近來潮水が此九江までですら上つて來なくなつたから。

【餘論】津阪東陽の夜航詩話卷一に海潮は九江あたりまでしか上つて來ないといふことを詩を引いて例證してある。文長ければ引用することは見合せる。張繼の詩にも潮至二潯陽一回去、相思無レ處レ通レ書。とあつて、書信を魚に喩へる所から潮と關係するのである。

は湘水に接し、北は洞庭湖に通ず。水退けば一面に青草と化す。故に此名あり。【六】黃梅雨　梅雨なり。【六】雙魚　手紙をいふ。古樂府に、客從二遠方一來、遺二我雙鯉魚一、呼レ童烹二鯉魚一、中有二尺素書一。とあるに本

百花亭晩望夜歸　百花亭にて晩に望み夜歸る

百花亭上晩徘徊。百花亭上晩に徘徊すれば、
雲影陰晴掩復開。雲影陰晴掩うて復開く。
日色悠揚映山盡。日色悠揚山に映じて盡き、
雨聲蕭颯渡江來。雨聲蕭颯江を渡つて來る。
鬢毛遇病雙如雪。鬢毛病に遇うて雙ながら雪の如く、
心緒逢秋一似灰。心緒秋に逢うて一に灰に似たり。
向夜欲歸愁未了。夜に向うて歸らんと欲して愁未だ了らず、
滿湖明月小船廻。滿湖の明月小船廻る。

【字解】【一】悠揚　のんびりとした貌。【二】蕭颯　物淋しき貌。

【題義】百花亭（亭の名）の上から夕方四方を眺め、夜になつて歸途に就いたといふので、前聯には江上の暮色雨聲を寫し、後聯には自己の感懷を敍した。

【詩意】夕に百花亭上に徘徊すれば、雲煙去來して陰晴定まらず、のんびりと山に照り映えてゐた夕日が沒してしまふと、物淋しき雨がしとしとと江を渡つて降つて來た。吾は病に遇うて頓に老衰し、雙鬢白きこと雪の如く、心は秋の哀れに感じて死灰の如く冷却してしまつた。夜になつて家路に就か

うとするも愁猶未だやまず。湖上に滿つる月光を仰ぎつつ小舟に乘つて蕭然として歸つた。

西樓

小郡大江邊。危樓夕照前。
青蕪卑濕地。白露沈寥天。
鄉國此時阻。家書何處傳。
仍聞陳蔡戍。轉戰已三年。

【字解】【一】小郡　九江郡を指して言ふ。【二】危樓　高い樓。西樓を指す。夕照は夕日。【三】青蕪　青い野原。卑濕は低くして濕氣の深いこと。【四】白露　秋になつて降る露。沈寥は寂しき貌。【五】家書　故郷からの書信。【六】陳蔡　古の二國の名。今の河南と安徽に跨る。卽ち淮西の地方。

【題義】秋の夕に西樓に登つて四方を眺望し、亂離羈旅の情を述べた詩である。唐宋詩醇に「神杜甫に似たり」と評してある。

【詩意】大江が九江郡城を繞り、夕陽が高樓を照してゐる。樓上から四方を見れば、卑濕の地である から青蕪遠く合し、時正に秋であるから白露江に横はり空が澄み渡つてゐる。今や戰亂があるので故鄉からの音信も絶えて通じない。聞く所に由れば淮西地方の戍兵は、各地に轉戰すること既に三年の久しきに及んでゐるさうだ。

尋李道士山居。兼呈元明府

李道士の山居を尋ね、兼ねて元明府に呈す

盡日行還歇。遲遲獨上山。
攀藤老筋力。照水病容顏。
陶巷招居住。茅家許往還。
飽諳榮辱事。無意戀人間。

【字解】【一】元明府　元は姓。明府とは縣令の稱。【二】盡日　終日。【三】茅家　道士の家。漢の茅盈、弟衷、固と句曲山に隱る。世に三茅君と號す。【四】陶巷　陶淵明の住んでゐた町といふ意であらう。【五】人間　世間。

【題義】道士李氏の山居を尋ねたことを述べて縣令元氏に呈した詩である。

【詩意】終日歩いたり休んだりして、遲遲として獨り山を登り、藤蔓を攀ぢて筋力爲に盡き、水鏡を見て吾が衰貌を悲んだ。吾が此山に登つたのは李道士が我を招いて往還居住を許したからで、李道士に接して飽くまで榮辱の意に介するに足らぬことを悟り、世榮を求める意志が全く無くなつた。

四十五

行年四十五。兩鬢半蒼蒼。
清瘦詩成癖。粗豪酒放狂。
老來猶委命。安處卽爲鄉。
或擬廬山下。來春結草堂。

【字解】【一】行年　年齡。【二】蒼蒼　白髪にならうとする貌。【三】委命　運命に任せる。【四】安處　安んじて居る。

【題義】四十五歳になつた時の感想を述べた詩である。

【詩意】吾が齢既に四十五を重ねて兩鬢の毛も半ば白化せんとし、身痩せて詩を作ることを以て癖となし、性粗豪にして酒を飲んでは狂態を放にしてゐる。老境に入つて以來すべて運に任せ、偏に身心の安きを以て己の郷地としてゐる。來年の春は廬山の麓に草庵でも結ばうかと思ふ。

寄李相公・崔侍郎・錢舍人

李相公・崔侍郎・錢舍人に寄す

曾陪鶴馭兩三仙。
親侍龍輿四五年。

曾て鶴馭に陪す兩三仙、
親く龍輿に侍する四五年。

【字解】【一】鶴馭　仙人の車。兩三仙は李相公、崔侍郎、錢舍人を指す。【二】龍輿　天子の輿。

天上歡娛春有限。
世間漂泊海無邊。
榮枯事過都成夢。
憂喜情忘便是禪。
官滿更歸何處去。
香爐峰在宅門前。

天上の歡娛春限り有り、
世間の漂泊海邊無し。
榮枯事過ぎて都て夢と成り、
憂喜情に忘るるは便ち是れ禪。
官滿ちて更に何れの處にか歸し去らん、
香爐峰は宅門の前に在り。

【題義】李相公（李逢吉であらう。彼は元和十一年に同平章事になつた）崔侍郎（崔羣を指す）錢舍人（錢徽を指す）の三友に寄せた詩である。

【詩意】吾は嘗て諸君と相伍して宮中に仕ふること四五年であつたが、天上の得意の春も忽ち盡き、今は天涯の海邊に貶せられてゐる。昔の榮華も時過ぎては夢と消え、心の憂は坐禪に因つて忘れてゐる。吾は任期が滿ちて更に何處に往くであらうか、もう何處へも往きたくはない。門前に見ゆるあの香爐峰の中に隱居でもしたいと思つてゐる。

【三】香爐峰　廬山の峰の名。

廳前桂

廳前の桂

天台嶺上凌霜樹、

天台嶺上霜を凌ぐ樹、

【字解】【一】天台嶺　山の名。

司馬廳前委レ地叢。　司馬廳前地に委する叢。
一種不レ生二明月裏一。　一種明月の裏に生ひず、
山中猶校勝二塵中一。　山中は猶校塵中に勝れり。

【題義】江州司馬の役所の前に在る桂の樹を借りて暗に不遇の嘆を漏らした詩である。

【詩意】本來は天台山上に生じ、霜を凌ぎ寒に傲るべき桂樹が、江州司馬の役所の前の叢の中に生えてゐる。月の桂とも謂つて月中に生ずるさへあるのに、こんな處に埋もれてゐるのは、實に其處を得ぬこと甚しいと謂はねばならぬ。併し塵俗の間に在らずして山中に在るのは責めてもの仕合である。

尋二王道士藥堂一因有二題贈一

王道士が藥堂を尋ね、因つて題贈あり

行行覓レ路緣二松(一)嶠一。　行く行く路を覓めて松嶠に緣り、
步步尋レ花到二杏(二)壇一。　步步花を尋ねて杏壇に到る。
白(三)石先生小有洞、　白石先生の小有洞、
黃(四)芽姹女大還丹。　黃芽姹女の大還丹。
常悲二東郭千家塚一。　常に東郭千家の塚を悲み、
欲レ乞二西山五(五)色丸一。　西山五色の丸を乞はんと欲す。
但恐長生須レ有レ籍。　但恐らくは長生は須らく籍有るべし、
仙(六)臺試爲檢レ名看。　仙臺試に爲に名を檢して看ん。

【字解】【一】松嶠　松の生えてゐる山。【二】杏壇　孔子が教を說いた處。ここは王道士の教壇に借用したのである。【三】白石先生　神仙傳に「白石先生は中黃丈人の弟子なり、彭祖の時已に二千餘歲なり。常に白石を煮て糧となす。白石山に就いて居るに因り、時人號して白石先生といふ」云云とある。小有洞は仙人の住む洞窟。茅君內傳に「大天の內、洞あり三十六所。第一は王屋山の洞。名づけて、小有清虛の天といふ」とある。【四】黃芽　道家仙藥を煉るに鉛華を以て黃芽となし、水銀を稱して姹女といふ。大還丹は仙藥の名。抱朴子に詳なり。【五】五色丸　不老長生の仙藥。【六】仙臺　仙人の宮。

【題義】王道士の仙藥を煉る處を尋ね、此詩を題して贈つたのである。

【詩意】行く行く路を覓め花を尋ねて、やつと王道士の杏壇に到著した。見れば古の白石先生の小有洞もかくやと思ふほどで、黃芽、姹女などの仙藥もある。吾は常に郭外に纍纍たる墓を見て人生の果敢なきを悲み、どうか仙藥を乞うて不老長生になりたいものだと思つてゐる。ただ氣遣ふ所は長生をするには仙籍がなければならないのであらうと思ふ。因つて試に仙宮に就いて吾が名籍があるかどうか檢分して見よう。

南浦歲暮對レ酒送二王十五歸一レ京

南浦の歲暮に酒に對し王十五の京に歸るを送る

臘(一)後氷生覆二溢水一。　臘後氷生じて溢水を覆ふ、

【字解】【一】臘　十二月に行ふ

夜來雲闇失(一)廬山。　夜來雲闇うして廬山を失ふ。
風飄細雪落如米。　風細雪を飄へして落ちて米の如く、
(二)索索蕭蕭蘆葦間。　索索蕭蕭たり蘆葦の間。
此地二年留我住。　此地二年我を留めて住ましむ、
今朝一酌送君還。　今朝一酌君の還るを送る。
相看漸老無過醉。　相看る漸く老いて醉を過す無く、
聚散窮通總是閒。　聚散窮通總て此れ閒なるを。

【題義】南浦にて歳の暮に酒を酌んで王十五の歸京を送つた詩である。

【詩意】歳の暮なので氷が湓水にはりつめ、昨夜から天が曇つて廬山も見えない。間もなく風が粉雪を飄し、さらさらと葦蘆の間に落ちる。我は此地に貶せられてから既に二年になるが、今朝酒を酌んで君の歸京を送ることになつた。併しお互に年を取つたので、酒の威力を借りないでも、聚散窮通をば等閑視し得るやうになつた。だが其れだけ老い込んだのだと思へば情なくもある。

除夜　除夜

(一)薄晩支頤坐。中宵枕臂眠。　薄晩頤を支へて坐し、中宵臂を枕にして眠る。
一從身去國(二)。再見日周天。　一たび身の國を去つてより、再び日の天を周るを見る。
老度江南歳。春拋(三)渭北田。　老いて江南の歳を度り、春は渭北の田を拋つ。
(四)潯陽來早晩。明日是三年。　潯陽に來ること早晩、明日是れ三年。

【字解】【一】薄晩　薄暮。夕方。支頤は頰杖をつくこと。【二】國　國都、長安。【三】渭北　渭水の北、長安なり。拋は遠く離るる意。前の夜宿江浦聞元八改官、因寄此什の鄕國遙拋白日邊の拋に同じ。【四】潯陽　江州。樂天の貶せられてゐる處。早晩は近日の意。

【題義】年越の夜の感慨を述べた詩である。

【詩意】いよいよ今年も盡きるといふので、夕方から頰杖をついてすわり込み、夜中に臂を枕に假睡をした。一たび長安を去つてから二回日が天を一周し、老いて江南に歳を度り、遠く渭北の田園を離れてゐる。この潯陽に來たのは昨今のやうに思はれるが、明くれば早已に三年になるのだ。

聞李十一出牧(一)澧州。崔二十二出牧果州。因寄絕句

李十一出でて澧州に牧たり、崔二十二出でて果州に牧たりと聞き、因つて絕句を寄す

平生相見卽眉開。　平生相見て卽ち眉開く、
靜念無如李與崔。　靜に念ふに李と崔とに如くは無し。

【字解】【一】牧　刺史になること。【二】刺史　州の長官。

各是天涯爲刺史。各是れ天涯に刺史と爲る、
緣何不覓九江來。何に緣つてか九江を覓め來らざる。

【題義】李建の出でて、澧州刺史となり、崔韶の果州刺史となりし由を聞き、此絶句を寄せたのである。

【詩意】顏さへ見れば氣も晴れ憂も忘れる者は、李君と崔君とに及ぶ者はない。聞けば兩君は、各天涯の遠地に刺史となつたさうだが、なぜ我の居る九江を覓めて其刺史になつてくれなかつたのであらうか。

元和十二年淮寇未平。詔停歲仗。憤然有感。率爾成章

按淮西平于十二年十月、時本作十三年誤。

元和十二年淮寇未だ平がず、詔して歲仗を停む、憤然として感あり、率爾として章を成す

按ずるに淮西は十二年十月に平ぐ、時本に十三年に作るは誤り

聞停歲仗軫皇情。聞く歲仗を停めて皇情を軫ましむと、
應爲淮西寇未平。應に淮西寇未だ平がざるが爲なるべし。
不分氣從歌裏發。不分の氣は歌裏より發し、

【字解】【一】淮寇　吳元濟の叛亂。
【二】歲仗　新年の拜賀式。
【三】率爾　にはかに。
【四】不分　忿に堪へざること。
【五】無明　佛語。癡暗の心をいふ。
【六】短檄　軍中の文書を檄といふ。
【七】長纓　長い紐。漢の終軍が長纓を受け南越王を縛して之を闕下に致さんことを請ひし故事を用ふ。

【三】九江　江州。樂天の貶せられてゐる處。

無明心向酒中生。無明の心は酒中に向つて生ず。
愚計忽思飛短檄。愚計忽ち短檄を飛ばさんことを思ひ、
狂心便欲請長纓。狂心便ち長纓を請はんと欲す。
從來妄動多如此。從來妄動多くは此の如し、
自笑何曾得事成。自ら笑ふ何ぞ曾て事成るを得んと。

【題義】憲宗の元和十年、淮西節度使吳元濟叛し、東都の近傍を侵略した。淮寇とは卽ち此である。元和十一年に淮寇未だ平がざるに由り、新年の拜賀式を御停止になつた。感憤のあまり率然として此詩を作つたといふのである。

【詩意】聞けば天子樣は國事に御軫念遊ばされ、新年の拜賀式を停められたと申すことであるが、これは淮西の叛軍がまだ平定されない爲であらう。此を聞くにつけても、我が忿怒の情が歌の中からむらむらと起り、我が癡暗の心が酒氣と倶に發生し、忽ち檄を飛ばして、賊軍を退治し、長纓を請うて賊將を縛つて來ようなどと柄にもない考を起した。併し心を落著けて考へて見れば、我が從來の行動は皆この筆法で、所謂輕擧妄動の譏を免れない。だから、何事でも成功したためしがないのは自ら苦笑する外はない。

庾樓新歲

歲時銷(一)旅貌(一)風景觸(二)鄉愁(一)。歲時旅貌を銷し、風景鄉愁に觸る。
牢落(二)江湖意。新年上(二)庾樓(一)。牢落江湖の意、新年庾樓に上る。

【字解】【一】旅貌　旅客の容貌。【二】牢落江湖　おちぶれて片田舎に居ること。【三】庾樓　晉の庾亮が江州太守たりし時建てた樓。

【題義】新年に庾樓に登つて謫宦を悲む意を述べた詩である。

【詩意】行旅の間に歲月を送つて、いつともなく容貌が衰へ、風物景色の移り變る毎に鄉愁を深くする。今新年に際し、江湖に落魄する淋しき心を抱いて、此樓に登れば、殊に感慨無量である。

上(一)香爐峯(一)

香爐峯に上る

倚(レ)石攀(レ)蘿歇(レ)病身(一)。石に倚り蘿を攀ぢて病身を歇ましむ、
青笻(二)竹杖白紗巾。青笻の竹杖白紗の巾。
他時(三)畫(二)出廬山障(一)。他時廬山の障を畫き出さば、
便是香爐峯上人。便ち是れ香爐峯上の人。

【字解】【一】香爐峯　廬山の最高峯の名。【二】青笻　竹の名。【三】他時　後日。障はついたて。屏風の如きもの。

【題義】香爐峯に登つて作つた詩である。

【詩意】石に倚り葛蘿を攀ぢて、疲れた身を休めてゐる。青竹の杖をつき白紗の頭巾をかぶつた吾が姿は後日廬山の風景を屏障に畫くこともあらば、香爐峯上の人として畫くに極めて恰好な姿である。

憶(一)微之(一)

微之を憶ふ

與(レ)君何日出(一)屯蒙(一)。君と何の日か屯蒙を出でん、
魚戀(二)江湖(一)鳥厭(レ)籠。魚は江湖を戀ひ鳥は籠を厭ふ。
分(レ)手各拋(二)滄海畔(一)。手を分ちて各滄海の畔に拋ち、
折(レ)腰俱老(二)綠衫中(一)。腰を折つて俱に綠衫の中に老ゆ。
三年隔濶音塵斷(四)。三年隔闊音塵斷え、
兩地飄零氣味同(五)。兩地飄零氣味同じ。
又被(二)新年勸(一)相憶(一)。又新年に相憶ふことを勸められる、
柳條黃軟欲(二)春風(一)。柳條黃軟にして春風ならんと欲す。

【字解】【一】屯蒙　災厄なり。貶謫をいふ。【二】滄海　大海。【三】綠衫　司馬の服。【四】音塵　消息なり。【五】飄零　流涙すること。【六】柳條　柳の枝。

【題義】元稹を憶うて作つた詩である。

【詩意】いつになつたらお互は災厄を免れて自由の身になることが出來るであらう。身は江湖を戀ふる魚の如く籠を厭ふ鳥の如くに自由を渇望してゐる。互に遠く離れて大海の畔に住み、上官の前にぺこぺこして司馬の卑官に甘んじ、三年の間音信も斷え、土地はかはれど思は同じである。今又新年になり柳の枝に軟かな新芽が萌え春風が吹く時節になつて來たので、いやが上にも君を憶ふ心をそそられる。

雨夜贈元十八

雨夜元十八に贈る

(一)卑濕沙頭宅。(二)連陰雨夜天。
卑濕沙頭の宅、連陰雨夜の天。
共聽(三)簷溜滴。(四)心事兩悠然。
共に簷溜の滴るを聽き、心事兩ながら悠然。
把レ酒循環飲。移レ牀曲尺眠。(五)
酒を把りて循環して飲み、牀を移して曲尺して眠る。
莫レ言非二故舊一。相識已三年。
言ふ莫れ故舊に非ずと、相識ること已に三年。

【字解】【一】卑濕　低くて濕氣の深いこと。【二】連陰　毎日曇つてゐること。【三】簷溜　軒のあまだれ。【四】心事　心中に期願する所の事。悠悠は渺邈にして期なき貌。【五】曲尺　まがりがね。かぎの手。

【題義】雨の夜に元十八に與へた詩である。

【詩意】川べりの低い濕氣の深い宅で、雨の降りそそぐ夜に、君と共に雨垂の音を聽いてゐると、お互に不遇の感を深くする。因つて酒を把つて代り番に飲み、寢臺を移して曲尺に寢る。君と僕とは故舊でないとは謂はれぬ。互に識合になつてから已に三年になるのだから。

寒食江畔

寒食江畔

草香沙暖水雲晴。
草香しく沙暖にして水雲晴れ、
風景令レ人憶(二)帝京一。
風景人をして帝京を憶はしむ。
還似(三)往年春氣味一。
還つて往年の春の氣味に似たり、
不レ宜(三)今日病心情一。
今日の病の心情に宜しからず。
聞レ鶯樹下沈吟立。(四)
鶯を聞いて樹下に沈吟して立ち、
信レ馬江頭取次行。(四)
馬に信せて江頭取次に行く。
忽見(五)紫桐花一悵望。
忽ち紫桐花を見て悵望す、
下邽明日是清明。(六)
下邽明日是れ清明。

【字解】【一】寒食　冬至から百五日をいふ。この日烟火を禁ぐるを禁ず。【二】帝京　長安。【三】沈吟　思案すること。【四】取次　次第に。【五】紫桐　桐の一種、其の花紫色なり。【六】下邽　縣名。今の陝西省渭南縣の東北。樂天の鄉里。清明は一年二十四氣節の一。陰曆三月節なり。寒食は清明の前二日に在り。

【題義】寒食の頃江畔を閑行して懷鄉の感を起したことを述べた詩である。

【詩意】草は香しく沙は暖に雲も晴れ、あたりの景色が坐に我をして長安を憶はしめる。却つて先

年長安にゐた得意な頃の春の氣味に似つかはしいが、今日江州に貶せられて病みほうけてゐる心持には相應しくない。樹の下に鶯の聲を聞いて思案に耽り、やがて己に歸り馬の歩みに任せて江邊を行き、忽ち紫桐の花を見、悵然として故郷の空を遠望した。あの花が咲いてゐるからには、吾が故郷の下邽でも明日は清明節で樣樣の催しなどもあるであらう。

三月三日登庾樓寄庾三十二

三日歡遊辭曲水、二年愁臥在長沙。
每登高處長相憶、何況茲樓屬庾家。

【字解】【一】庾樓　晉の庾亮が江州太守たりし時建てた樓。【二】曲水　長安の曲江を指して言つたのであらう。曲江は長安の遊賞の地である。【三】長沙　湖南省の地名。ここは江州に代用したのである。

【題義】三月三日に江州の庾樓に登り、同姓の緣で長安に居る庾三十二を憶ひ、此詩を寄せたのである。

【詩意】嘗て長安にゐた頃は、三月三日には曲江の邊に歡遊したものであつたが、長安を去つて江州に愁臥すること既に二年になる。高樓に登るといつも長安の友達を憶ひ出すが、況んや此樓は庾氏に關係があるので殊に君を憶ふことが深い。

聞李六景儉自河東令授唐鄧行軍司馬。以詩賀之

誰能淮上靜風波、聞道河東應此科。
不獨文詩供奏記、定將談笑解兵戈。
泥埋劍戟終難久、水借蛟龍可在多。
四十著緋軍司馬、男兒官職未蹉跎。

【題義】李景儉(六は排行)が河東縣令より唐鄧行軍司馬に轉任になつたことを聞き、詩を以て祝賀の

【字解】【一】淮上　淮水のほとり。時に吳元濟の叛亂があつた。【二】河東　河東縣令李景儉を指す。【三】著レ緋　行軍司馬の服は緋なり。【四】蹉跎　躓いて進まぬ貌。

意を述べたのである。

【詩意】誰が能く淮西の叛軍を鎮定するであらうとになつたさうだ。君ならば文武の才を兼ねてゐるから、文筆を秉つて奏記に供するのみならず、必ず談笑の間に戰亂を鎮定する事も出來るであらう。泥が劍戟を埋めてもやがては其光を現すやうに、君の武勇も愈〻世に顯れることになり、水が蛟龍に力を借すこと多く、君をして益〻得意の境地に到らしむるであらう。年四十にして行軍司馬に任ぜられることは、決して出世の晩い方ではないから、大に努力して功名を立てるがよい。

(一)石楠樹　　石楠樹

(二)可レ怜顏色好二陰涼一。
葉剪二紅牋一花撲レ霜。
(四)繖蓋低垂金翡翠、
(五)薰籠亂搭繡衣裳。
春芽細炷千燈燄、
夏蕊濃焚百和香。

怜むべし顏色陰涼好し、
葉は紅牋を剪り花は霜を撲つ。
繖蓋低く垂る金翡翠、
薰籠亂れ搭く繡衣裳。
春芽細く炷く千燈の燄、
夏蕊濃に焚く百和の香。

【字解】【一】石楠樹　木の名。【二】可レ怜　愛すべしの意。顏色は色彩。【三】紅牋　赤い紙片。權德輿の詠石楠詩に、石楠紅葉透簾春とある。【四】繖蓋　おほひ。繖は俗に傘に作る。孟郊の和三宣州段判官使院廳前石楠樹詩一に翡翠葉四見說上林無此樹、只敎桃柳占年芳。

柳一作レ李。

【題義】石楠花を詠じた詩である。

【詩意】石楠花の色彩はすがすがしく愛すべきものがある。其葉は赤い紙片を劈つて作つたやうで花は霜のやうに白い、之を譬ふれば傘が低く垂れた處に金色の翡翠が簇つてゐるやうでもあり、薰籠に刺繡をした衣裳を掛けたやうでもある。春の芽生は千燈の燄が燃えるやうで、夏の蕊は百和の香を焚くやうに濃である。聞けば天子樣の御庭には此樹はなく、只平凡俗庸な桃や柳が春を占めてゐるさうだが、誠に惜むべきことだ。

(一)大林寺桃花　　大林寺の桃花

(二)人間四月芳菲盡く、
山寺桃花始盛開。
長恨春歸無二覓處一。
人間四月芳菲盡く、
山寺の桃花始めて盛に開く。
長恨す春歸つて覓むる處無きを、

【字解】【一】大林寺　香爐峯の頂上に在る寺の名。【二】人間　世間。芳菲は春景色。

鋪とある。翡翠は美石の名。【五】薰籠　香をたきこめるフセゴ。【六】百和香　香の名。漢武內傳に「七月七日百和の香を燔く」とある。【七】上林　天子の林苑。

不レ知轉入二此中一來。　知らず轉じて此中に入り來らんとは。

【題義】大林寺の桃花を見て作つた詩である。寺は山頂に在るから花の開くのが晩くて、四月に桃が咲いてゐるのである。此詩は樂天の遊二大林寺一序に據れば元和十二年四月九日の作である。

【詩意】世間では四月といへば夏で、最早春景色は何處を探しても見られないが、この山寺では桃の花が今正に滿開だ。自分は春の行方を覓むる能はずして長恨してゐたが、この山寺に來てゐようとは思はなかつた。

詠懷　懷を詠ず

自從二委(一)順任一浮沈一。　順に委して浮沈に任せてより、
漸覺年多功用深。　漸く覺ゆ年多く功用の深きを。
面上滅除憂喜色、　面上滅除す憂喜の色、
胸中消盡是非心。　胸中消盡す是非の心。
妻兒不レ問唯耽レ酒。　妻兒は問はず唯酒に耽り、
冠帶皆慵只抱レ琴。　冠帶皆慵く只琴を抱く。

【字解】【一】委レ順　運命のままに順應すること。

【二】靈均　楚の屈原、讒に遇ひ憂愁して離騷を作る。

【三】江蘺　水邊に生ずる草の名。

長笑二靈均一不レ知レ命。　長く笑ふ靈均の命を知らず、
江蘺叢畔苦悲唫。　江蘺叢畔苦悲して唫せしを。

【題義】己の感懷を述べた詩である。

【詩意】身の浮沈を運に任せてから年久しきを歷て、漸く其功用の深きを覺つた。面には憂喜の色が無くなり、胸中には是非を爭ふ心がなくなつて、妻子の凍餒などは措いて顧みず唯酒に耽り、衣冠束帶して官事に勤めるのが懶くて琴ばかり彈いてゐる。かの屈原が天命に安んずることを知らずに、江畔に苦吟して身の薄命を嘆じたのは、實に笑止千萬なことだ。

早發二楚城驛一

過レ雨塵埃滅。沿レ江道徑平。
月乘二殘(一)夜一出。人趁二早涼一行。
寂歷(二)閒唫動。冥濛(三)闇思生。
荷塘翻二露氣(四)一。稻壟瀉二泉聲(五)一。
宿犬聞レ鈴起。栖禽見レ火驚(六)。

早に楚城驛を發す

雨を過ぎて塵埃滅し、江に沿うて道徑平かなり。
月は殘夜に乘じて出で、人は早涼を趁うて行く。
寂歷として閒唫動き、冥濛として闇思生ず。
荷塘露氣を翻し、稻壟泉聲を瀉ぐ。
宿犬鈴を聞きて起き、栖禽火を見て驚く。

(七)曨曨煙樹色。十里始天明。　曨曨たる煙樹の色、十里始めて天明く。

【字解】【一】殘夜　よあけ。【二】寂歷　寂寞なり。閒吟は閑吟に同じ。【三】冥濛　暗き貌。闇思は暗思なり。【四】荷塘　蓮池の塘。【五】稻壟　稻田の岡。【六】栖禽　木の上に寢てゐた鳥。【七】曨曨　うすあかるき貌。

【題義】朝早く楚城驛を出發した夜明の景況を述べた詩である。汪立名曰く「按ずるに太平寰宇記に貞觀八年楚城縣を廢して潯陽に歸す、其地を詳かにするに卽ちもと柴桑に屬す」と。又云く「圖經を按ずるに晉の建興元年始めて郡を立て、潯陽・柴桑・彭澤・上甲・九江等五縣を領す、則ち潯陽・柴桑各〻其地あり。自後潯陽を併せて柴桑に入る。後柴桑を廢して潯陽となす。是に於て潯陽・柴桑一縣を合せて名異り」と。

【詩意】雨あがりで塵埃も立たず川沿の道が平かである。月は夜明まで殘り、我は早涼を趁うて行く。四邊がひつそりしてゐるので自然と閑吟を催し、彼此と暗愁も生じて來る。蓮花の咲いてゐる塘には露が飜り、稻田の岡からは泉の聲が聞える。眠つてゐた犬が馬の鈴を聞いて起き上り、木の上の寢鳥も松明の火に驚く。東の方の樹の間が薄明くなつたと思へば、やがて十里の先まで明け離れた。

箬峴東池

箬峴亭東有小池。　箬峴亭の東に小池あり、

【字解】【一】早荷　蓮の葉。新荷の荷は水草の名。參差は長短齊しからざる貌。

(一)早荷新荷綠參差。　早荷新荷綠參差たり。
中宵把火行人發。　中宵火を把つて行人發すれば、
驚起雙棲(二)白鷺鷥。　驚き起つ雙棲の白鷺鷥。

【題義】箬峴亭（亭の名）の東の池のほとりを夜旅立つ時の樣を述べた詩である。

【詩意】箬峴亭の東に小池がある。蓮の葉や荷が縱橫に綠の色をひろげてゐる。夜中に松明を持つて旅立たうとした所が、池に棲むつがひの白鷺が驚いて飛び出した。

【字解】【一】行人　旅人。樂天自ら謂ふ。【二】雙棲　ならびすむ。鷺鷥は白鷺。

建昌江

建昌江水縣門前。　建昌江
立馬教人喚渡船。　立馬教人喚渡船。
忽似往年歸(二)蔡渡。　忽似往年歸蔡渡。
草風沙雨渭(三)河邊。　草風沙雨渭河邊。

【題義】建昌江のほとりで感想を述べた詩である。

【詩意】建昌江の水が縣廳の門前を流れてゐる。我は人をして渡船を喚ばせ馬を立てて待つてゐる。

【字解】【一】建昌江　一名は盱江。又は汝水。源は江西省廣昌縣南より出で贛江に注ぐ。【二】蔡渡　渭村の舊居をいふ。【三】渭河　源は甘肅省渭源縣の西北より出で東南流して陝西の境に入り、潼關に至つて黃河に入る。

ふと想ひ出したが、先年蔡渡に歸る時雨風の沙草を撲つ處で、渭河の渡を渡つたが、あの時によく似てゐる。

哭從弟

從弟を哭す

傷心一尉便終身。
心を傷ましむ一尉便ち身を終り、

叔母年高新婦貧。
叔母は年高けて新婦は貧しきを。

一片綠衫消不得。
一片の綠衫消し得ず、

腰金拖紫是何人。
金を腰にし紫を拖く是れ何人ぞ。

【題義】從兄の死を悲んだ詩である。

【詩意】僅に縣尉といふ一微官を以て終り、後に遺つた叔母は年老い新妻は貧しいとは、何といふ悲むべき事であらう。同じく微官に在りて綠衫を纏へる吾が身は此悲みを消すことが出來ず、徒らに金印紫綬を帶びて時めいてゐる人を羨むのみであるから。

【字解】【一】一尉　尉は縣令の下の官。【二】綠衫　司馬の服。樂天自ら謂ふ。【三】腰金拖紫　金印紫綬。高位高官。

香爐峯下新卜山居草堂初成偶題東壁

香爐峯下、新に山居を卜し、草堂初めて成る、偶〻東壁に題す

五架三間新草堂。
五架三間の新草堂、

石階桂柱竹編墻。
石階桂柱竹墻を編む。

南簷納日冬天煖。
南簷日を納れて冬天暖に、

北戸迎風夏月涼。
北戸風を迎へて夏月涼し。

灑砌飛泉繞有點。
砌に灑ぐ飛泉繞に點有り、

拂牕斜竹不成行。
牕を拂ふ斜竹行を成さず。

來春更葺東廂屋。
來春更に東廂の屋を葺き、

紙閣蘆簾著孟光。
紙閣蘆簾孟光を著けん。

【字解】【一】香爐峯　廬山の峯の名。【二】五架　木を架して屋を爲るに、兩木を立つる所の距離を一架といふ。三間は三室あること。辭源に一室を一間といふとある。【三】東廂　東のひさし。【四】紙閣　障子。蘆簾は蘆を編んで作つた簾。孟光は漢の梁鴻の賢妻。ここは樂天の妻に比す。

【題義】香爐峯の麓に新に山居を構へ、草堂が既に落成した。因つて其東壁に題した詩である。

【詩意】新に成れる我が草堂は五架三間の小屋ではあるが、自然の石を階段とし桂の木を柱とし竹で編んだ垣を以て四方を繞らし、南の簷は日光を納れて冬でも暖かく、北の戸口は風を迎へて夏でも涼しく、飛泉が迸つて餘沫が砌に灑ぎ、窓を拂つて斜に立てる竹は態と亂雜に植ゑてある。來春になつたら更に東廂を營んで障子を立て蘆簾を垂れて老妻を置かうと思ふ。

重題　四首

喜入山林初息影。厭趨朝市久勞生。
早年薄有煙霞志。晩歲深諳世俗情。
已許虎溪雲裏臥。不爭龍尾道前行。
從茲耳界應清淨。免見啾啾毀譽聲。

【題義】重ねて草堂の壁に題した詩である。

【詩意】山林の間に隱居して吾が身を休養せんことを喜び、官界に奔走して久しく吾が生を勞するのが厭になつた。吾は若い頃から山林を好む心を持ち、老年になつては深く世間の情僞を明にし得た。されば自ら虎溪の雲深き處に高臥せんことを許し、龍尾道前に官列を爭はうなどとは思はない。既に草堂に隱れた後は、耳界が清淨になつて、うるさい毀譽褒貶の聲を聞かなくて濟むであらう。それが何よりも嬉しい。

【字解】【一】朝市　朝廷。市は帶說と見て可ならん。
【二】煙霞志　山水を好む心。
【三】虎溪　川の名。廬山の下に在り。虎溪三笑の故事を以て名高し。
【四】龍尾道　含元殿の殿に升る道。
【五】耳界　すべて吾が耳に接して聲を成すものをいふ。
【六】啾啾　聲の形容。

〔一〕

長松樹下小溪頭。斑鹿胎巾白布裘。
藥圃茶園爲産業。野麋林鶴是交遊。
雲生澗戸衣裳潤。嵐隱山厨火燭幽。
最愛一泉新引得。清泠屈曲遶階流。

〔二〕

長松樹下小溪の頭、斑鹿胎の巾白布裘。
藥圃茶園産業と爲し、野麋林鶴是れ交遊。
雲は澗戸に生じて衣裳潤ひ、嵐は山厨を隱して火燭幽なり。
最も愛す一泉新に引き得て、清泠屈曲階を遶りて流るるを。

【字解】【一】斑鹿胎　織物の名。白布裘は白木綿の裘。裏に毛皮があるから裘といふのであらう。
【二】産業　財産。
【三】野麋　麋は鹿の類。
【四】嵐　山氣。
【五】清泠　清爽寒涼の意。

【詩意】長松の下の小溪の頭に、吾は斑鹿胎の頭巾をかぶり白布裘を著て徜徉してゐる。藥畠や茶園が吾が財産で、野の鹿や林の鶴が吾が友である。雲が谷間の戸に湧き起つては吾が衣裳を潤し、山氣が山厨を罩めては火の光も微である。殊に最も愛すべきものは新に一泉を引き得て、清泠な水が

屈曲して石階を繞つて流れることだ。

〔三〕

日高睡足猶慵起。小閣重衾不怕寒。
遺愛寺鐘欹枕聽。香爐峯雪撥簾看。
匡廬便是逃名地。司馬仍爲送老官。
心泰身寧是歸處。故鄉何獨在長安。

【詩意】日が高く昇り睡も十分足りてゐるのに猶起きるのが大儀で、こじんまりとした草堂に夜著を重ねて寢てゐると、如何なる寒さも物の數ではない。枕を欹てて遺愛寺の鐘を聽き、簾を揭げて香爐峰の雪を看る、誠に詩趣の豐かな處である。さて此廬山は世の名利を逃るるに適當な地で、司馬の官は閑散であるから老人の片手間に宜しい。心身が安泰でさへあれば其れが身を寄すべき處で、必ずしも長安のみが故鄉と限つたものではない。

【餘論】清少納言の枕草紙第二百七十段に「雪のいと高う降りたるを例ならず御格子參りて炭櫃に火おこして物語などして集り侍ふに、少納言よ香爐峰の雪如何ならん」と仰せらるれば、御格子あげさせて御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ、人人もさる事は知り、歌などにさへ歌へど、思ひこそ寄らざりつれ云云」とある。文壇の佳話として今に其名が高い。

【字解】【一】小閣　草堂をいふ。【二】遺愛寺　樂天の草堂記に「匡廬奇秀は天下の山に甲たり。山北の峰を香爐峰といひ、峰北の寺を遺愛寺といふ」とある。【三】匡廬　廬山の別名。周の時匡俗兄弟七人廬を此に結ぶ。故に此名あり。【四】司馬　官名。時に樂天は江州司馬たり。【五】歸處　おちつくべき處。【六】長安　唐の都。

〔四〕

宦途自此心長別。世事從今口不言。
豈止形骸同土木。兼將壽夭任乾坤。
胸中壯氣猶須遣。身外浮雲何足論。
還有一條遺恨事。

〔四〕

宦途此より心に長く別る、世事今より口に言はず。豈止だ形骸を土木に同うするのみならんや、兼ねて壽夭を將つて乾坤に任す。胸中の壯氣猶須く遣るべし、身外の浮雲何ぞ論ずるに足らん。還つて一條遺恨の事有り、

【字解】【一】形骸同二土木一　外貌を修飾せぬこと。晉書嵇康傳に、土木形骸不二自藻飾一とある。

【二】浮雲　一に浮榮に作る。

(三)高家門館未ㇾ酬ㇾ恩。　高家の門館未だ恩に酬いず。

【詩意】今日から心に官界の事を忘れ、口に世事を言ふまいと思ふ。啻に吾が形骸を土木にして修飾せざるのみならず、吾が身の壽夭をも天命に任せて疑はないつもりだ。胸中一片の壯心は猶霽すことが出來る。身外の浮榮などは復論ずるに足らない。ただ一つ遺憾な事は、これまで世話になつた高家の恩に未だ酬いてゐないことだ。

山中問ㇾ月　山中月に問ふ

爲問長安月。誰教ㇾ不ㇾ相離。　爲に問ふ長安の月、誰か相離れざらしむる。
昔隨ㇾ飛ㇾ蓋處。今照ㇾ入ㇾ山時。　昔は蓋を飛ばす處に隨ひ、今は山に入る時を照す。
借ㇾ助秋懷曠。留連夜臥遲。　助を借りて秋懷曠しく、留連して夜臥遲し。
如ㇾ歸ㇾ舊鄉國。似ㇾ對好親知。　舊鄉國に歸るが如く、好親知に對するに似たり。
松下行爲ㇾ伴。谿頭坐有ㇾ期。　松下行くゆく伴を爲し、谿頭坐して期あり。
千巖將ㇾ萬壑。無ㇾ處不ㇾ相隨。　千巖と萬壑と、處として相隨はざるはなし。

【字解】【一】長安　唐の帝都。樂天の故鄉。【二】蓋　車蓋。車上に立てて日光を遮るもの。【三】秋懷　秋の思。【四】留連　永く時を移すこと。【五】好親知　親友。【六】期　會合の約。

【題義】山中で月に問うたといふ意である。

【詩意】長安で見慣れた天上の月に問うた。誰がお前に俺の側を離れさせないのだ。お前は長安で俺の車蓋を照したのだが、今は廬山で俺を照してゐる。お前の助を借りて俺は秋思を曠うし、永く見ると れて寢るのがつひ遲くなる。お前を見てゐると故鄉に歸つて親友に對してゐるやうに思ふ。松下を行けば道連となり、溪畔に坐すれば來り會する。千巖萬壑如何なる處へでも俺の後をついて來ないことはない。

正月十五日夜東林寺學ㇾ禪。偶懷藍田楊主簿。因呈智禪師

正月十五日夜東林寺にて禪を學び、偶、藍田の楊主簿を懷ひ、因つて智禪師に呈す

新年三五東林夕。　新年三五東林の夕、
星漢迢迢鐘梵遲。　星漢迢迢として鐘梵遲し。
花縣當ㇾ君行樂夜。　花縣君が行樂する夜に當り、
松房是我坐禪時。　松房是れ我が坐禪する時。
忽看ㇾ月滿ㇾ還相憶。　忽ち月の滿つるを看て還た相憶ひ、
始歎ㇾ春來ㇾ自不ㇾ知。　始めて春の來るを歎じて自ら知らず。

【字解】【一】東林寺　廬山に在る寺の名。【二】藍田　縣の名。陝西省に在る。【三】星漢　星。迢迢は高き貌。鐘梵は鐘や讀經の聲。【四】花縣　縣の美稱。ここは藍田縣を指す。【五】松房　松の下の僧房。

不ㇾ覺定中微念起。覺えず定中微念起る、
明朝更問二鴈門師一。明朝更に鴈門の師に問はん。

【題義】正月十五日の夜東林寺で坐禪を學び、偶然藍田縣の主簿（官名）たる、楊氏（樂天の親友、樂天の代書と題する文に見える）を懷ひ、因つて智禪師（東林寺の僧、樂天の遊二大林寺一と題する文に見える）に呈した詩である。

【詩意】正月の十五夜に吾は此東林寺にゐる。楊君の居る都の方では所謂上元で賑ふであらうが、山寺では星が空高く輝き、鐘や讀經の聲に深けて行くばかりだ。今頃君は行樂に餘念がないであらうが、我は松下の僧房に坐禪してゐる。忽ち滿月の現れ春の來たのに感じて、覺えず君と行樂した昔を思ひ出し、禪定なかばに娑婆氣が起つた。これでは明朝更に智禪師の敎戒を乞はねばなるまい。

【字解】【一】定中　禪定の中。【二】鴈門師　智禪師を指す。

臨ㇾ水坐　水に臨んで坐す

昔爲二東掖垣中客一、昔は東掖垣中の客と爲り、
今作二西方社內人一。今は西方社內の人と作る。
手把二楊枝一臨ㇾ水坐。手に楊枝を把つて水に臨んで坐し、
閒思往事一似二前身一。閒に往事を思へば前身に似たり。

【字解】【一】東掖　門下省をいふ。禁中の東掖に在るからである。樂天は嘗て左拾遺となり門下省に務めた。【二】西方社　佛道を信仰する結社。【三】前身　前生なり。

【題義】水邊に坐し水の流れを見、過去を回想して作つた詩である。

【詩意】昔は門下省に出仕して時めいたものであつたが、今は江州に左遷せられ佛道に入つて心を慰めてゐる。手に楊の枝を持つて水邊に坐し、閑に往事を追想すれば、遠い前生の事のやうに思はれる。

山居　山居

山齋方獨往。塵事莫二相仍一。山齋方に獨往けば、塵事相仍る莫し。
籃輿辭二鞍馬一。縕徒換二友朋一。籃輿鞍馬を辭し、縕徒友朋に換ふ。
朝餐唯藥菜。夜伴只紗燈。朝に餐ふは唯藥菜、夜伴ふは只紗燈。
除二却青衫在一。其餘便是僧。青衫の在るを除却すれば、其餘は便ち是れ僧。

【字解】【一】山齋　山中の草堂。【二】塵事　俗事。【三】籃輿　竹轎。【四】縕徒　僧侶。【五】紗燈　紗を張つた燈。【六】青衫　司馬の服。

【題義】山居の況味を述べた詩である。

【詩意】山齋に獨り往けば俗事の累が少しもなくし、朝の食事は藥と野菜だけで、夜の相手は紗燈のみである。青衫を著てゐるから役人らしいが、そ

れを脱いでしまへば全く僧侶と同じだ。

遺愛寺

弄レ石臨レ溪坐。尋レ花遶レ寺行。
時時聞二鳥語一。處處是泉聲。

【字解】【一】遺愛寺　香爐峯の北に在る寺の名。【二】鳥語　鳥の聲。

【題義】遺愛寺の附近を閑歩した時の即景を敍した詩である。所謂全對格である。

【詩意】石を弄び溪に臨んで坐し、花を尋ねて遺愛寺のまはりを一周した。時時鳥の聲や泉の聲を聞くばかりで、全く塵俗を超絶してゐる。

山中與二元九一書一。因題二書後一

山中にて元九に書を與へ、因つて書後に題す

憶昔封レ書與君夜。憶ふ昔書を封じて君に與へし夜、
金鑾殿後欲レ明天。金鑾殿後明けんと欲する天。

【字解】【一】金鑾殿後　翰林院なり。時に樂天は翰林學士たり。

今夜封レ書在二何處一。【一】今夜書を封じて何の處にか在る、
廬山菴裏曉燈前。廬山菴裏曉燈の前。
籠鳥檻猿俱未レ死。【二】籠鳥檻猿倶に未だ死せず、
人間相見是何年。【三】人間相見る是れ何の年ぞ。

【一】籠鳥　籠の中の鳥。檻猿はオリの中の猿。

【三】人間　世間。

【題義】廬山の草堂から通州にゐる元稹に手紙をやるについて、手紙の端に此詩を書きつけてやつたのである。

【詩意】嘗て君にやる手紙を朝早く翰林院で認めたことがあつたが、今夜は廬山の草堂の曉燈の前で認める。君の馴染の鳥も猿も今以て死なずにゐる。我我が生前に相見ることの出來るのは果して何日の事であらうか。

【餘論】卷十四の禁中夜作レ書與二元九一并に與二微之一書を參照せられよ。

黃石巖下作

久別二鵷鸞侶一。深隨二鳥獸羣一。
敎他遠二親故一。何處覓二知聞一。

昔日青雲意。今移向白雲。」　昔日青雲の意、今移して白雲に向ふ。

【字解】【一】鵷鸞　鳳凰の類の鳥。朝官に喩ふ。【二】豈他　ままよ。どうでもよいといふ意。親故は親戚故舊。【三】青雲意　榮達を望む心。

【題義】黃石巖の下で作つたといふ意で、世外に超然たる情思を述べたのである。

【詩意】久しく朝官の仲間を離れて、鳥獸と羣を成してゐる。親戚故舊にさへ遠ざかつてゐるのだから、今更人の知遇に預らうなどとは思はない。昔は青雲の志を抱いてゐたが、今は其心を移して山中の白雲に向けてゐる。

戲贈李十三判官

戲に李十三判官に贈る

垂鞭相送醉醺醺、　鞭を垂れ相送りて醉醺醺、
遙見廬山指似君。　遙に廬山を見て指さして君に似す。
想君初覺從軍樂。　想ふ君初めて覺ゆ從軍の樂、
未愛香爐峰上雲。　未だ愛せず香爐峰上の雲。

【字解】【一】醺醺　酣酔和悦の貌。【二】廬山　江州に在る山の名。【三】香爐峰　廬山の峰の名。

【題義】李十三判官（十三は排行、判官は官名）の從軍するに方り、戲に此詩を贈つたのである。

【詩意】酔うて馬に跨り鞭を垂れて君の去るを送り、遙に廬山を指して君に示し、さて言ふやう「想ふに君は從軍の樂を思うてゐるので、あの香爐峰上の雲を愛する心などはあるまい」と。

醉中戲贈鄭使君

時使君先歸、留二妓樂一重飲。
醉中戲に鄭使君に贈る　時に使君先づ歸り、妓樂を留めて重ねて飲ましむ

密座移二紅毯一。酡顏照二綠杯一。　密座紅毯を移し、酡顏綠杯を照す。
雙娥留且住。五馬任先廻。　雙娥留めて且く住め、五馬任に先づ廻る。
醉耳歌催レ醒。愁眉笑引レ開。　醉耳歌醒を催し、愁眉笑開を引く。
平生少年興。臨レ老鬢重來。　平生少年の興、老に臨んで鬢く重ねて來る。

【字解】【一】紅毯　赤い毛氈。敷物。【二】酡顏　酔うて赤き顏。【三】雙娥　美人、妓樂なり。【四】五馬　太守をいふ。

【題義】酔うて戲に鄭使君（鄭は姓、使君は太守の稱）に贈つた詩である。

【詩意】使君は先に歸り、後へ妓を留めて二次會を開かせることになつて、皆敷物を移し膝つき合せてすわれば、酔うた赤い顏が綠酒にうつる。歌を聞いて酔が漸く醒め、笑に由つて愁眉が段段開いてくる。少年時代の酔興が年を取つた今日暫く復活したわけだ。

江亭夕望　　江亭夕望

憑レ高望二遠思一悠(一)哉。　高きに憑り遠きを望めば思悠なる哉、
晩上二江亭一夜未レ廻。　晩に江亭に上りて夜未だ廻らず。
日欲レ沒時紅浪沸。　日沒せんと欲する時紅浪沸き、
月初生處白煙開。　月初めて生ずる處白煙開く。
辭レ枝雪蕊(二)將レ春去。　枝を辭する雪蕊春と將に去り、
滿レ鑷(三)霜毛送レ老來。　鑷に滿つる霜毛老を送つて來る。
爭敢三年作二歸計一。　爭か敢へて三年歸計を作さん、
心知不レ及二賈(四)生才一。　心に知る賈生の才に及ばざるを。

【字解】【一】悠哉　憂ふる貌。
【二】雪蕊　雪のやうに白き花。
【三】鑷　けぬき。霜毛は白髪。
【四】賈生　漢の文帝の時、賈誼貶せられて長沙王の太傅たりしも、後召還せられて君寵を得たり。

【題義】江亭の上から夕に遠望した時の情景を敍した詩である。

【詩意】高い處から遠方を望めば色色の感慨が起つて、夕方から夜になつてもまだ歸らうとしない。日の沒せんとする時、紅の浪が沸き、月の出はじめる處に白煙が消えなどするを眺め、春の花の枝を辭して去り、我が白髪のいや增しに殖えるのを感じ、感慨が盡きない。我は江州に貶せられてから既に三年になるが、まだ歸京の計畫も立てない。吾が才は賈生に及ばないので、當分召還の恩命を拜することは出來まいと思つてゐるから。

酬二元員外三月三十日慈恩寺相憶見一寄

元員外が三月三十日慈恩寺にて相憶ひて寄せられしに酬ゆ

悵望慈恩三月盡。　悵望す慈恩三月盡、
紫(一)桐花落鳥關關。　紫桐花落ちて鳥關關。
誠知曲(二)水春相憶。　誠に知る曲水春相憶ふを、
其奈長沙(三)老未還。　其れ長沙老未だ還らざるを奈せん。
赤嶺猿聲催二白首一。　赤嶺の猿聲白首を催し、
黃茅(四)瘴色換二朱顏一。　黃茅の瘴色朱顏に換る。
誰言南國無二霜雪一。　誰か言ふ南國霜雪無しと、
盡在二愁人鬢髮間一。　盡く愁人鬢髮の間に在り。

【字解】【一】慈恩寺　長安の曲江池の畔に在る。
【二】紫桐　桐の一種。其花紫色なり。關關は鳥の和鳴する聲。
【三】曲水　曲江をいふ。
【四】長沙　湖南省の地名。ここは江州に比していふ。
【五】黃茅　すすき。朱顏は紅顏。壯者の顏色。

【題義】元員外（元は姓、員外は官名）が、三月三十日に慈恩寺に遊び、樂天を憶うて詩を寄せたのに酬いた作である。

【詩意】自分は江州にゐて遙に三月三十日春の盡きる日の慈恩寺の景を悵望してゐた。察するに紫桐の花も落ちて百鳥が和鳴してゐるであらう。君が曲江に遊んで我を憶ふの深きを知れども、我は江州に貶せられて今以て還れないのだから相見ん由もない。赤肌の山には猿が悲しげに鳴いて白髮を催し、瘴氣の爲に紅顏が失せて黃茅の色と換つてしまつた。南國には霜雪はないなどと言つてはいけない。盡く愁人の鬢髮の間に在つて眞白である。

中秋月（一作二秋月一。）

中秋の月（一に秋月に作る）

萬里清光不レ可レ思。　萬里の清光思ふべからず、
添レ愁益レ恨遶二天涯一。　愁を添へ恨を益して天涯を遶る。
誰人隴外久征戍。　誰人か隴外久しく征戍する、
何處庭前新別離。　何處の庭前にか新に別離する。
失レ寵故姬歸レ院夜。　寵を失ふ故姬院に歸る夜、
沒レ蕃老將上レ樓時。　蕃に沒する老將樓に上る時。
照二他幾許一人腸斷。　幾許をか照他して人腸斷つ、
玉兎銀蟾遠不レ知。　玉兎銀蟾遠くして知らず。

【字解】【一】隴外　隴山の外。秦州記に「隴山は東西百八十里、山巓に登りて東望すれば、秦川四五百里、極目泯然たり。山東の人行役し此に升りて顧瞻する者悲み思はざるはなし」とある。征戍は往きて胡兵の入寇を防ぎ守ること。

【二】照他　照らすこと。他は助辭。

【三】玉兎銀蟾　月の異名。俗說に月中に兎ありともいひ、又蟾蜍ありともいふ故なり。

【題義】中秋卽ち八月十五夜の月を詠じた詩である。文苑英華には單に秋月と題してある。詩の句に滿月のことを述べてないから秋月と題する方が適當のやうである。

【詩意】萬里を照す明月の光は自ら思慮してするのではないが、人の愁恨を增して天地のはてまで及ぶものである。久しく隴山の外に征戍する兵士、新に遠行することになつて庭前に離別する人、寵を失つた美姬が淋しく閨に歸る時、蕃に捕虜になつた老將が高樓に登る時など、樣樣の人と處とを照して斷腸の思をなさしめる。併し月自身は何も知らないのだ。

【餘論】西行法師の「なげけとて月やは物を思はする、かこちがほなる我が涙かな」といふ歌と同じやうな意味である。

謝二李六郎中寄一新蜀茶一

李六郎中が新蜀茶を寄するを謝す

故情周匝向二交親一。　故情周匝して交親に向ひ、
新茗分張及二病身一。　新茗分張して病身に及ぶ。
紅紙一封書後信。　紅紙一封書後の信、
綠芽十片火前春。　綠芽十片火前の春。

【字解】【一】故情　舊日の情誼。交親は交友。

【二】火前　寒食禁火の前。學林新編に「茶の佳なる者は造ること社前に在り、其次は火前。其下は則ち雨前」とある。雨前とは穀雨の前なり。

湯添勺水煎魚眼。末下刀圭攪麴塵。
不寄他人先寄我。應緣我是別茶人。

別は巻十五の戯題盧秘書新移薔薇、巻十六の見紫薇花憶微之二の別花の別に同じ。

【題義】李六郎中（六は排行、郎中は官名）が新製の蜀茶を送つてくれたのを謝した詩である。

【詩意】昔の情誼が周つて友人たる我に及び、この病身が新茶の寄贈に預つた。赤い紙の小包は前便の後の書信ともいふべく、十片の綠芽は摘んで火前に製したのである。鐵瓶に水をさして沸騰させ、挽茶を一匕入れて掻きまはせば、淺黄色の香高き茶になつた。君が他人に贈る前に我に贈つたのは、我は能く茶の良否を識別してゐるからであらう。

攜諸山客同上香爐峰遇雨而還。沾濡狼籍互相笑謔。題此解嘲

諸山客を攜へて同じく香爐峰に上り、雨に遇ひて還る、沾濡狼籍して互に相笑謔す、此を題して嘲を解く

蕭灑登山去。龍鍾遇雨回。
磴危攀薜荔。石滑踐莓苔。
襪汙君相謔。鞾穿我自咍。
莫欺泥土脚。曾蹋玉階來。

【字解】【一】香爐峰　廬山の峰の名。【二】沾濡狼籍　ぬれてびしよびしよになる。【三】笑謔　わらひたはむれる。【四】蕭灑　清逸の貌。【五】龍鍾　ぬれる貌。【六】薜荔　つたかづら。【七】莓苔　こけ。【八】欺　馬鹿にする。侮る。【九】玉階　天子の宮殿。

【題義】諸客を引き具して香爐峰に上つたが、雨に遇つて濡れ鼠のやうになつて還り、互に笑ふやらひやかすやらした。因つて此詩を題して嘲弄の辯解をしたといふ意。

【詩意】一同きちんと身を整へて山に登つたが、雨に遇ひびしよぬれになつて還つた。蔦葛を攀ぢて石段を上り、苔滑な石を踐みなどした爲に、襪が汙れたのをひやかしたり、鞾に穴があいたのを笑つたり、互に笑謔を恣にした。併し諸君、我が泥脚を馬鹿にしてくれるな。此でも昔は宮殿の玉階を蹋んだこともあるのだ。

【三】勺水　一勺ばかりの水。魚眼は沸湯をいふ。湯の沸くこと魚眼の如くなればなり。
【四】末　粉末。ひき茶。刀圭は藥物の量の名。麴塵は淡黄色。
【五】別レ茶　茶の良否を識別する。

彭蠡湖晚歸

彭蠡湖晚歸

(一)彭蠡湖天晚。(二)桃花水氣春。
鳥飛(三)千白點。日沒(四)半紅輪。
何必爲(五)遷客。無勞是病身。
但來臨此望。少有不愁人。

彭蠡湖天の晩、桃花水氣の春。
鳥は飛ぶ千白點、日は沒す半紅輪。
何ぞ必ずしも遷客となり、是病身を勞する無からん。
但來りて此に臨んで望まば、愁へざる人あること少ならん。

【字解】【一】彭蠡湖　江西省の鄱陽湖。【二】桃花水　陰暦二三月の間氷解け雨積り、江水盛に漲るをいふ。【三】千白點　千點白の倒裝。【四】半紅輪　半輪紅の倒裝。【五】遷客　貶謫の人。

【題義】彭蠡湖より夕に歸る時の情景を敍した詩である。

【詩意】夕に彭蠡湖を見渡せば、時正に春で桃花水がなみなみと漲り、白い鳥があちこちに飛び、日は半水中に沒してゐる。自分は貶謫の身だから此景を見て心を勞するのではない。恐らく誰でも此に立つて臨望すれば愁心を起さぬ人はあるまい。

酬贈(一)李鍊師見招

李鍊師の招かれしに酬贈す

幾年司諫直(二)承明。
幾年か諫を司りて承明に直し、

【字解】【一】李鍊師　李は姓。

今日求眞禮(三)上清。
曾犯(四)龍鱗容不死。
欲騎鶴背覓長生。
(五)劉綱有婦仙同得。
(六)伯道無兒累更輕。
若許移家相近住。
便驅雞犬上(七)層城。

今日眞を求めて上清を禮す。
曾て龍鱗を犯し容されて死せず、
鶴背に騎りて長生を覓めんと欲す。
劉綱婦あり仙同じく得たり、
伯道兒なく累更に輕し。
若し家を移して相近づいて住むを許さば、
便ち雞犬を驅りて層城に上らん。

道士の德高く思精なる者を鍊師といふ。【二】承明　承明廬。漢時侍從の臣の居る所の役所。直は宿直すること。【三】上清　道教の宮。【四】犯龍鱗　天子の怒に遇ふ。【五】劉綱　三國吳の人、上虞の令となり、民其惠を受く。妻樊雲翹と四明山に居り、同じく仙し去る。【六】伯道　晉の鄧攸、字は伯道。石勒泗水を過ぐる時、攸其兒及び其從子綏を擔ひて以て逃る。兩全する能はざるを度り、其從子を全うし其兒を棄てて去る。後吳郡太守となり廉明にして百姓の心を得たり。攸兒を棄てし後竟に嗣なし。時人義として之を哀んで曰く「天道無知、鄧伯道をして兒なからしむ」と。【七】層城　崑崙山の最高處、天帝の居る處。ここは李鍊師の道觀に喩ふ。

【題義】李鍊師から來遊の招待を受けたので此詩を贈つて好意に酬いたのである。

【詩意】自分は嘗て天子を御諫め申す役目に任ぜられ承明廬に宿直した者であるが、今は仙道を修行しようと思つて道觀を禮拜する。天子の御怒には觸れたが御赦を蒙つて生命を全うしたので、鶴に騎つて登仙し不老長生を得たいものだと思つてゐる。幸に劉綱と同じく吾が妻も共に仙道を得るであらう。又鄧伯道と同じく兒がないから何も厄介なものはない。若し吾が家を移して近所に住むことを許

してくれるならば、雞や犬まで引連れて鍊師の道觀に參じようと思ふ。

西河雨夜送客

雲黑雨翛翛。江昏水闇流。
有レ風催解レ纜。無レ月伴登レ樓。
酒罷無二多興一。帆開不二少留一。
唯看二一點火一。遙認是行舟。

【字解】【一】翛翛　疾く飛ぶ貌。

【題義】西河は西樓の誤であらう。雨の夜に西樓に登り、別れの杯を酌んで、舟出する客を送つた詩である。

【詩意】黑雲が張りつめ雨霏霏として飛び、闇の中を江水が滔滔と流れてゐる。幸に風があるから纜を解いて舟を出さうといふことになり、月はないが客と連れ立つて西樓に登つた。さて別れの杯を酌んだが一向興が乘らず、やがて舟は帆を張つて漕ぎ出した。暗中遙に一點の火光を看て、あれが我が友の舟たることを認め得るのみだ。

登二西樓一憶二行簡一

毎レ因二樓上一西南望。
始覺人間道路長。
礙レ日暮山青簇簇。
浸レ天秋水白茫茫。
風波不レ見三年面。
書信難レ傳萬里腸。
早晩東歸來下レ峽。
穩乘二船舫一過二瞿唐一。

【字解】【一】人間　世間。

【二】簇簇　羣り聳ゆること。

【三】茫茫　ひろびろとしてゐる貌。

【四】早晩　いつか。早く。

【五】瞿唐　峽の名。四川省奉節縣の東十三里に在り。長江の難處なり。

【題義】西樓に登つて弟行簡の蜀に居るのを憶うた詩である。

【詩意】樓上から西南蜀の方を望む毎に、つくづく此世間の廣遠なことを感ずる。青山は夕日を礙げて簇簇と羣り聳え、長江は白水を湛へて茫茫とひろがつてゐる。君と我とは世の荒波に隔てられて三年も相見ず、書信も通じ難くて遠く心を痛ましめてゐる。いつになつたら君は峽を下つて東に來り、布帆恙なく瞿唐の難處を越すであらう、早くさうなつてほしいものだ。

羅子

有女名羅子。生來纔兩春。
我今年已長。日夜二毛新。
顧念嬌啼面。思量老病身。
直應頭似雪。始得見成人。

【字解】【一】生來　生れてから。兩春は二年。【二】二毛　白毛。

【題義】羅子と名づくる女兒のことを述べた詩である。

【詩意】羅子と名づくる女兒は生れて僅に二年である。我は年已に老い日夜白毛が增すばかりだ。羅子のあまへて泣く顏を見て、飜つて我が老病の身を思ふに、恐らく我が頭髮が雪のやうに白くなる頃始めて此兒の成人するのを見るであらう。

讀僧靈徹詩

東林寺裏西廊下。
石片鐫題數首詩。

僧靈徹の詩を讀む

東林寺裏西廊の下、
石片鐫り題す數首の詩。

【字解】【一】東林寺　廬山に在る寺の名。

言句怪來還校別。
看名知是老湯師。

言句怪み來る還つて校別なるを、
名を看て知る是れ老湯師なるを。

【題義】靈徹（徹、一に澈に作る）は唐の僧で、越州の湯氏の子である。常に皎然と遊び、包佶・李紓の知遇を得、名輩下に振つた。元和中宣州で卒した。此詩は其詩を讀んで作つたのである。

【詩意】東林寺の西廊の下に、石に刻した數首の詩がある。其詩を讀んで較垢ぬけがして平凡でないのを怪んだが、作者の名を看て靈徹師の作なることを知り、なるほどと合點した。

聽李士良琵琶　人各賦二十八字一

李士良の琵琶を聽く　人ごとに各二十八字を賦す

聲似胡兒彈舌語。
愁如塞月恨邊雲。
閒人暫聽猶眉斂。
可レ使和蕃公主聞。

聲は胡兒の舌語を彈ずるに似、
愁は塞月の邊雲に恨むが如し。
閒人暫く聽いて猶眉を斂む、
和蕃公主をして聞かしむべけんや。

【字解】【一】胡兒　えびすの人。【二】塞月　胡地の城塞を照す月。邊雲は邊塞の雲。【三】閒人　ひまなひと。【四】和蕃公主　天子の女を公主といふ。蕃國と和親を結ぶ爲に蕃王に嫁する皇女。

【題義】李士良が琵琶を彈ずるのを聽いて作つた詩である。琵琶はもと胡中に出づ。

【詩意】李士良の彈ずる琵琶の聲を聞くに、恰も胡兒の囀る言葉を其儘寫し出したやうで、其愁は塞

月が邊雲の間に恨むのを見るが如くである。何事もない人が聽いてすら眉を斂めて悲むのだから、到底和蕃公主などには聞かせられない。

昭君怨

昭君怨

明妃風貌最娉婷。明妃の風貌最も娉婷、
合在椒房應四星。合に椒房に在つて四星に應ずべし。
只得當年備宮掖。只當年宮掖に備はるを得たるも、
何曾專夜奉幃屏。何ぞ曾て夜を專にして幃屏に奉ぜん。
見疎從道迷圖畫。見ること疎にして從道く圖畫に迷へりと、
知屈那教配虜庭。知ること屈ならば那ぞ虜庭に配せしめん。
自是君恩薄如紙。自ら是れ君恩薄きこと紙の如し、
不須一向恨丹青。須ひず一向丹青を恨むを。

【題義】王昭君が不幸にして匈奴に嫁した事を詠じた詩である。卷十四の王昭君二首を參照せられよ。

【字解】【一】昭君怨　琴曲の名漢の元帝王昭君を寵幸せず、後匈奴の單于に嫁せしむ。此曲は昭君の怨思を述べたのである。
【二】明妃　王昭君をいふ。娉婷は美しき貌。
【三】椒房　後宮をいふ。四星は帝嚳四妃を娶り天の四星に法りし故事。
【四】宮掖　宮中。
【五】幃屏　帳帷の中。
【六】虜庭　えびすの朝廷。配は嫁なり。
【七】丹青　畫をいふ。

【詩意】昭君は非常な美人であつたから、當然後宮に仕へて元帝の寵幸を得べき筈であつた。所がただ宮中に仕へたといふのみで、君の枕席に侍するには至らなかつた。君に拜謁する機會がなかつたのは肖像畫の爲だとはいふが、若し君に人を知るの明があれば、匈奴に嫁せしめるやうな事はなかつたらう。して見れば矢張君恩が薄いからであつて、强ち畫のとがばかりではない。

閒吟

閒吟

自從苦學空門法。苦に空門の法を學びてより、
銷盡平生種種心。銷し盡す平生種種の心。
唯有詩魔降未得。唯詩魔有つて降すこと未だ得ず、
每逢風月一閒吟。風月に逢ふ每に一たび閒吟す。

【題義】靜かに詩を吟ずる事を述べた詩である。

【詩意】勉めて佛道を修行してから、樣樣の心の迷を銷すことが出來るやうになつたが、ただ詩魔だけは今以て降伏することが出來ず、風月の麗はしい時に遇ふと忽ち閒吟したくなる。

戲問山石榴

戲に山石榴に問ふ

【字解】【一】空門法　佛教をいふ。

小樹山榴近砌栽、
半含紅蕚帶花來。
爭知司馬夫人妬、
移到庭前便不開。

【題義】戯に庭前に栽ゑた山躑躅に問うたといふ詩である。

【詩意】山躑躅の小樹をば、紅の花の咲いて居るまゝ、庭近く移し栽ゑたが、司馬夫人の嫉妬を恐れたのか、栽ゑかへてからは一向花が咲かないのは、どうした譯だ。

小樹山榴砌に近く栽う、
半紅蕚を含み花を帶びて來る。
爭か知らん司馬夫人の妬、
庭前に移し到りてより便ち開かず。

【字解】【一】山石榴　やまつつじ。【二】砌　みぎり。庭。【三】紅蕚　紅の花。【四】司馬夫人　江州司馬たる白樂天の妻。

編集拙詩成一十五卷。因題卷末。戯贈元九。李二十

拙詩を編集して一十五卷と成し、因つて卷末に題し、戯に元九・李二十に贈る

一篇長恨有風情、
十首秦吟近正聲。
毎被老元偸格律、
苦教短李伏歌行。

一篇の長恨風情有り、
十首の秦吟正聲に近し。
毎に老元に格律を偸まれ、
苦に短李をして歌行に伏せしむ。

【字解】【一】長恨　樂天の作つた長恨歌。卷十二に見ゆ。【二】秦吟　樂天の作つた秦中吟。卷二に見ゆ。【三】老元　老いたる元稹、格律は詩の格調。【四】短李　李紳をいふ。身長低き故時人短李といふ。【五】身後　死後。

【題義】自作の詩を編集して十五卷と成し、因つて卷末に此詩を題し、兼ねて戯に元稹と李紳とに贈つたといふ意。

【詩意】一篇の長恨歌は風情ある傑作で、秦中吟十首は正聲に近き佳作である。流石の元稹も吾が詩の格調を横取りし、彼の李紳すら吾が歌行には感伏した。されば世間の富貴に於てこそ縁がないが、死後は文章に於て必ず名を成すであらう。我が氣傲りて法螺を吹くのをとがめてはいけない。現に十五卷の金玉の詩編を集め成したではないか。

世間富貴應無分、
身後文章合有名。
莫怪氣粗言語大、
新排十五卷詩成。

世間の富貴應に分無かるべし、
身後の文章合に名あるべし。
怪む莫れ氣粗にして言語の大なるを、
新に十五卷の詩を排して成る。

湖上閒望

藤花浪拂紫茸條、

藤花浪は拂ふ紫茸條、

【字解】【一】紫茸條　紫の藤の花の枝。【二】菰葉　まこもの葉。

(二)菰葉風翻綠剪刀。菰葉風は翻す綠剪刀。
閒弄(三)水芳生(二)楚思(一)。閒に水芳を弄して楚思を生じ、
時時合(レ)眼詠(二)離騷(四)(一)。時時眼を合せて離騷を詠ず。

【題義】湖水の邊で閑に四方を眺望して作つた詩である。
【詩意】湖上の浪は藤花の枝を拂ひ、風は菰の小刀の如き葉を翻してゐる。閑に水邊の花草を弄するに當つて忽ち楚客の愁を發し、時時目をつぶつて離騷を吟詠した。

綠剪刀は綠の小刀。菰の葉を刀にたとへたのである。【三】水芳　水邊の草や花。楚思は楚客の愁。【四】離騷　楚の屈原が憂愁のあまり作つた詩篇の名。

白樂天詩集　卷十七

律詩　五言七言自二兩韻一至二五十韻一凡一百首

江南謫居十韻

自(一)哂沈冥客。曾爲(二)獻納臣(一)。
壯心徒許(レ)國。薄命不(レ)如(レ)人。
纔展(二)凌(レ)雲翅(一)。俄成(二)失(レ)水鱗(一)。
葵枯猶向(レ)日。蓬斷欲(レ)辭(レ)春。
澤畔長愁地。天邊欲(レ)老身。
蕭條殘活計。冷落舊交親。
草合門無(レ)徑。煙消甑有(レ)塵。
憂方知(二)酒聖(一)。貧始覺(二)錢神(一)。
虎尾難(レ)容(レ)足。羊腸易(レ)覆(レ)輪。

江南謫居十韻

自ら哂ふ沈冥の客、曾て獻納の臣たりしことを。
壯心徒に國に許し、薄命人に如かず。
纔に雲を凌ぐ翅を展べ、俄に水を失ふ鱗と成る。
葵枯れて猶日に向ひ、蓬斷えて春を辭せんと欲す。
澤畔長愁の地、天邊老いんと欲する身。
蕭條たり殘活計、冷落す舊交親。
草合ひて門に徑無く、煙消えて甑に塵有り。
憂へては方に酒の聖を知り、貧しては始めて錢の神なるを覺ゆ。
虎尾は足を容れ難く、羊腸は輪を覆し易し。

行藏與通塞(八)と、一切陶鈞(九)に任す。

【字解】【一】沈冥　沈淪といふが如し。【二】獻納臣　君を諫むる臣。左拾遺となりしことを指す。【三】蕭條　淋しき貌。【四】酒聖　清酒を聖人といひ濁酒を賢人といふ。【五】錢神　錢の力は神に同じとの意。晉の魯褒時の貪鄙を傷み錢神論を著して之を刺れり。【六】虎尾　書經に「心の憂危、虎尾を踏み春氷を渉るが若し」とある。【七】羊腸　つづらおりなる險阪。【八】行藏　進んで行ふと退いてかくろると。通塞は窮達といふが如し。【九】陶鈞　天命なり。

【題義】江南謫居の狀を二十句に寫し出したのである。

【詩意】今こそ尾羽打ち枯らしてゐるが、これでも昔は諫諍の臣であつた。國恩に報いようと心に自ら許したが、運拙くして事志と違ひ、僅に青雲に升つたかと思ふまに、忽ち水を失つた魚のやうになつてしまつた。身は斷蓬の如く春光に浴することも出來ずにゐるが、心は葵の日に向ふと同じく一刻も君を忘れない。老病を抱いて江澤の畔に長愁し、見すぼらしい活計を立て、交友にも見離されてしまひ、門前は草茫茫として飯には塵さへ積り、憂は酒の力を借りて掃ひ、貧して始めて金錢の偉力を覺つた。併しうつかり足を踏み出すと却つて身の破滅を招くこともあるから、すべて吾が身の行藏窮達を天命に任せて自ら安んじてゐる。

江樓夜吟元九律詩成三十韻

昨夜江樓上、吟君數十篇。（詞飄朱檻底、韻墮渌江前。）

江樓夜元九が律詩を吟じ三十韻を成す

昨夜江樓の上、君が數十篇を吟ず。

詞は朱檻の底に飄へり、韻は渌江の前に墮つ。

清楚音諧律、精微思入玄。
收將白雪麗、奪盡碧雲妍。
寸截金爲句、雙雕玉作聯。
八風凄間發、五彩爛相宣。
氷扣聲聲冷、珠排字字圓。
文頭交比繡、筋骨軟於綿。
頒湧同波浪、錚鏦過管絃。
醴泉流出地、鈞樂下從天。
神鬼聞如泣、魚龍聽似禪。
星廻疑聚集、月落爲留連。
鴈感無鳴者、猿愁亦悄然。
交流遷客淚、停住賈人船。
闇被歌姬乞、潛聞思婦傳。
斜行題粉壁、短卷寫紅箋。

清楚にして音、律に諧ひ、精微にして思玄に入る。
白雪の麗しきを收め將つて、碧雲の妍を奪ひ盡す。
寸截金を句と爲し、雙雕玉を聯と作す。
八風凄として間に發り、五彩爛として相宣ぶ。
氷のごとく扣いて聲聲冷かに、珠のごとく排ねて字字圓し。
頒湧として波浪に同じく、錚鏦として管絃に過ぐ。
醴泉流れて地より出で、鈞樂下つて天よりす。
神鬼聞いて泣くが如く、魚龍聽いて禪に似たり。
星廻り疑つて聚集し、月落ちて爲に留連す。
鴈感じて鳴く者無く、猿愁へて亦悄然たり。
遷客の淚を交流し、賈人の船を停住す。
闇に歌姬に乞はれ、潛に思婦の傳ふるを聞く。
斜行粉壁に題し、短卷紅箋に寫す。

肉味經時忘。頭風當日痊。
老張知定伏。
短李愛應顚。』張十八籍、李二十紳、皆攻律詩、故云。
道屈才方振。身閒業始專。
天敎聲烜赫。理合命迍邅。』
顧我文章劣。知他氣力全。
功夫雖共到。巧拙尙相懸。
各有詩千首。俱拋海一邊。
白頭吟處變。青眼望中穿。
酬答朝妨食。披尋夜廢眠。
老償文債負。宿結字因緣。』
每歎陳夫子。陳子昂著感遇詩稱於世。
常嗟李謫仙。賀知章謂李白爲謫仙。
名高折人爵。

肉味時を經て忘れ、頭風は當日痊ゆ。
老張知つて定めて伏せん、
短李愛して應に顚ずべし。
道屈して才方に振ひ、身閒にして業始めて專なり。
天聲をして烜赫ならしめ、理合に命迍邅なるべし。
我が文章の劣れるを顧み、他の氣力の全きを知る。
功夫共に到ると雖も、巧拙尙相懸なり。
各〻詩千首有り、俱に海の一邊に拋つ。
白頭吟處に變じ、青眼望中に穿つ。
酬答朝に食を妨げ、披尋夜眠を廢す。
老いて償ふ文の債負、宿結す字の因緣。
毎に歎ず陳夫子、
常に嗟す李謫仙。
名高うして人爵を折き、

思苦減天年。陳竟無官、李亦早夭。
不得當時遇。空令後代憐。
相悲今若此。湓浦與通川。』

思苦んで天年を減ず。
當時遇ふことを得ず、空しく後代をして憐ましむ。
相悲しむこと今此の若し、湓浦と通川と。

【字解】【一】朱檻　朱塗の欄干。【二】淥江　清き江水。【三】玄　深遠なり。【四】雙雕　彫琢すること。聯は對句なる故、雙といふ。【五】八風　八方の風。左傳襄公十八年、南風不競の杜註に「歌ふ者律を吹いて以て八風を詠ず云云」とある。【六】澒湧　わき立つこと。【七】錚鏦　管絃の聲。【八】醴泉　泉甘きこと醴の如きなり。禮記に「天甘露を降し地醴泉を出す」とある。【九】鈞樂　鈞天廣樂。天上の音樂。【一〇】遷客　貶謫せられてゐる人。【一一】思婦　夫を思ふ妻。【一二】紅箋　赤い紙片。【一三】肉味　肉の味。論語に「子齊に在りて韶を聞くこと三月、肉の味を知らず」とある。【一四】頭風　頭痛。【一五】顚　氣狂ひになる。【一六】烜赫　盛なる貌。【一七】迍邅　進み難き貌。【一八】功夫　工夫に同じ、思慮考案なり。【一九】青眼　親愛する目つき。【二〇】債負　負債、借錢。【二一】湓浦　江州に在り、樂天の居る處。通川は通州。元稹の居る處。

【題義】夜江樓の上で元稹の律詩を吟じ、六十句の長律を作つたといふ意。

【詩意】昨夜江樓の上で君の詩數十篇を吟じたので、聲韻が朱塗の欄干の下、淸流の前に響き渡つた。君の詩は音律にも諧ひ、思想も深邃であつて、白雪碧雲と其美を爭ふに足り、金玉を彫琢して成したかと疑はれ、氷や珠の宛轉として相擊つが如く、波浪の洶湧するが如く、醴泉の地より出で廣樂の天より下るが如く、鬼神も爲に泣き、魚龍も禪定に入つたやうに聽き惚れ、星も疑つて密集し、月も落ちんとして尙徘徊し、遷客をして涙を流さしめ、賈人をして船を停めて傾聽せしめ、歌姬は敎を乞ひ、思婦は早くも傳習し、斜に粉壁に題する者もあれば紅箋に寫して珍藏する者もあり、一吟すれば肉の味

をも忘れ、頭痛などは即座に直るといふ麗しさである。張籍や李紳も定めて感服し目を廻すであらう。道窮して君の才力は方に振ひ、身が閑暇になつたので力を詩に專にすることが出來るやうになつた。されば天は君に佳詩を與へて好運を奪つたのである。我も君も共に詩の爲に工夫を凝らしてはゐるが、君は巧で我は拙で、到底比較にはならない。併し各〻千首の詩を作つて東西に相隔り、一吟する毎に頭髪の白さを增し、親愛の眼を以て相望んでゐる。酬答の詩を作らうとしては朝食を妨げ、詩意を探求しては夜眠を廢し、老身を以て應酬に勞し、文字の宿緣を結んでゐる。自分は常に陳子昂や李白の事を嘆息してゐる。彼等は其名の高き爲に人爵に於て大損をなし、(李白に就いていふ。)詩の爲に苦心したので壽命を縮め、(陳子昂に就いていふ。)俱に生時に不遇であつて、後世の人をして憐愍の情を抱かしめた。今君と我とは、一は江州に居り一は通州にゐて、相悲むこと亦此の如くである。さてもさても。

潯陽歲晩。寄元八郎中・庚三十二員外

潯陽の歲晩、元八郎中・庚三十二員外に寄す

閲水年將暮。燒金道未成。
丹砂不肯死。白髮自須生。
病肺慙杯滿。衰顏忌鏡明。
春深舊鄉夢。歲晩故交情。
一別浮雲散。雙瞻列宿榮。
螭頭階下立。龍尾道前行。
封事頻聞奏。除書數見名。
虛懷事僚友。平步取公卿。
漏盡雞人報。朝回幼女迎。
可憐白司馬。老大在溢城。

【字解】【一】閲水　水の流を觀る。【二】燒金　道家の煉丹をいふ。【三】丹砂　仙藥なり。本草經に「丹砂久しく服すれば神明に通じて老いず」とある。【四】列宿　列星なり。元八・庚三十二に喩ふ。【五】螭頭階　天子の階をいふ。螭頭を刻して飾とする故なり。【六】龍尾道　含元殿前の升殿の道なり。【七】封事　天子に奉る上奏文。【八】除書　官吏の叙任を記載する書。今日の官報の如きもの。【九】虛懷　何等の求むる所なき虛淡な心。【一〇】平步　穩に步む。【一一】漏　水時計。時刻の意、雞人は夜の時に明けんとする時、呼んで以て百官を警め起床せしむる官吏。【一二】白司馬　江州司馬白居易。【一三】溢城　江州をいふ。溢水のほとりに在る故。

【題義】潯陽(江州)に在りて歲晩の所感を述べ、元八郎中と庚三十二員外とに寄せた詩である。

【詩意】くよくよと江水の流を見てゐる中に今年も將に暮れんとする。仙藥を煉り道術を修めようと思へども道未だ成らず、丹砂を服して不老不死を希へども、白髮の生ずるを如何ともすることは出

來ない。病肺は酒杯を恐れ衰顔は明鏡を忌み、春深けては故郷の夢を見、歳晩に際しては舊友を思慕する。予は一たび別れて浮雲の如く江州に留滯し、君等二人の相竝んで星の如くに時めいてゐるのを仰視する。君等は或は宮殿の玉階の下に立ち、或は龍尾道の前を行き、頻に上奏の文を奉り、屢〻陞任の辭令を見る。虚心にして能く同僚に交り、平歩して公卿の心を得、宿直の時刻の盡きるのを待つて自宅に歸れば、幼い女が門に出迎へるといふやうな羨ましい境遇にゐる。翻つて江州司馬たる白居易はといへば、老衰の身を以て今以て江州に留滯してゐる。誠に憐むべき狀態である。

元九以綠絲布・白輕容見寄。製成衣服。以詩報知

元九綠絲布・白輕容を以て寄せらる、製して衣服と成し、詩を以て報知す

綠絲文布素輕容。　綠絲文布素輕容、
珍重京華手自封。　珍重す京華手自ら封ずるを。
貧友遠勞君寄附。　貧友遠く勞して君寄附し、
病妻親爲我裁縫。　病妻は親ら我が爲に裁縫す。
袴花白似秋雲薄。　袴花白うして秋雲の薄きに似、
衫色青於春草濃。　衫色春草の濃きよりも青し。

【字解】【一】白輕容　輕容とは紗の至つて輕薄なるもの。
【二】珍重　感謝といふが如し。京華は帝都。
【三】衫色　上衣の色。

欲著却休知不稱。　著けんと欲し却つて休めて稱はざるを知り、
折腰無復舊形容。　腰を折りて復舊形容無し。

【題義】元稹が綠絲布と白輕容とを送つてくれたので、それで衣服を作つた。因つて詩を以て其事を報告したといふのである。

【詩意】綠絲布と白輕容とを、遙遙長安の都から手自ら封じて送つてくれたのは感謝に堪へない。君が貧友たる我を憐んで寄贈してくれたので、病妻は親しく我が爲に裁縫して衣服を作つた。袴の花模樣は秋雲の如く薄く、(白輕容を袴にしたのである。)上衣の色は春草よりも青い。(綠絲布を上衣にしたのである。)さて其衣服を著ようとしたが似合はないのを恐れてやめた。今自分は上官の前にぺこぺこする身分で昔の俤はないのだもの。

清明日送韋侍御貶虔州。

清明の日韋侍御の虔州に貶せらるるを送る

寂寞清明日。蕭條司馬家。　寂寞たる清明の日、蕭條たる司馬の家。
留餳和冷粥。出火煑新茶。　餳を留めて冷粥に和し、火を出して新茶を煑る。
欲別能無酒。相留亦有花。　別れんと欲して能く酒無からんや、相留むるに亦花有り。
南遷更何處。此地已天涯。　南遷更に何の處ぞ、此地已に天涯。

【字解】【一】清明日　冬至から百五日目を寒食といひ、此日には火を禁ずる習である。寒食の後二日を清明といふ。陰暦の三月である。【二】虔州　今の虔南縣。今江西省贛州府に屬す。【三】蕭條　淋しき貌。司馬は江州司馬白樂天。【四】餳　あめ。冷粥は冷なる粥。寒食には火を禁ずる故冷なるなり。餳と粥とをまぜたものを餳粥といふ。中記に「天寶二年諸陵寒食を以て餳粥を薦む」とある。煮て酪となし、杏仁を擣き煮て粥を作る」とあり、又唐書に「天寶二年諸陵寒食を以て餳粥を薦む」とある。

【題義】清明の日に今迄江州に貶せられてゐた韋侍御が更に南方なる虔州に貶せられるのを送つた詩である。

【詩意】寒食のあとの清明の日は、江州司馬たる我の家は殊に物淋しい。寒食の後なので冷たい餳粥を食べたり、禁火の後に新しい火を取つて新茶を煎じて飲んだりしてゐる。併し君が旅立つのを送るからには酒ぐらゐはあり、又君を引留め顔に花も咲いてゐるから、落著いて飲んでもらひたい。さて君は更に此より南方に遷されるのださうだが、この江州ですら天涯なのに、更に南方といへば殆ど人の住まない處でもあらう。誠に氣の毒なことだ。

九江春望

九江春望

森茫積水非二吾土一。　滲茫たる積水吾土に非ず、
飄泊浮萍是我身。　飄泊せる浮萍是れ我身なり。
身外信レ縁爲二活計一。　身外縁に信せて活計を爲し、
眼前隨レ事覓二交親一。　眼前事に隨つて交親を覓む。
爐煙豈異二終南色一。　爐煙豈異ならんや終南の色に。
滋草寧殊二渭北春一。　滋草寧ぞ殊ならんや渭北の春に。
此地何妨便終老。　此地何ぞ妨げん便ち終老するに、
匹如元是九江人。　匹如す元是れ九江の人なるに。

香爐峰上多レ煙、滋水岸足二寄草一、因而記レ之。

【字解】【一】森茫　ひろびろとしてゐる貌。積水は深き水。【二】飄泊　處定めず飄りただよふこと。浮萍はうきくさ。【三】終南　長安の南にある山。【四】滋草　滋水の岸に生ずる草。【五】渭北　渭水の北。樂天の舊居の在りし處。【六】匹如　相似たる意。

【題義】九江とは應劭漢書地理志に註して「江、潯陽より分れて九道となるを言ふ」とあり、此詩は九江の邊で春四方を眺望した時の感想を敍したのである。

【詩意】ひろびろとした此水鄉は吾が故郷ではないが、吾が身は江上に漂つてゐる浮草と同じである。見ず識らずの人でも緣故を結んで活計を立て、眼前の事に就いて親交を求めなどしてゐると、香爐峰の煙も終南山の春色と同じに見え、滋浦の春草も渭村の舊居のやうに思はれる。されば吾が終老の地として少しも不足はない。慣れては本來九江に生れた人も同樣だから。

晩題東林寺雙池

晩題二東林寺雙池一

向レ晩雙池好。初晴百物新。　晩に向つて雙池好し、初めて晴れて百物新なり。

裊枝翻翠羽。濺水躍紅鱗。
萍汎同遊子。蓮開當麗人。
臨流一惆悵。還憶曲江春。

【字解】【一】東林寺　廬山に在る寺。【二】百物　萬物といふが如し。すべての物。【三】裊枝　しなやかな枝。翠羽は翡翠といふ鳥。【四】濺水　迸りそそぐ水。紅鱗は赤い魚。【五】萍　うき草。遊子は他郷に居る人。【六】麗人　美人。【七】曲江　長安に在る池の名。都人の遊賞地なり。

【題義】夕方東林寺に遊んで其池に題した詩である。

【詩意】夕方になつて初めて晴れたので、雙池のほとりの萬物が拭つたやうに清らかである。しなやかな木の枝には翡翠が飛びかひ、水の迸る處には錦鱗が躍つてゐる。水上に漂へる浮草を他郷にさまよへる我に譬ふれば、蓮の花はさしづめ美人に見立ててよからう。彼此と心を痛ましめて此池に對し、又故郷なる長安の曲江を憶うた。

贈内子

白髮方興歎。青娥亦伴愁。
寒衣補燈下。小女戲牀頭。

【題義】樂天が己の妻に贈つた詩である。

【詩意】自分は現に白髮を歎じつつあるが、御身も愁に伴つて吾が側に居り、燈の下で冬著を繕つてゐると腰掛のあたりで少女が戲れてゐる。夫婦の語らひも昔の夢となつて色も艷も失せ果ててしまつた。御身も俺のやうな貧士に嫁して、つまらなく一生を終るであらうが、同じく貧とは謂ふものの其中に自ら等級があるから、彼の黔婁に嫁したよりはまだましだらう。

【字解】【一】内子　妻をいふ。【二】青娥　若き女をいふ。ここは樂天の妻を指す。【三】牀頭　腰掛のほとり。【四】閤澹　小暗き貌。屏幃は屏風、とばりなど。【五】凄涼　物淋しき貌。【六】黔婁　昔の貧士。

送客春遊嶺南二十韻　因序擬下微之送崔二十二之作上

閤澹屏幃故。凄涼枕席秋。
貧中有等級。猶勝嫁黔婁。

客の春嶺南に遊ぶを送る二十韻　因つて嶺南の方物を序し以て之に諭し、幷せて微之が崔二十二を送るの作に擬す

已訝遊何遠。仍嗟別太頻。
離容君蹙促。贈語我殷勤。
迢遞天南面。蒼茫海北濱。

訶陵國分界、交趾郡爲鄰。
蓊鬱三光晦、溫噎四氣勻。
陰晴變寒暑、昏曉錯星辰。
瘴地難爲老、蠻陬不易馴。
土民稀白首、洞主盡黃巾。
戰艦猶驚浪、戎軍未息塵。（時黃家賊方動。）
紅旗圍卉服、紫綬裹文身。
劘苦桄榔裛、漿酸橄欖新。
牙檣迎海舶、銅鼓賽江神。
不凍貪泉暖、無霜毒草春。
雲煙蟒蛇氣、刀劍鱷魚鱗。
路足鼷棲客、官多謫逐臣。
天黃生颶母、（颶母如虹斷、欲大風一卽見。）雨黑長楓人。（楓人因雨後雷雨、輒闇長數丈。）
廻使先傳語、征軒早返輪。
須防杯裏蠱、（南方蠱毒、多置酒中。）莫愛橐中珍。
北與南殊俗、身將貨孰親。
嘗聞君子誡、憂道不憂貧。

【字解】【一】嶺南　五嶺の南。五嶺とは大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽なり。【二】離容　別を悲む容貌。【三】殷勤　親切なこと。【四】迢遞　遙なる貌。【五】蒼茫　青青として廣き貌。北濘は北涯。【六】訶陵　南方の國名。唐書南蠻傳に見ゆ。【七】交趾　南方の郡名。【八】蓊鬱　木の茂る貌。三光は日月星。【九】溫噎　暖なる貌。四氣は四季の氣なり。【一〇】昏曉　朝暮なり。星辰は星。【一一】瘴地　惡氣の多き地。【一二】蠻陬　蠻邊といふが如し。【一三】洞主　洞窟の中に住むカシラ。【一四】黃巾　黃巾は賊の名。後漢の末鉅鹿の張角といふ者黃老に奉事して符水を以て病を療し太平道と號す。弟子數十萬を率ゐて亂をなし、皆黃巾を著けて標識となす。因つて黃巾の賊といふ。【一五】戎軍　えびすの軍。【一六】卉服　草を以て服となす。書經に島夷卉服とある。【一七】文身　いれずみを施した身體。南夷に斷髮文身の風あり。【一八】檄欖　オリーブ。暖地に產する果。【一九】銅鼓　古蠻人の用ひし鼓。【二〇】貪泉　廣州に在る泉の名。晉書吳隱之傳に見ゆ。【二一】羈棲　たびずまひ。【二二】楓人　朝野僉載に「江東江西の山中に楓人多し。楓下に生じ人の形に似たり。長さ三四尺。夜雷雨すれば卽ち長さ樹と齊し。人を見れば卽ち縮りて舊に依る」とある。【二三】廻使　使をかへす。【二四】征軒　遠行の車。【二五】橐中　旅嚢の中。

【題義】客の嶺南地方に旅するを送る四十句の詩で、自註にもある如く、務めて物産風土の異を竝べ立てて地方色を出さうと試みた詩である。

【詩意】君が遠く南方に旅立つことになり、忽ち又別れねばならないのは嗟かはしいことだ。君も流石に別を悲んでおぢおぢして居るのを見て、僕は懇に一言を呈しようと思ふ。君は此から蒼茫たる海の北涯を去つて遙遙南方の天涯に向ふのであるが、その地は訶陵國や交趾郡と境を接し、草木がいつも繁茂して日月爲に暗く、四季を通じてぽかぽかと暖く、寒暑の往來、星辰の運行も中國とは全く相違してゐる。惡氣の多い土地であるから住み馴れることは容易でない。土地の人ですら白毛になるまで生きる者は稀で、洞窟の中には賊の渠魁が住んでゐて、戰艦などを乘りまはして叛亂を逞うし、紅旗が卉服を著た兵士を圍み、紫の綬で文身を結んでゐる。麪は桄榔がはひつてゐるので味が苦く、水漿は檳榔がはひつてゐるので酸味を帶びてゐる。牙檣の船に乘つて海舶を迎へ、銅鼓を打つて江神を祭り、貪泉といふいつも凍らぬ泉があり、霜が降らないので毒草は常に春のやうに茂つてゐる。大蛇は雲の如き毒氣を吐き、鱷魚は刀劍の如き牙を磨きなどしてゐる。されば道を歩いてゐる者も多くは旅の人か謫逐の臣かである。天は黃色になると颶母を生じ、雨が降つて暗くなると楓人が大きくなる。實に名狀すべからざる惡ろしい處だ。君も早く使を歸して先づ歎願し、車をめぐらして還るがよい。酒を飮むにも蠱に注意し、南方の珍物などを囊に滿たして歸らうなどといふ慾は出さぬがよい。命と珍物とはどちらが大事か。昔の君子も道を憂へて貧を憂へずと言つてゐるではないか。

自題

自ら題す

功名宿昔人多許。
寵辱斯須自不レ知。
一旦失レ恩先左降。
三年隨レ例未二量移一。
馬頭覓レ角生何日。
石火敲レ光住幾時。
前事是身俱若レ此。
空門不レ去欲二何之一。

功名は宿昔人多く許しぬ、
寵辱は斯須自ら知らず。
一旦恩を失つて先づ左降せらる、
三年例に隨つて未だ量移せられず。
馬頭角を覓むるも生ずる何の日ぞ、
石火光を敲きて住まる幾時ぞ。
前事是身俱に此の若し、
空門に去らずして何にか之かんと欲する。

【題義】自ら己の咸想を述べた詩である。

【詩意】嘗ては世人からも將來の功名を期待されたものであつたが、今では君寵を得て居ると謂つてよいのか、恥辱を蒙つてゐると謂つてよいのか、自分ながら判斷に苦しむやうな有樣である。一旦江州に左遷されてから既に三年になつても、まだ常例に倣つて量移されない。馬の頭に角の生えることを望んでゐても何日生えるか殆どあてもない。又石を打つて火を發し其火を永く留めて置かうとして

【字解】【一】宿昔　往日。嘗て。
【二】左降　左遷なり。
【三】量移　人臣の罪を得て遠方に貶せられた者が、赦に遇ひ改めて近地に安置せられるのをいふ。
【四】空門　佛道。

も、それは出來ない相談である。まア吾が身の今日までの有樣は譬へて見ればそんなものだ。だから佛道にでもはひつて煩惱を除くより外には往き場所がないのだ。

自悲

自ら悲む

火宅煎熬地。霜松摧折身。火宅煎熬の地、霜松摧折の身。
因知羣動內。易死不過人。因つて知る羣動の內、死し易きは人に過ぎず。

【字解】【一】火宅　煩惱の世界に喩ふ。法華經に「三界安きなし、猶火宅の如し、衆苦の燒く所、我皆拔濟す」とある。煎熬は火であぶり燒くこと。【二】羣動　多くの生物。

【題義】自ら悲嘆の情を述べた詩である。

【詩意】此世は人を燒く火宅のやうなもので、人の身は霜に折ける松のやうなものだ。多くの生物の中で人ほど死に易いものはあるまい。

尋郭道士不遇

郭道士を尋ねて遇はず

郡中乞假來相訪。郡中假を乞うて來つて相訪ふ、
洞裏朝元去不逢。洞裏元に朝し去つて逢はず。

【字解】【一】郡中　郡は江州を指す。假は暇に同じ。【二】朝元　玄元皇帝李老君の廟に參朝する。

看院祇留雙白鶴。院を看して祇留む雙白鶴、
入門惟見一青松。門に入つて惟見る一青松。
藥爐有火丹應伏。藥爐火有り丹應に伏すべし、
雲碓無人水自舂。雲碓人無く水自ら舂く。

欲問參同契中事。參同契中の事を問はんと欲し、
更期何日得從容。更に期す何の日か從容たるを得んや。

【三】看院　看は看守の義、留守番をさせること。【四】藥爐　仙藥を鍊る爐。丹は仙丹、仙藥。【五】雲碓　雲母か舂くカラウス。雲母は仙藥に用ふ。

【六】參同契　書名。魏伯陽の作と稱す。仙藥を鍊る法を說いたもの。【七】從容　くつろいで語り合ふ意。

【題義】道士（道教の僧侶）郭氏を訪ひて不在の爲に遇はずに歸つたことを述べた詩である。

【詩意】郡守から暇をもらつて郭道士を訪ひしも、道士は李元君を祀つてある洞中に參籠にでも出掛けたらしく、不在で逢はれなかつた。院を見れば只二羽の鶴に留守番させ、門の內には一本の青松が在るばかりだ。藥爐には火があるが、恐らくあの中には仙丹が埋めてあるのであらう。雲母を搗く碓は人がゐないのに、ひとりでに舂いてゐる。自分は參同契の中に書いてある事を質問したいと思つて來たのであるが、今は官に在つて自由の身でないが、いつになつたら從容と相語らふことが出來るであらう。

潯陽春　三首　元和十二年作。　潯陽の春　三首　元和十二年の作

春生　　春生ず

春生何處閙周遊。　春生じて何の處にか閙に周遊する、
海角天涯遍始休。　海角天涯遍くして始めて休す。
先遣和風報消息。　先づ和風をして消息を報せしめ、
續敎啼鳥說來由。　續いて啼鳥をして來由を說かしむ。
展張草色長河畔。　草色を展張す長河の畔、
點綴花房小樹頭。　花房を點綴す小樹の頭。
若到故園應覓我。　若し故園に到つて應に我を覓むべくんば、
爲傳淪落在江州。　爲に傳へよ淪落して江州に在りと。

【題義】潯陽、卽ち江州に在りて、春の生じ、來り、去る事を敍した詩である。

【詩意】春は何處から發生し、天涯地角を遍く周遊するのであらうか。その發生するや先づ和風をして消息を傳へしめ、續いて啼鳥をして由來を說かしめ、河の畔には草を展張せしめ、樹梢には花を綴らしめる。若し春が吾が故郷に到りて我を尋ねることもあらば、樂天は今落ちぶれて江州にゐると傳へてくれよ。

【字解】【二】花房　はなぶさ。
【三】故園　故郷。
【三】淪落　おちぶれる。

春來　　春來る

春來觸動故鄉情。　春來つて觸れ動かす故郷の情、
忽見風光憶兩京。　忽ち風光を見て兩京を憶ふ。
金谷踢花香騎入。　金谷花を踢んで香騎入り、
曲江碾草鈿車行。　曲江草を碾つて鈿車行く。
誰家綠酒歡連夜。　誰が家の綠酒か歡夜を連ね、
何處紅樓睡失明。　何の處の紅樓が睡明を失ふ。
獨有不眠不醉客。　獨眠らず醉はざるの客有り、
經春冷坐古溫城。　春を經て冷坐す古溫城。

【字解】【二】兩京　洛陽・長安。
【三】金谷　地名。洛陽の西に在り、昔石崇が別莊を置いた處である。
【三】曲江　長安の池の名。鈿車は金華を以て飾りし車。
【四】失明　夜の明けるまで眠ること。
【五】冷坐　淋しく坐する。古溫城は江州なり。

【詩意】春が來て我が故郷を思ふ情をそそり、あたりの景色を見ては遙に兩京を憶ひ出す。金谷には騎を連ねて花觀の人が出盛り、曲江には草を碾つて車を走らせる者が多いであらう。絲酒を酌んで長夜の宴を張る處もあれば、紅樓に曉を忘れて睡る者もあるであらう。我は眠らず醉はず、つくねんと

して花の春を江州に冷坐してゐる。

春去　春去る

一從二澤畔一爲二遷客一。　一たび澤畔に遷客と爲りし從り、
兩度江頭送二暮春一。　兩度江頭に暮春を送る。
白髮更添今日鬢、　白髮更に添ふ今日の鬢、
(一)青衫不レ改去年身。　青衫改めず去年の身。
百川未レ有二回流水一。　百川未だ回流の水有らず、
一老終無二(二)却少人一。　一老終に却少の人無し。
(三)四十六時三月盡、　四十六の時三月盡、
送レ春爭得(四)不二殷勤一。　春を送る爭か殷勤ならざるを得ん。

【詩意】一たび江州に貶せられてから最早二度春を送つた。白髮はいや增しに殖えて今日のやうになつたが、身は去年のままで今以て青衫を纏つてゐる。如何なる川でも逆に元へ戻ることはないと同じく、一たび老いるともう若返ることは出來ない。今日は四十六の春の盡る日だと思ふと、春を送る心が自ら殷勤ならざるを得ない。

【字解】【一】青衫　司馬の服。樂天は時に江州司馬に貶せられてゐた。
【二】却少　かへつて若くなる。
【三】四十六　樂天時に年四十六歲。
三月盡は三月三十日、春の盡くる日。
【四】殷勤　ねんごろなること。

夢微之　十二年八月二十日夜。　微之を夢む　十二年八月二十日の夜

晨起臨レ風一惆悵。　晨起き風に臨んで一たび惆悵す、
(一)通川湓水斷二相聞一。　通川湓水相聞を斷つ。
不レ知憶レ我因二何事一。　知らず我を憶ふ何事にか因る、
昨夜三更夢見レ君。　昨夜三更夢に君を見る。

【題義】元稹を夢に見た事を述べた詩である。
【詩意】朝起きて風に對し君を憶ひて心を痛ましめた。君は通州に居り我は江州に居て、互に音信不通であるから。君も亦我を憶つてゐると見えて、昨夜三更に君を夢に見た。

【字解】【一】通川　通州なり。時に元稹は通州司馬に貶せられてゐた。湓水は江州なり。樂天の居る處。相聞は音信。

贈二韋鍊師一　韋鍊師に贈る

(一)潯陽遷客爲二居士一。　潯陽の遷客居士と爲り、
身似二浮雲一心似レ灰。　身は浮雲に似て心は灰に似たり。

【字解】【一】潯陽遷客　江州に貶せられてゐる人、樂天自ら謂ふ。居士は佛を奉ずる人。

(二)上界女仙無二嗜欲一。上界の女仙は嗜欲無し、
何因相顧兩徘徊。何に因つてか相顧みて兩び徘徊する。
共疑過去人間世。共に疑ふ過去人間の世、
曾作二誰家夫婦一來。曾て誰が家の夫婦と作りて來る。

【題義】錬師とは道士の德高く思精なる者をいふ。此詩は錬師韋氏に贈つたのである。

【詩意】潯陽の遷客たる我は今佛に事へて居士となり、身は浮雲の如く心は灰の如くで俗念は少しもない。また天界の女仙たる君は何等の嗜慾を持たないであらうが、何用事があつて二度まで我を尋ねて來たのであらう。因つて相共に疑つた。もと前世に娑婆にゐた頃は何處かの夫婦でもあつたのであらうかと。

【字解】【二】上界　天界なり。女仙は女道士なり。

問二劉十九一

劉十九に問ふ

(一)綠蟻新醅酒。(二)紅泥小火爐。
晚來天欲レ雪。能飲一杯一無。
晩來天雪ふらんと欲す、能く一杯を飲むや無や。

【字解】【一】綠蟻　濁酒。新醅は新に醸した酒。杜甫の詩に樽酒家貧只舊醅とある。【二】紅泥　小さき火の塊をいふ。

【題義】劉十九に問ふ詩である。

【詩意】新に醸した濁酒と、螢の火ほどの火爐とがある。夕方から雪でも降りさうな空合になつて來た。倶に一杯やらうではないか。

得二行簡書一聞レ欲レ下レ峽。先以レ此寄

行簡の書を得、峽を下らんと欲するを聞き、先づ此を以て寄す

朝來又得二東川信一。朝來又東川の信を得たり、
欲レ取二春初一發二梓州一。春初を取つて梓州を發せんと欲すと。
書報二九江一聞甄喜。書九江に報じて聞いて甄く喜ぶ、
路經二三峽一想還愁。路三峽を經て想うて還た愁ふ。
瀟湘瘴霧加二餐飯一。瀟湘の瘴霧餐飯を加へ、
灩澦驚波穩泊レ舟。灩澦の驚波穩に舟を泊せよ。
欲レ寄二兩行一迎レ爾淚。兩行爾を迎ふる淚を寄せんと欲するも、
長江不二肯向一レ西流一。長江肯て西に向つて流れず。

【字解】【一】東川　蜀に在り。行簡の居る處。
【二】梓州　今の四川省三台縣治。
【三】九江　江州。樂天の居る處。
【四】三峽　梓州から江州に下る間の長江の難處。
【五】瀟湘　二水の名。梓州から江州に下る途中に在る。加二餐飯一は攝生すること。
【六】灩澦　四川省奉節縣の西南、瞿唐峽口に在る巖石。

【題義】弟行簡の書信を受取り、峽を下つて江州に來ようと欲する由を知り、先づ此詩を寄せたのである。

ある。

【詩意】今朝東川からの手紙を受取り、春初に乗じて梓州を舟出しようとしてゐる由を知つた。此報告を見て暫く喜んだが、三峽の險路を經る事を思つて又愁へた。瀟湘の附近は惡氣が深いから攝生に注意せられよ。灩澦堆のあたりは波が荒いから穩に舟を泊するがよい。先づ汝を迎ふる嬉し涙を寄せようと思ふが、生憎長江は西に向つて流れないので、寄せることが出來ない。

南湖早春

風廻雲斷雨初晴。
返照湖邊暖復明。
亂點碎紅山杏發。
平鋪新綠水蘋生。
翅低白鴈飛仍重。
舌澁黃鸝語未成。
不道江南春不好。
年年衰病減心情。

南湖の早春

風廻り雲斷えて雨初めて晴れ、
返照湖邊暖復た明。
碎紅を亂點して山杏發き、
新綠を平鋪して水蘋生ず。
翅低れて白鴈飛ぶ仍重く、
舌澁りて黃鸝語未だ成らず。
道はず江南春好からずと、
年年衰病して心情を減ず。

【字解】【一】返照　夕日のてりかへし。
【二】碎紅　細かな紅色。
【三】平鋪　平に敷く。水蘋は浮草。
【四】黃鸝　うぐひす。

【題義】南湖の邊の早春の情景を述べた詩である。
【詩意】風向が變り雲も散り雨も晴れて、夕日が湖邊に照り返して暖く且明い。山杏の花があちこちに細かな紅色を亂點し、水上には綠の浮草が平に敷いてゐる。白雁は飛ばんとして翅猶重く、鶯の舌もまだ澁つて滑でない。江南の春色は此の如く結構だけれども、年年老衰する身は心情が折けて春を賞する氣にもならない。

元十八從事南海欲出廬山臨別舊居有戀泉聲之什因以投和兼伸別情

元十八南海に從事たり、廬山を出でんと欲し、舊居に別るるに臨み、泉聲を戀ふの什あり、因つて以て投和し、兼ねて別情を伸ぶ

賢侯辟士禮從容。
莫戀泉聲問所從。
雨露初承黃紙詔。
煙霞欲別紫霄峰。
傷弓未息新驚鳥。

賢侯士を辟して禮從容、
泉聲を戀うて從ふ所を問ふ莫れ。
雨露初めて承く黃紙の詔、
煙霞別れんと欲す紫霄の峰。
弓に傷いて未だ息まず新驚の鳥、

【字解】【一】黃紙詔　唐の時詔は黃麻紙に書する習なり。
【二】紫霄峰　廬山を指して言ふ。

得レ水難レ留久臥龍。　水を得て留め難し久臥の龍。
我正退藏君變化。　我は正に退き藏れ君は變化す、
一杯可レ易得二相逢一。　一杯相逢ふことを得易かるべけんや。

【題義】元十八が南海の從事（節度使などの屬官）になることになつて廬山を出づるに方り、舊宅に別るるを悲んで泉聲を戀ふる詩を作つた。因つて其作に和し、衰ねて別を惜む意を述べた詩である。

【詩意】賢俟が禮を厚うして賢士を招聘し、君が其選に當つたのであるから、泉聲などを戀うて躊躇してゐるべき場合ではない。新に君主の恩詔を承けたからには、景色のよい此山にも別れるがよい。僕は弓で傷を負うて其驚きがまだ息まない。（貶謫に遇うて心の尙愁ふること。）君は水を得た龍と同じで最早池中に留るべきではない。僕は益〻落ちぶれ君は益〻發展するであらう。せめては愉快に離杯を酌んで別れよう。一たび別れては復逢ふことも期し難いから。

題韋家泉池

韋家の泉池に題す

泉落二青山一出二白雲一。　泉青山より落ちて白雲を出づ、
縈レ村遶レ郭幾家分。　村を縈り郭を遶つて幾家にか分る。
自從引作二池中水一。　引いて池中の水と作ししより、
深淺方圓一任レ君。　深淺方圓一に君に任す。

【題義】韋氏の泉池に題した詩である。

【詩意】泉が青山から落ちて白雲の間を出で、村を縈り郭を遶つて幾多の人家に分流し、その一が引かれて韋家の池水となつてゐるが、深淺方圓一に主人の思ふ儘になつてゐる。

醉中對紅葉

醉中紅葉に對す

臨レ風杪秋樹。對レ酒長年人。　風に臨む杪秋の樹、酒に對す長年の人。
醉貌如二霜葉一。雖レ紅不二是春一。　醉貌霜葉の如し、紅なりと雖も是れ春ならず。

【字解】【一】杪秋　秋の末。【二】長年　老年。

【題義】醉うて紅葉に對し感想を述べた詩である。

【詩意】秋の末の樹が風に臨み、老年の人（樂天自ら謂ふ）が酒に對してゐる。その醉うた顏色は霜葉の如く紅だけれども、人生の春でないのが殘念である。

遣懷

懷を遣る

羲和走レ馭趁二年光一。　羲和馭を走らして年光を趁ふ、

【字解】【一】羲和　日輪の御者。

不許人間日月長。（二）　許さず人間日月の長きを。
遂使四時都似電。（三）　遂に四時をして都で電に似しむ、
爭教兩鬢不成霜。　爭か兩鬢をして霜と成らざらしめんや。
榮銷枯去無非命。　榮銷し枯去る命に非るなし、
壯盡衰來亦是常。　壯盡き衰來るも亦是れ常なり。
已共身心要約定。（四）　已に身心と共に要約定まる、
窮通生死不驚忙。（五）　窮通生死驚忙せずと。

【題義】胸中の懷を霽す意。

【詩意】歲月はどんどんと移り進んで暫くも留らない。四季の去るのは電より速く、兩鬢の毛は忽ち白くなつてしまふ。榮枯盛衰は皆天命の常理で、今更怪むには足らない。因つて吾は身心と約束した。窮通生死に逢ふとも驚きさわぐやうな事は決してしまいと。

【二】人間　世間。
【三】四時　春夏秋冬。
【四】要約　約束。
【五】驚忙　驚きさわぐ。

點額魚

龍門點額意何如。　龍門額を點ず意何如、

【字解】【一】紅尾　魚は疲れると尾が赤くなるといふ。青鬐は青い

紅尾青鬐却返初。　紅尾青鬐却返の初。
見說在天行雨苦。　見說く天に在りて雨を行るの苦、
爲龍未必勝爲魚。　龍と爲るは未だ必ずしも魚と爲るに勝らず。

【題義】龍門は黃河の上流で、魚が此を過ぎて上れば化して龍となるが、凡魚此に到れば額を石に打ちつけて傷き、むざむざ引返るといふ。此詩は凡魚の龍になれずに引返ることを述べたもので、顯榮の地位に進んで苦むよりは、寧ろ下位にゐて優游してゐる方がよいといふ意を寓したのである。

【詩意】龍門に上つて額を石に打ちあて、むざむざと尾鰭を垂れて返る時の心持は如何であらう。聞けば龍になれば天に升つて雨を降らせる苦があるさうだ。そんな苦をするよりは永く魚となつて自由に游ぎまはつてゐる方が或は却つてましかも知れない。

聞龜兒詠詩

龜兒の詩を詠ずるを聞く

憐渠已解詠詩章。　憐む渠が已に解く詩章を詠ずるを、
搖膝支頤學二郎。（一）　膝を搖り頤を支へて二郎を學ぶ。
莫學二郎吟太苦。　學ぶ莫れ二郎が吟太だ苦しきを、

【字解】【一】二郎　樂天自ら謂ふ。排行が二十二だからであらう。

纔年四十鬢如霜。纔に年四十にして鬢霜の如し。

【題義】龜兒は行簡の子で樂天の姪である。幼より樂天の許に育てられた。此詩は龜兒が詩を吟詠するのを聞いて作つたのである。

【詩意】愛すべきかな、彼龜兒は早詩を吟ずることが出來るやうになつた。膝を搖り頤を支へて我が身振をまねてゐる。併し我の作詩の苦はまねないがよい。四十になるやならずで鬢の毛が眞白になつてしまつた。

對酒　酒に對す

未濟卦中休卜命。未濟卦中命を卜ふを休む、
參同契裏莫勞心。參同契裏心を勞する莫れ。
無如飲此銷愁物。此銷愁物を飲むに如くはなし、
一餉愁消直萬金。一餉愁消えて直萬金。

【字解】【一】未濟卦　易の卦の名。【二】參同契　仙藥を錬る法を說いた書の名。【三】銷愁物　酒をいふ。【四】一餉　一飮に同じ。

【題義】酒の功德を述べた詩である。

【詩意】易を立てて吾が身の運命を卜ふにも及ばず、參同契をひねくつて仙道を學ぶにも及ばない。何と謂つても此の憂を掃ふ玉箒が一番だ。一飮すれば忽ち愁が消える。實に値萬金の妙藥だ。

東牆夜合樹。去秋爲風雨所摧。今年花時。悵然有感

東牆の夜合樹、去秋風雨の摧く所となる、今年花時、悵然として感あり

碧荑紅縷今何在。碧荑紅縷今何に在りや、
風雨飄將去不回。風雨飄將し去つて回らず。
惆悵去年牆下地。惆悵す去年牆下の地、
今春唯有薺花開。今春唯薺花の開くあり。

【字解】【一】夜合樹　ねむのき。合歡ともいふ。其葉暮に至れば相合ふを以てなり。小紅花を開く。【二】碧荑紅縷　ねむのきの花を形容したのである。【三】飄將　飄して持ち行く。【四】薺花　なづなの花。

【題義】東の牆の側に在つた夜合樹が去年の秋に風雨の爲に折られたので、今年の花の咲く時節になり、悲んで此詩を作つたといふのである。

【詩意】碧の荑のやうな紅の絲筋のやうな夜合樹の花は去年の風雨に吹き去られてしまつた。悲しいかな、去年まで彼木の在つた牆の下には、淋しく薺の花が咲いてゐるばかりだ。

病起　病起

病不出門無限時。病みて門を出でず無限の時、

【字解】【一】無限時　久しい間。

今朝強出與誰期。　今朝強ひて出でて誰と與にか期せん。
經年不上江樓醉。　年を經て江樓に上つて醉はず、
勞動春風颺酒旗。　勞動す春風酒旗を颺ぐるを。

【題義】病後始めて起床し門外を散歩した時の詩である。

【詩意】病に臥して久しく門を出なかつたが、今朝は少康を得たので辛抱して出て見たが、さて誰を訪はうといふあてもない。最早一年あまりも江樓の上で酒を飲むことをしなかつたので、春風が酒屋の軒燈に立つ旗を飜してゐるのを見ると感謝の心が湧く。

【字解】【一】勞動　御苦勞であるといふ意。感謝の辭。

夢亡友劉太白同遊彰敬寺

亡友劉太白が同じく彰敬寺に遊びしことを夢む

三千里外臥江州。　三千里外江州に臥す、
十五年前哭老劉。　十五年前老劉を哭す。
昨夜夢中彰敬寺。　昨夜夢中彰敬寺、
死生魂魄暫同遊。　死生魂魄暫く同遊す。

【題義】亡友劉太白が樂天と倶に彰敬寺に遊んだことを夢みて作つた詩である。

【詩意】今自分は長安を距ること三千里外の江州に病臥し、彼の劉太白とは十五年も前に死別したのである。然るに昨夜は死者たる彼と生者たる我とが暫く彰敬寺に同遊した夢を見た。

【字解】【一】彰敬寺　長安にある寺。

與果上人歿時。題此訣別。兼簡二林僧社

與果上人の歿する時、此を題して訣別し、兼ねて二林の僧社に簡す

本結菩提香火社。　本菩提香火の社を結ぶは、
爲嫌煩惱電泡身。　煩惱電泡の身を嫌ふが爲なり。
不須惆悵從師去。　須ひず惆悵して師に從つて去るを、
先請西方作主人。　先づ請ふ西方に主人と作らんことを。

【題義】與果上人の死する時、此詩を題して別を告げ、兼ねて東林・西林二寺の僧侶に呈したといふ意。

【詩意】もと佛道を修行する結社を結んだのは、煩惱電泡の果敢なき身を嫌ふ爲である。されば上人が死んだからとて悲んで其後を追ふ必要はない。先づ西方極樂淨土に行つて其主人とならんことを請

【字解】【一】二林　東林寺と西林寺。並に廬山に在り。僧社は僧侶の仲間。【二】菩提　佛語、正覺といふが如し。香火社は契合する團體。結社。【三】煩惱　心のなやみ。電泡身は電光の如く水泡の如き果敢なき身。【四】西方　極樂淨土。

ふがよい。

贈寫眞者

子騁丹青日。予當醜老時。
無勞役神思。更畫病容儀。
迢遞麒麟閣。圖功未有期。
區區尺素上。焉用寫眞爲。

【字解】【一】丹青　畫なり。【二】容儀　容貌。【三】迢遞　遙なる貌。麒麟閣は漢の宣帝が功臣十一人の肖像を畫かしめた閣の名。【四】區區　微少の貌。尺素は、ゑぎぬ。

【題義】肖像畫を畫く者に贈つた詩である。

【詩意】吾が醜老なる姿を丹青の技を揮ひ苦心して畫かうとするな。麒麟閣に功臣を畫く時はいつの事やら豫期することは出來ないが、其時こそ苦心して書いてもらふ必要もあるけれども、こんな區區たる繪絹の上などには、骨折つて眞を寫してもらはなくとも宜しい。

劉十九同宿　時淮寇初破。劉十九同じく宿す。時に淮寇初めて破る

紅旗破賊非吾事。
黃紙除書無我名。
唯共嵩陽劉處士。
圍棊賭酒到天明。

【題義】劉處士が樂天の家に宿した事を述べた詩である。

【詩意】紅旗を飜して賊軍を破るは吾が事に非ず、黃紙の除書我が名なし。唯嵩陽の劉處士と共に、棊を圍み酒を賭けて天明に到る。

【字解】【一】黃紙　黃麻紙。詔勅書するに用ふる紙。除書は官吏の敍任を記せるもの。

紅旗賊を破るは吾が事に非ず、黃紙の除書我が名なし。唯嵩陽の劉處士と共に、棊を圍み酒を賭けて天明に到る。

淮西の叛軍が初めて鎭定された。時に淮西の叛軍が初めて鎭定された。隨つて敍任の詔書にも我が名などは記載してない。我は唯嵩陽の劉處士と棊を圍み酒を賭けて一夜を明かした。誠に言ひ甲斐もない生活である。

十二年冬。江西溫暖。喜元八寄金石稜一作凌到。因題此詩

十二年冬、江西溫暖、元八が金石稜を寄せて到るを喜び、因つて此詩を題す

今冬臘候不嚴凝。
暖霧溫風氣上騰。
山脚崦中纔有雪。
江流慢處亦無氷。

【字解】【一】臘候　十二月の氣候。【二】崦中　崦は凹處。

欲ㇾ將ニ何藥一防ニ春瘴一。何の藥を將て春瘴を防がんと欲する、
只有元家金石稜。只有り元家の金石稜。

【題義】元和十二年の冬は江州地方が非常に暖であつた。適〻元八から金石稜といふ藥を贈られて、それが屆いたので、此詩を作つたのである。

【詩意】今年の冬は暖で溫氣が立ち騰り、山中の凹處に纔に雪があるくらゐのもので、江流の慢い處すら氷らない。何の藥を以て此春瘴を防ぐかとならば、元八から贈られた金石稜を以てしようと思ふ。

閒意

不ㇾ爭ニ榮耀一任ニ沈淪一。榮耀を爭はず沈淪に任せ、
日與ㇾ時疎共ㇾ道親。日に時と疎にして道と共に親む。
北省朋僚音信斷、北省の朋僚は音信斷え、
東林長老往還頻。東林の長老は往還頻なり。
病停ニ夜食一閒如ㇾ社。病みて夜食を停めて、閒、社の如く、
慵擁ニ朝裘一煖似ㇾ春。慵くして朝裘を擁して煖春に似たり。
漸老漸諳ニ閒氣味一。漸く老いて漸く閒氣味を諳んず、
終身不ㇾ擬作ニ忙人一。終身擬せず忙人と作るを。

【題義】閒適の意を敍した詩である。

【詩意】我が身の榮華を競はず、落ちぶれるがままに任せ、日增に時流を遠ざかつて修道に勉めてゐる。昔の同僚からは全く音信が斷えたが、東林寺の老僧達とは足繁く往來してゐる。病の爲に夜食を禁じて閑靜なること僧社と同じく、體がだるくて朝裘を抱けば春のやうに暖である。段段年を取るに隨つて閒適の趣味がわかつて來た。生涯忙人にはなりたくないと思つてゐる。

送ニ友人上ㇾ峽赴ニ東川辟命一

見說瞿塘峽。斜銜灩澦根。
難於尋ニ鳥道一。險過ㇾ上ニ龍門一。
羊角風頭急。桃花水色渾。
山廻若ニ鼇轉一。舟入似ニ鯨吞一。

見說らく瞿塘峽、斜に灩澦の根を銜むと。
鳥道を尋ぬるよりも難く、險は龍門に上るに過ぐ。
羊角風頭急に、桃花水色渾る。
山廻りて鼇の轉ずるが若く、舟入りて鯨の呑むに似たり。

【字解】【一】北省　翰林院をいふ。銀臺の北に在るを以てない。【二】東林　廬山の東林寺。【三】社　僧社、僧侶の仲間。佛家では朝と晝の食を齋といひ、午後の食を非時といふ。三食の外夜食などはしない。それも修業の一であるからである。老學庵筆記に「佛經比丘の非時食を戒む。蓋し其法午を過ぐれば則ち食はざるなり。西蜀の僧、客を招きて暮食する、之を非時といふ」とある。【四】閒氣味　閒適の趣味。【五】不ㇾ擬　欲せずの意。

岸合愁二天斷一。波跳恐二地翻一。岸合して天の斷ゆるを愁へ、波跳りて地の翻るを恐る。
憐君經レ此去。爲レ感二主人恩一。憐む君が此を經て去るを、主人の恩に感ずるが爲なり。

【字解】【一】辟命　徵命といふが如し。召聘の命なり。【二】瞿塘峽　長江の難處。四川省奉節縣の東十三里に在り、三峽の首にして兩崖對峙し、中一江を貫き灩澦堆正に其口に當る。【三】龍門　黄河の上流に在り、其流急にして魚此を上れば化して龍となるといふ。【四】羊角　旋風なり。【五】桃花水　二三月の頃氷解け雨積み河水盛に漲る、之を桃花水といふ。【六】主人　東川節度使を指していふ。

【題義】友人が三峽の險を過ぎ、蜀の劍南東川節度府の召聘に應じて赴任するのを送る詩である。

【詩意】聞く所に據れば瞿塘峽は斜に灩澦堆を銜み、そこを船で通るのは鳥道を通るよりも危く、龍門に上るよりも險で、おまけに旋風が吹き荒み春の水が漲り、山は鼇の回轉するが如く、船は鯨に呑まれる如くに吸込まれ、天斷え地翻るかと疑はれるといふ話だ。君がそんな危險を冒して往くのは誠に同情に堪へないが、それも主人の恩に感激した爲だとあれば、亦已むを得ない。

夜送二孟司功一

潯陽白司馬。夜送二孟功曹一。潯陽の白司馬、夜孟功曹を送る。
江闇管絃急。樓明燈火高。江闇うして管絃急なり、樓明かにして燈火高し。
湖波翻似レ箭。霜草殺如レ刀。湖波翻つて箭に似たり、霜草殺れて刀の如し。
且莫二開征棹一。陰風正怒號。且く征棹を開く莫れ、陰風正に怒號す。

【字解】【一】孟司功　孟は姓、司功は官名、州府の佐吏に司功・司倉・司戸・司兵・司法・司士の六參軍あり。府に在るを曹となし、州に在るを司となす。故に府に功曹參軍といひ、州に司功參軍といふ。【二】潯陽　江州なり。

【題義】夜孟司功の船出を送る詩である。

【詩意】江州司馬たる白居易が、夜孟功曹の船出を送る爲に聊か送別の宴を催した。江上は暗いけれども樓上は燈明かに管絃の聲が湧くやうに盛である。湖水の浪は箭の如く急で、霜枯の草は刀の如く鋭い。まア暫く船出を見合はせるがよろしい。陰風が今正に吹き叫んでゐるから。

衰病

老辭二遊冶一尋二花伴一。老いては遊冶の花を尋ぬる伴を辭し、
病別二荒狂舊酒徒一。病みては荒狂の舊酒徒に別る。
更恐五年三歲後。更に恐る五年三歲の後、
些些談笑亦應レ無。些些たる談笑も亦應に無かるべきを。

【字解】【一】遊冶　聲色を以て樂とすること。【二】舊酒徒　もとの飲仲間。

【題義】身心の衰病を悲嘆した詩である。

【詩意】老いては遊び相手の遊冶郎を辭し、病んでは昔荒れ狂つた飲仲間を離れてしまつた。此分で

は三五年の後には些些たる物話をする仲間もなくなつてしまふであらうと思ふと、實に心細い。

題詩屏風絕句　幷序　詩屏風に題する絕句　幷に序

十二年冬。(一)微之猶滯通州。予亦未離(二)湓上。相去萬里。不見三年。鬱鬱相念。多以吟咏自解。前後辱微之寄示之什。(四)殆數百篇。雖藏篋中。永以爲好。不若置之座右。如見所思。(五)繇是掇律句中短小麗絕者。凡一百首。題錄合爲一屏風。擧目會心。(六)參若其人在於前矣。前輩作事。多出偶然。則安知此屏不爲好事者所傳。(七)異日作(八)九江一故事爾。因題絕句。聊以奬之。

【訓讀】十二年冬、微之猶通州に滯る。予も亦未だ湓上を離れず。相去ること萬里、見ざること三年。鬱鬱として相念ひ、多く吟咏を以て自ら解く。前後微之の寄示を辱うするの什、殆ど數百篇。篋中に藏し永く以て好となすと雖も、之を座右に置き思ふ所を見るが如くするに若かず。是に繇りて律句中の短小麗絕なる者凡て一百首を掇ひ、題錄して合せて一屏風となさんとす。目を擧ぐれば心に會し、參じて其人前に在るが若くならん。前輩事を作す、多くは偶然に出づ。則ち安んぞ此屏、事を好む者の傳ふる所となり、異日九江の一故事と作らざるを知らんや。因つて絕句を題し、聊か以て之を奬む。

【字解】【一】十二年　元和十二年。【二】微之　元稹、字は微之。時に通州司馬たり。【三】湓上　湓水のほとり。即ち江州【四】什　詩篇。【五】所思　心に思ふ所の友。【六】參　進謁なり。【七】異日　後日。【八】九江　江州なり。

相憶采君詩作障。(一)相憶うて君が詩を采りて障を作る、
自書自勘不辭勞。自ら書し自ら勘へて勞を辭せず。
障成定被人爭寫。障成り定めて人に爭ひ寫され、
從此南中紙價高。(二)此より南中紙價高からん。

【字解】【一】障　屏風。【二】南中　南方一帶。

【題義】元稹から寄せられた詩を書いて貼り、一の屏風を作り、それに題した詩である。

【詩意】君の詩を採つて屏風を作らうと思ひ、自ら選出し自ら書して少しも其勞を厭はない。この屏風が出來たらば定めて人が爭ひ寫して、此から南方一帶にかけて、忽ち紙の相場が狂ふであらう。

答微之　微之於閬州西寺、手題予詩、予又以微之百篇題此屏上、各以絕句報答。

微之に答ふ　微之閬州の西寺に於て手づから予が詩を題す、予又微之の百篇を以て此屏上に題す、各絕句を以て報答す

君寫我詩盈寺壁。君は我詩を寫して寺壁に盈て、
我題君句滿屏風。我は君が句を題して屏風に滿つ。

與レ君相遇知(一)何處。　君と相遇ふこと知んぬ何の處ぞ、
兩葉浮萍(二)大海中。　兩葉の浮萍大海の中。

【題義】元稹が閬州（四川省閬中縣）の西寺に樂天の詩を題したことを絶句を以て告げて來たのに對して、樂天は前の題二詩扉風一絶句の序にある如く、稹の詩百篇を扉風に題したことを答へた詩である。

【詩意】君は我が詩を寺の壁一面に題したさうだが、我は亦君の句を扉風に題した。そんなことでもして離隔の情を慰めてゐる外はない。まるで大海の中に漂つてゐる二枚の浮草のやうな我我は、一體いつになつたら相遇ふことが出來るであらうか。

【字解】【一】知　知らずといふ意。【二】兩葉浮萍　二枚のうきくさ。樂天と微之とに喩ふ。

偶宴有レ懷

遇レ興尋(一)文客。因レ歡命(二)酒徒。　興に遇うて文客を尋ね、歡に因つて酒徒を命ず。
春遊憶(三)親故。夜會似(四)京都。　春遊親故を憶ふ、夜會京都に似たり。
詩思閒仍在。鄉愁醉暫無。　詩思閒にして仍ほ在り、鄉愁醉うて暫く無し。
狂來欲起舞。慙見(五)白髭鬚。　狂し來つて起ちて舞はんと欲し、慙らくは白髭鬚を見るを。

【字解】【一】文客　詞客といふが如し。【二】酒徒　飲仲間。【三】親故　舊友。【四】白髭鬚　白いひげ。

【題義】偶然人と會宴して懷ふ所を述べた詩である。

【詩意】歡興に乘じて詞客を訪ひ酒徒を狩り集めて宴を開いた。春の日ののびのびとした時行遊を戀にすれば昔の友を憶ひ出すが、此の如く夜會宴すれば矢張都に居るやうな氣がする。閒暇の時は詩思が湧き、醉へば暫く鄉愁を忘れる。遂に熱狂し來りて起つて舞はんとすれども、白髭の手前も氣慙づかしくて差控へた。

山中酬二江州崔使君見一レ寄(一)

山中にて江州の崔使君が寄せられしに酬ゆ

眷眄情無レ限(二)。優容禮有レ餘。　眷眄情限無し、優容禮餘有り。
三年爲二郡吏一。一半許二山居一。　三年郡吏と爲り、一半山居を許さる。
酒熟心相待。詩來手自書。　酒熟して心に相待つ、詩來つて手自ら書す。
庾(四)樓春好醉。明日且回レ車。　庾樓春醉ふに好し、明日且らく車を回さん。

【字解】【一】崔使君　崔は姓。使君は刺史の稱。【二】眷眄　眷顧といふが如し。【三】優容　優待する。【四】庾樓　晉の庾亮が江州を鎭せし時建てし所の樓。

【題義】樂天が廬山の草堂にゐた時に、江州刺史崔氏が詩を寄せたので、それに酬いたのである。

【詩意】使君は無限の深情を以て我を眷顧せられ、禮を厚うして我を優待せられる。吾は既に三年江

州の郡吏となつてゐるが、その半は廬山に閑居することを許されてゐる。酒が熟したと謂つては心待ちに待ち、自筆の詩まで寄せられる。實に感謝に堪へない。もはや春で庾樓の上で酒を飲むに適當な時節になつたから、御招請に應じて明日は江州に歸りませう。

(一)山枇杷　　山枇杷

深山老去惜(二)年華。　深山に老い去つて年華を惜む、
況對(三)東溪野枇杷。　況んや東溪の野枇杷に對するをや。
火樹風來翻絳(四)燄。　火樹風來りて絳燄を翻し、
瓊枝日出曬紅紗。　瓊枝日出でて紅紗を曬す。
囘(三)看桃李都無色。　囘看するに都て色なし、
映得芙蓉(五)不是花。　映じ得て芙蓉不是れ花。
爭奈結根深石底。　爭奈せん根を深石の底に結び、
無因移得到人家。　移し得て人家に到るに因なし。

【題義】山枇杷の花の盛に開いた所を詠じた詩である。

【字解】【一】山枇杷　野生の枇杷花。柳亭詩話に「元稹の詩に萬里橋邊女校書。琵琶花下閉門居とあるは薛濤を謂ふなり。駱谷に琵琶花あり、杜鵑と相似たり。後人知らず改めて枇杷となす」とあり。山枇杷は卽ち此物ならん。【二】年華　歲月といふが如し。【三】火樹　紅花の一面に咲いた木。【四】絳燄は紅の焰。【四】瓊枝　玉の枝。【五】芙蓉　蓮花。

【詩意】自分は深山の中に老い行きて光陰を惜むの情に堪へない。況んや東溪の山枇杷の花に對すると一入その感を深うする。火のやうに紅花の咲き滿ちた樹に風が吹いて來ると紅の燄が翻り、玉の如き枝に日があたると紅の紗を曬したやうである。桃や李は全くけおされて色なく、芙蓉などは花とは謂はれないくらゐだ。ただ惜むらくは深い石の底に根を張つてゐるから、人家の庭前に移し植ゑることは出來ない。

聞李尙書拜相。因以長句寄賀微之

李尙書が相に拜せらると聞き、因つて長句を以て微之に寄せ賀す

憐君不(一)久在(一)通川。　君を憐んで久しく通川に在らしめじ、
知己新提(二)造化權。　己を知つて新に造化の權を提げん。
夔(二)卨定求(二)才濟(レ)世。　夔卨定めて才の世を濟ふを求めん、
張(四)雷應辨(二)氣衝(レ)天。　張雷應に氣の天を衝くを辨ずべし。
那知淪(二)落天涯(一)日。　那ぞ知らん天涯に淪落する日、
正是陶(五)鈞海內(一)年。　正に是れ海內を陶鈞する年ならんとは。
肯向(二)泥中(一)拋(二)折劍(一)。　肯て泥中に向つて折劍を拋たば、

【字解】【一】通川　通州なり。元稹は通州司馬に貶せられてゐた。【二】造化權　天地化育の力。【三】夔卨　夔は舜に仕へて典樂の官となる。卨は契なり。堯に仕へて司徒となる。李尙書に喩ふ。【四】張雷　張は張華。雷は雷煥。竝に晉の人。武帝の時斗牛の間に紫氣あり、張華煥に問ふ。煥豐城に寶劍あるを知る。張華乃ち煥を豐城の令に補す。獄を

不收重鑄作龍泉。收めて重ね鑄て龍泉と作さざらんや。

送りて華に與へ、太阿は自ら佩ぶ。李尚書に喩ふ。【五】陶鈞　宰相となりて世を治むること。

【題義】李尚書（李逢吉であらう。元和十一年に宰相になつた）が宰相に任せられた事を聞き、此詩を作つて通州にゐる元稹に寄せ、賀意を述べたのである。

【詩意】李尚書が宰相に任せられたからには、君を憐んで長く通州司馬にして置きはしまい。又我を も認めて必ず天地再造の恩を施してくれるであらう。必ずや夔や契が濟世の士を求め、張華や雷煥が 紫氣を見て寶劍を知つたやうに、我我を拔擢してくれるであらう。お互が天涯に淪落してゐる間に、 かの李尚書が宰相とならうとは實に意外の幸福である。泥の中にこの折れた劍（貶謫せられてゐる身 に喩ふ）を投げ出して見せれば、必ず收め取つて之を鑄直し、龍泉の如き寶劍にしてくれるに相違ない。

歲暮　歲暮

窮陰急景坐相催。（一）窮陰急景坐ろに相催し、
壯齒韶顏去不回。（二）壯齒韶顏去つて回らず。
舊病重因年老發。舊病重ねて年の老いたるに因つて發し、
新愁多是夜長來。新愁多くは是れ夜の長きより來る。

【字解】【一】急景　月日の立つのが早いこと。【二】壯齒　壯年。韶顏　はわかわかしき顏色。

【題義】歲暮の情を述べた詩である。

【詩意】月日の立つのが速く、壯年時代は忽ち去つてしまつた。以前の病氣は年を取つた爲に再發し、夜が長くて眠れないので新愁が增すばかりだ。思ふに膏が燒かれるのは、燈明になる材能を持つてゐる爲で、膏の烹て食はれてしまふのは美聲を持たないからである。して見れば材能のあるのがよいのか、ないのがよいのか、禍福の原因は殆ど理會が出來ない。だから酒でも飮んで深く物事に頓著しないのが結句よいのだ。

膏明自爇緣多事。膏明かにして自ら爇くは事多きに緣り、
膺默先烹爲不才。（一）膺默して先づ烹らるるは不才の爲なり。
禍福細尋無會處。（二）禍福細に尋ぬるに會する處なし、
不如且進手中杯。如かず且く手中の杯を進めんには。

【三】會處　心に理會する處。

雨中赴劉十九二林之期。及到寺劉已先去。因以四韻寄之

雨中劉十九が二林の期に赴く、寺に到るに及んで劉已に先づ去る、因つて四韻を以て之に寄す

雲中臺殿泥中路、
既阻二同遊一嬾却還。
將謂獨愁猶對レ雨。
不レ知多レ興已尋レ山。
纔應行到千峰裏。
只校來遲半日間。
最惜杜鵑花爛熳。
春風吹盡不二同攀一。

雲中の臺殿泥中の路、
既に同遊を阻てて嬾くして却つて還る。
將謂ふ獨り愁へて猶雨に對せんと、
知らず興多くして已に山を尋ぬるを。
纔に應に行いて千峰の裏に到るべし、
只校來ること遅し半日の間。
最も惜む杜鵑花爛熳、
春風吹き盡して同じく攀ぢざるを。

【題義】劉十九と東西二林寺に遊ばんとの約あり、雨を衝いて寺に到れば劉十九は既に歸りて在らず。因つて此詩を作つて寄せたるなり。

【詩意】泥途を厭はず雲中の臺殿に來て見れば、君は同遊の約を破つて我を待たずに還つてしまつた。吾は君が雨に對して獨り愁へつつあるならんと想ひしに、豈圖らんや君は興に乘じて既に山を尋ねて去つてしまつた。聞けば今しがた千峰の裏に往つたばかりだといふが、ただ半日吾の來方が遅かつたので同遊することが出來なかつたのは殘念であつた。特に最も惜むべきは今や杜鵑の花盛りであるが春風に乘じて倶に之を賞することが出來ないことである。

【字解】【一】二林　廬山に在る東林寺と西林寺。【二】四韻　八句の詩。即ち律詩。【三】杜鵑　さつき。爛熳は花の盛に開くこと。

薔薇正開。春酒初熟。因招二劉十九・張大夫・崔二
十四一同飲

薔薇正に開き、春酒初めて熟す、因つて劉十九・張大夫・崔二十四を招きて同じく飲む

甕頭竹葉經レ春熟。
階底薔薇入レ夏開。
似レ火淺深紅壓レ架。
如レ餳氣味綠粘レ臺。
試將二詩句一相招去。
倘有二風情一或可レ來。
明日早花應二更好一。
心期同醉二卯時杯一。

甕頭の竹葉春を經て熟し、
階底の薔薇夏に入りて開く。
火に似て淺深、紅、架を壓し、
餳の如き氣味、綠、臺に粘す。
試に詩句を將て相招去せば、
倘し風情あらば或は來るべし、
明日早花應に更に好かるべし。
心に期す同じく卯時の杯に醉はんことを。

【字解】【一】甕頭　かめの中。竹葉は酒なり。【二】卯時杯　あさざけ。卯時は卯の刻、即ち午前六時ごろ。

【題義】薔薇の花が滿開であり、春酒も出來たので、劉十九・張大夫・崔二十四の三友を招待して會宴しようとする意を述べた詩である。

【詩意】甕の中の酒は春を過ぎて正に出來上り、階前の薔薇は夏に入つて盛に開いてゐる。紅の花が薄く濃く架を壓して咲き滿ち、醞のやうに柔か味を帶びて綠の葉が臺に著いてゐる。詩を寄せて三友を招いたならば、風流の味を解する以上は必ず來遊するであらう。特に明朝の花は一層賞玩に値するであらうから。因つて余は君達が必ず來て、我と倶に朝酒を酌むだらうと獨り自ら心にきめてゐる。

李白墓

李白の墓

采石江邊李白墳。　采石江邊李白の墳、
繞田無限草連雲。　田を繞りて限無く草雲に連る。
可憐荒壟窮泉骨。　憐むべし荒壟窮泉の骨、
曾有驚天動地文。　曾て驚天動地の文あり。
但是詩人多薄命。　但是れ詩人多くは薄命、
就中淪落不過君。　就中淪落すること君に過ぎず。

【字解】【一】采石　今の安徽省當塗縣の西北二十里に牛渚山あり、その長江に突入する處を采石磯といふ。【二】荒壟　荒れた塚。窮泉は地下の黃泉。

【題義】李白の墓に感じて作つた詩である。

【詩意】采石江邊に李白の墓がある。あたり一面に草茫茫と茂つて雲に連つてゐる。今こそ荒れて塚の下の窮泉の骨に過ぎないが、昔は驚天動地の大文章を作つた大詩人である。ただ詩人はいつも同じく多くは不幸なものであるが、その中でも李白は最もひどく落ちぶれてゐたのは氣の毒である。

對酒

酒に對す

漫把參同契、難燒伏火砂。　漫に參同契を把り、伏火の砂を燒き難し。
有時成白首、無處問黃芽。　時ありて白首と成り、黃芽を問ふに處なし。
幻世如泡影、浮生抵眼花。　幻世は泡影の如く、浮生は眼花に抵る。
唯將綠醅酒、且替紫河車。　唯綠醅の酒を將て、且く紫河の車に替へん。

【字解】【一】參同契　仙藥を錬ることを說いた書の名。【二】白首　しらがあたま。【三】黃芽　道家、丹を燒くに鉛華を以て黃芽といふ。【四】眼花　眼前の花といふ意ならん。醉うて目のかすむにもいふ。【五】綠醅酒　綠酒。【六】紫河　蒙古の河の名。隋書煬帝紀に「大業三年丁男百餘萬を發して長城を築き、西は榆林に距り東は紫河に至る」とある。

【題義】酒に對して感慨を述べた詩である。

【詩意】妄に參同契を振舞はしても不老長生の仙藥を錬ることは出來ない。時が來れば白髮の老人と

なり、黄芽の錬り方を問はんとするも問ふ處もない。幻世は水の泡の如く、浮生は眼前の花の如く、忽ち消えて跡なきものである。されば紫河の車に駕して功名を計らんよりは、寧ろ綠酒に醉うて昏昏としてゐる方が遙にまさつてゐる。

戲答諸少年

戲に諸少年に答ふ

顧我長年頭似雪。
饒君壯歲氣如雲。
朱顏今日雖欺我。
白髮他時不放君。

我が長年にして頭雪に似たるを顧み、
君が壯歲にして氣雲の如くなるを饒す。
朱顏今日我を欺くと雖も、
白髮他時君を放さず。

【題義】戲に少年諸子に答へた詩である。

【詩意】我は諸君よりも年長者で頭髮が雪の如く白い。君等が少壯氣銳なるには到底かなはない。併し己の紅顏を誇つて、俺を馬鹿にしてはいけない。忽ち白髮が君等をも侵して見逃しては置かぬであらう。

【字解】【一】饒　讓る。劣る。
【二】朱顏　紅顏。若き顏色。欺は侮る意。

風雨晚泊

風雨晚泊

苦竹林邊蘆葦叢。
停舟一望思無窮。
青苔撲地連春雨。
白浪掀天盡日風。
忽忽百年行欲半。
茫茫萬事坐成空。
此生飄蕩何時定。
一縷鴻毛天地中。

苦竹林邊蘆葦の叢、
舟を停めて一望すれば思窮りなし。
青苔地に撲ちて連春雨ふり、
白浪天を掀げて盡日風ふく。
忽忽として百年行くゆく半ならんと欲し、
茫茫たる萬事坐して空と成る。
此生飄蕩何の時か定まらん、
一縷の鴻毛天地の中。

【字解】【一】苦竹　竹の一種。
【二】撲ヽ地　滿地なり。葛原詩話に見ゆ。
【三】盡日　終日。
【四】忽忽　歲月の去ること速なる貌。百年は人の一生をいふ。
【五】茫茫　廣き貌。
【六】飄蕩　流浪といふが如し。

【題義】雨風の夕に舟を泊した景況を述べた詩である。

【詩意】竹林の邊蘆葦の叢に舟を泊して一望すれば感慨無量である。見渡す限り青苔が生えて春雨がふりしきり、白浪が天を打つて終日風が吹いてゐる。歲月の去るのが早くて我も殆ど人生の半に達し、萬事は茫茫として總て空に歸した。いつになつたら天地の間に飄る鳥の毛のやうな流浪生活を免れて、身の安定が得られるであらうか。

題崔使君新樓

崔使君の新樓に題す

憂人何處可銷憂。
憂人(一)何の處か憂を銷すべき、

碧甃紅闌溢水頭。
碧甃(二)紅闌溢水の頭。

從此潯陽風月夜。
此より潯陽(三)風月の夜、

潯公樓替庾公樓。
潯公の樓庾公(四)の樓に替らん。

【題義】江州刺史崔氏(使君は刺史の稱)の新樓に題した詩である。

【詩意】何處が我が憂を銷するに適する處ぞと問ふ者あらば、溢水の畔に在る碧甃紅欄の崔公が新樓だと答へるであらう。今後は江州の風月を賞するには、崔公の新樓が庾公の樓に代るであらう。

【字解】【一】憂人　樂天自ら謂ふ。【二】碧甃　綠の敷瓦。紅闌は紅色に塗つた欄干。溢水は江州の川の名。【三】潯陽　江州なり。【四】庾公樓　晉の庾亮が江州を鎭ぜし時建てた樓。

山中戲問韋侍御

山中　戲に韋侍御に問ふ

我抱棲雲志。君懷濟世才。
我は雲に棲む志を抱き、君は世を濟ふ才を懷く。

常吟反招隱。那得入山來。
常に反招隱を吟ず、那ぞ山に入り來るを得ん。

【字解】【一】反招隱　文選卷二十二に王康琚の反招隱詩を收む。卽ち隱者と相反するなり。

【題義】廬山の中にゐて戲に韋侍御(前に見ゆ)に問うた詩である。

【詩意】我は隱棲の志を抱き、君は經世濟民の才を抱いてゐる。且つ平生反招隱の詩を吟じてゐる程であるから、到底我に倣つて山中に來る氣はあるまい。

贈曇禪師　夢中作

曇禪師に贈る　夢中の作

五年不入慈恩寺。
五年慈恩寺に入らず、

今日尋師始一來。
今日師を尋ねて始めて一たび來る。

欲知火宅焚燒苦。
欲知火宅焚燒苦。

方寸如今化作灰。
方寸如今化作灰。

【題義】慈恩寺の曇禪師に夢の中で贈つた詩である。

【詩意】自分は最早五年慈恩寺を訪はなかつたが、今日久しぶりで曇禪師を訪うた。近頃は心が灰のやうに冷却してしまつたから、禪師の敎を受けて火宅の燒くが如き苦を感受したいと思つて來たので、まるで普通の人とは反對だ。

【字解】【一】慈恩寺　長安に在る寺の名。【二】火宅　佛語。煩惱世界に喩ふ。法華經に「三界安きことなし、猶ほ火宅の如し。衆苦の燒く所、我皆拔濟す」とある。【三】方寸　心をいふ。如今は今。

寄微之

微之に寄す

帝城行樂日紛紛。
帝城(一)の行樂日に紛紛、

【字解】【一】帝城　帝都長安。

紛紛は衆多の貌。

(一)天畔窮愁我與君。　天畔の窮愁我と君と。
(二)秦女笑歌春不見。　秦女の笑歌は春見えず、
(四)巴猿啼哭夜常聞。　巴猿の啼哭は夜常に聞く。
何處琵琶絃似語。　何處の琵琶ぞ絃語るに似たり、
誰家凅墮髻如雲。　誰が家の凅墮か髻雲の如し。
人生多少歡娛事。　人生多少歡娛の事、
那獨千分無一分。　那ぞ獨り千分に一分なからん。

【題義】元稹に寄せて貶謫の苦況を述べた詩である。

【詩意】長安の都に居る者は日夜紛紛として歡樂を追求してゐるが、君と僕とは天涯に貶謫せられて窮愁の裏に在る。春になつても美妓の笑歌などは見ることも出來ずに、夜な夜な猿の悲しい聲を聞いてゐるばかりだ。併し何處からともなく慰め顏に琵琶の聲が聞え、何處の者か知らないが髮の美しい女なども見える。世間の數多い歡樂も、千に一つぐらゐは我我の身にも及ぶわけである。

醉吟　二首

(一)空王百法學未得。　空王の百法學ぶこと未だ得ず、
(二)姹女丹砂燒卽飛。　姹女丹砂燒けば卽ち飛ぶ。
事事無成身老也。　事事成るなくして身老いたり、
(三)醉鄉不去欲何歸。　醉鄉に去らずして何に歸せんと欲する。

【題義】醉うて酒の功德を述べた詩である。

【詩意】世の惱を脫れようとして佛法を學んだが、まだ得道が出來ず、道敎に歸依して仙藥を鍊つて見るが、是もうまくは行かない。事毎に成る所なくして徒に老い行くのみであるから、酒の力を借りて憂を掃ふより外には自ら慰める方法はない。

【字解】【一】空王　佛の尊稱。
【二】姹女　道家丹を燒くに水銀を稱して姹女といふ。參同契に「河上の姹女、靈にして最も神、火を得れば則ち飛び埃塵を見ず」とある。丹砂は仙藥の原料。【三】醉鄉　酒中なり。

〔二〕

兩鬢千莖新似雪。　兩鬢の千莖、新、雪に似、
十分一盞欲如泥。　十分の一盞泥の如くならんと欲す。
酒狂又引詩魔發。　酒狂又詩魔を引いて發す、
日午悲吟到日西。　日午悲吟して日の西するに到る。

【詩意】兩鬢の千本の白毛は雪の如く、なみなみと滿した杯を傾け醉うて泥の如くにならうと思ふ。

【字解】【一】一盞　一杯。
【二】詩魔　詩作に恥ること。
【三】日午　正午。

酒狂が又詩魔を喚び起して、正午から夕方まで悲吟してゐる。

曉寢

轉レ枕重安寢。回レ頭一欠伸。枕を轉じて重ねて安寢し、頭を回らして一たび欠伸す。
紙窗明覺レ曉。布被煖知レ春。紙窗明にして曉を覺え、布被煖にして春を知る。
莫レ強二疎慵性一。須レ安二老大身一。疎慵の性を強むる莫く、須らく老大の身を安んずべし。
雞鳴猶獨睡。不レ博二早朝人一。雞鳴いて猶獨り睡る、早朝の人に博へず。

【字解】【一】欠伸　あくびやのびをする。【二】布被　木綿の夜具。【三】早朝　朝早く朝廷に出仕する。

【題義】朝寢の氣樂な樣を述べた詩である。

【詩意】枕をしなほしては安眠し、首を向けかへては欠伸をし、窗が明るくなつたので曉を覺り、夜具が煖なので春なるを知る。疎懶の性を曲げて故に勉強するには及ばぬ、老身をば須らく安樂にして置くがよいといふ腹だから、夜が明けても起きようともせずに寢てゐる。その氣樂さは朝早く起きてそはそはと參朝する身などには到底易へられない。

答二元八郎中・楊十二博士一

元八郎中・楊十二博士に答ふ

身學二浮雲一無レ所レ著。身は浮雲を學んで著く所なく、
心同二止水一有二何情一。心は止水に同じうして何の情かある。
但知瀟灑疎二朝市一。但知る瀟灑として朝市を疎んずるを、
不レ要二崎嶇隱二姓名一。要めず崎嶇として姓名を隱すを。
盡日觀レ魚臨レ澗坐。盡日魚を觀て澗に臨んで坐し、
有レ時隨レ鹿上レ山行。時ありて鹿に隨つて山に上りて行く。
誰能拋得二人間事一。誰か能く人間の事を拋ち得て、
來共騰騰過二此生一。來りて共に騰騰として此生を過さん。

【字解】【一】止水　停つて流れない水。【二】瀟灑　心持のさつぱりとして恬淡なこと。【三】崎嶇　山坂を苦んで登る貌。【四】盡日　終日。【五】人間　世間。【六】騰騰　超脫の貌。

【題義】元八郎中（八は排行、郎中は官名）楊十二博士（十二は排行、博士は官名）に答へて閑適の情狀を述べた詩である。

【詩意】我が身は浮雲と同じで定著する所がなく、心は止水と同じで何等の情思がない。ただ恬淡として朝市を避けるのが願で、敢て山林に分け入つて姓名を隱さうといふわけではない。されば自由に游いでゐる魚を羨んで終日澗川の側に坐したり、時には鹿に隨つて山に上るやうなこともある。君等も足元の明い中に世間の俗事を擲ち去り、超然として俺と一緒に此生を終つてはどうぢや。

湖亭與行簡宿

湖亭に行簡と宿す

(一)潯陽少有風情客。　潯陽には風情の客あること少し、
招宿湖亭盡却(二)回。　湖亭に招宿せしめんとするも盡く却回す。
(三)水檻虛涼風月好。　水檻虛涼風月好し、
夜深唯共(四)阿憐來。　夜深けて唯阿憐と共に來る。

【題義】弟行簡と共に湖亭に宿つたことを述べた詩である。

【詩意】江州には風流を解する人が少いので、今夜も湖亭に招きて共に宿せんとしたが皆歸つてしまつて、好風月を賞せんと、深夜ただお前と連れ立つて此湖亭に來た。

【字解】【一】潯陽　江州なり。風情客は風流人。
【二】却回　歸ること。
【三】水檻　水に臨んだ欄干。
【四】阿憐　汪立名は、行簡の小字であらうと註してゐる。

八月十五日夜湓(一)亭望月

八月十五日夜湓亭にて月を望む

昔年八月十五夜。　昔年八月十五夜、
(二)曲江池畔杏園邊。　曲江の池畔杏園の邊。
今年八月十五夜。　今年八月十五夜、
湓浦沙頭水館前。　湓浦の沙頭水館の前。

【字解】【一】湓亭　江州に在る湓浦江の邊の亭。
【二】曲江　長安に在る池の名。杏園は長安の遊苑の名。

西北望鄕何處是。　西北、鄕を望んで何の處か是なる、
東南見月幾回圓。　東南、月を見て幾回か圓なる。
臨風一歎無人會。　風に臨んで一たび歎ずるも人の會するなし、
今夜清光似往年。　今夜の清光往年に似たり。

【題義】八月十五夜に湓亭で月を望んで感慨を述べた詩である。

【詩意】昔年の八月十五夜には、長安の都にゐて曲江の池畔、杏園の邊で此月を觀たが、今年の八月十五夜には、久しく貶謫の身となり湓浦江頭の水亭の前で此月を觀てゐる。西北の故鄕長安の方を望み見ても何處が其れやら見え分かず、東南の方月を見るに此處に來てから幾回滿月に遇つたらう。坐に感慨が起つて風に臨んで嘆息しても、誰も我が意を理解してくれる者はなく、ただ天上の月のみ昔ながらの清光を放つてゐる。

贈江客

江客に贈る

江柳影寒新雨地。　江柳影寒し新雨の地、
(一)塞鴻聲急欲霜天。　塞鴻聲急なり霜ふらんと欲する天。
愁君獨向沙頭宿。　愁ふ君が獨り沙頭に向つて宿するを、

【字解】【一】塞鴻　北邊から飛び來る鴈。

水繞蘆花月滿船。水は蘆花を繞り月は船に滿つ。

【題義】江邊に宿する客に贈つた詩である。

【詩意】雨あがりの江邊の柳の影も寒さうに見え、北地から飛び來る鴈の聲も急で霜ふらんとする空合である。かかる時に水は蘆花を繞り月は船に滿つる淋しき景色を見ながら、水邊に獨り宿する君は誠に氣の毒なものだ。

殘暑招客

雲截山腰斷。風驅雨脚回。
早陰江上散。殘暑日中來。
却取生衣著。重拈小簟開。
誰能淘晩熱。閒飲兩三杯。

【字解】【一】生衣　かたびらの類。【二】小簟　たかむしろ。

【題義】殘暑に客を招いて一酌したいといふ意を述べた詩である。

【詩意】黒雲が山の腰に棚曳くや、忽ち急風が驟雨を吹いて去り、やがて陰雲も散じて殘暑が烈しくなつて來た。又もや生衣を取り出して著たり、重ねて簟をひろげて臥したりした。願はくは誰でも晩熱を淘し、閒に兩三杯を飲まん。

潯陽秋懷贈許明府

霜紅二林葉。風白九江波。
暝色投煙鳥。秋聲帶雨荷。
馬閒無處出。門冷少人過。
鹵莽還鄉夢。依稀望闕歌。
共思除醉外。無計奈愁何。
試問陶家酒。新篘得幾多。

【字解】【一】二林　廬山に在る東林寺と西林寺。【二】九江　潯陽なり。【三】暝色　夕の色。【四】荷　蓮葉。【五】鹵莽　粗率なり。【六】依稀　さも似たり。【七】陶家　陶淵明嘗て彭澤縣令となる。因つて許明府を以て淵明に比す。【八】新篘　篘は酒を漉す籠。

【題義】潯陽にて秋の感懷を述べ許明府（許は姓、明府は縣令の稱）に贈つた詩である。

【詩意】東林・西林二寺の木の葉は既に色づき、潯陽江上には白波が立つてゐる。塒に歸る鳥が夕雲の中に沒し、蓮の葉を打つ雨にも秋の聲がする。馬は暇で遊んでゐるが往くべき處もなく、門は靜かに氣心の合ふ友達でも招きて晩熱を洗ひすすぎ、倶に酒杯を傾けたいものだ。

して來り訪ふ人もない。やたらに故郷に還つた夢を見て、まざまざと宮闕を望み見て喜び歌ふこともある。我我は酒を以て愁をまぎらすより外には自ら慰める方法がない。因つて試みに君に問ふが、君の家では新酒がどのくらゐ出來たか。

九日醉吟

有レ恨頭還白。無レ情菊自黃。
一爲二州司一馬。三見二歲重一陽。
劍匣塵埃滿。籠禽日月長。
身從二漁父一笑。門任二雀羅一張。
問レ疾因留レ客。聽レ吟偶置レ觴。
歎時論二倚伏一。懷レ舊數二存亡一。
奈老應無レ計。治レ愁或有レ方。
無レ過レ學二王績一。唯以レ醉爲レ鄉。

【字解】【一】司馬　官名。【二】重陽　九月九日をいふ。【三】劍匣　劍をいれておく箱。【四】漁父　屈原の作に漁父辭あり。漁父が屈原の愁ふるを笑ひしことを述ぶ。【五】雀羅　雀を捕ふる網。漢の翟公が廷尉たりし時は賓客門に滿つるほどであつたが、一旦廢せらるるに及び、誰あつて訪ふ者なく、雀のみ庭に下り啄み、網を張りて之を捕ふべきほど門庭が寂然としてゐた。【六】倚伏　禍福なり。老子に禍は福の倚る所、福は禍の伏する所とあるに本づく。【七】王績　隋の人、醉鄉記を著し酒の功德を述ぶ。

【題義】九月九日重陽の節句に醉吟した詩である。

【詩意】愁恨の爲に我が頭髮は白くなつたが、菊は何の情感もなく黃花を開いてゐる。一たび江州司馬に貶せられてから、既に三回重陽に遇つた。劍を佩びる事もないので箱には塵が積り、籠の鳥のみ閒日月に伴つてゐる。我が身は漁父の笑ふに任せ、人の訪ふ者なきも敢て恨まない。幸に我が病を問ふ者あれば之を引き留め、互に詩を吟じなどして酒を酌み、時世を歎じて禍福を論じ、舊友を懷うて其存亡を數へなどしてゐる。老の來るは避くるに方なけれども、愁を醫するには强ち方法のないわけではない。卽ち王績に倣つて醉鄉を樂むのが最善の策である。

問韋山人山甫

身名身事兩蹉跎。
試就二先生一問若何。
從レ此神仙學得否。

韋山人山甫に問ふ

身名身事兩ながら蹉跎たり、
試みに先生に就いて若何と問ふ。
此より神仙學び得んや否や、

【字解】【一】蹉跎　躓きて進まぬこと。【二】先生　韋山人を指す。

白鬚雖有未爲多。白鬚ありと雖も未だ多しとなさず。

【題義】韋山甫といふ道士に問うた詩である。

【詩意】我は名聲も事業も皆擧らないでしまつたから、試みに先生に就いて將來如何にすればよいか聞いて見たいと思ふ。既に白鬚になつたがまだ左程多くはないが、これからでも神仙の道を學び得るであらうかどうか。

送蕭(一)鍊師步虛詞十首卷後以二絕繼之

蕭鍊師を送る步虛詞十首の卷後、二絕を以て之に繼ぐ

欲上瀛(二)洲臨別時。瀛洲に上らんと欲して別に臨む時、
贈君十首步虛詞。君に十首の步虛詞を贈る。
天仙若愛應相問。天仙若し愛して應に相問ふべくんば、
向道江州司馬詩。向つて道へ江州司馬の詩と。

【字解】【一】蕭鍊師　蕭は姓、道士の德高く思精なる者を鍊師といふ。步虛詞とは仙人の縹緲輕擧の美を述ぶる詞、樂府題の名なり。【二】瀛洲　東方海中に在る仙山の名。

【題義】蕭鍊師の去るを送りて步虛詞十首を作り、その卷後に此二絕句を添へたといふ意である。

【詩意】鍊師は此から仙山に上るので、その送別の爲に步虛詞十首を作つて之を呈する。さて仙人たちが若し此詞を愛して誰の作だと問うた時は、江州司馬白居易の作だと謂つて下され。

〔一〕

花紙瑤緘(一)松墨字。花紙瑤緘松墨の字、
把將天上共誰開。把り將ちて天上誰と共にか開く。
試呈王母(二)如堪唱。試みに王母に呈して如し唱ふるに堪へなば、
發遣雙成(三)更取來。雙成を發遣して更に取り來れ。

【字解】【一】瑤緘　書函の美稱。松墨は松煙墨なり。油煙のよりも品質良し。【二】王母　仙人西王母。【三】雙成　西王母の侍女。

【詩意】我が鍊師に呈する步虛詞は松墨で、花紙に認め之を瑤緘に收めてある。師は此を天上に持ち行きて誰と共に開き誦するであらうか。試みに西王母に呈して唱するに足る名作だといふときは、更にいくらでも呈するから雙成を取りに遣して下され。

贈李兵馬使

李兵馬使に贈る

身得貳(一)師餘氣槩。身には貳師の餘氣槩を得、
家藏都(二)尉舊詩章。家には都尉の舊詩章を藏す。

【字解】【一】貳師　漢の武帝李廣利に命じて貳師將軍となし以て大宛國を征せしむ。李兵馬使と同姓なる故、李廣利を擧げたのである。

江南別有(二)樓船將。(三)江南別に樓船の將あり、
燕頷虬鬚不(四)姓楊。燕頷虬鬚楊を姓とせず。

【題義】李兵馬使に贈りて其英風才藻を譽めた詩である。

【詩意】身は貳師將軍李廣利の遺風を傳へ、才は騎都尉李陵の詞藻を有し、然も江南に於て楊僕以外に別に樓船將軍の勇力を抱いてゐる。是人こそ實に吾が李兵馬使である。

題(一)遺愛寺前溪松

偃亞(一)長松樹。侵臨小石溪。
靜將(二)流水(一)對。高共(三)遠峰(二)齊。
翠蓋(二)煙籠密。花幢(三)雪壓低。
與(一)僧清影坐。借(一)鶴穩枝棲。

遺愛寺の前溪の松に題す

偃亞す長松樹、侵臨す小石溪。
靜かに流水と對し、高く遠峰と共に齊し。
翠蓋煙籠むること密に、花幢雪壓して低る。
僧と清影に坐し、鶴に借して穩枝に棲ましむ。

【題義】遺愛寺（廬山の香爐峰の北に在る寺の名。）の前の溪の邊に在る松を詠じた詩である。

【詩意】長い松の樹が小石溪に臨んで偃してゐる。靜かに谷川の水に對し、遠峰と齊しく聳え、その枝には春は煙が籠め冬は雪が積り、夏は僧と其影に涼み、秋は鶴に貸して棲ましめる。その姿は筆にも寫し難く、風の音は琴の音かと疑はれ、械械として暑氣を掃ひ、夜は露を湛へて涼味を增す。その傍に草舍を營み、その周圍に小徑をつけ、建築用材などには決してせず、永く保存して幽居の伴としたいものだ。

筆寫(一)形難(一)似。琴像(一)韻易(一)迷。
暑天風械械(四)、晴夜露淒淒(五)。
獨憩依爲(一)舍。閒行繞作(一)蹊。
棟梁君采(一)莫。留著伴(二)幽棲(一)。

【字解】【一】偃亞　ふしたれる。【二】翠蓋　松の枝に喩ふ。【三】花幢　松の枝に喩ふ。【四】械械　風の聲。【五】淒淒　寒涼の貌。【六】幽棲　幽居。

【題義】遺愛寺（廬山の香爐峰の北に在る寺の名。）の前の溪の邊に在る松を詠じた詩である。

【詩意】長い松の樹が小石溪に臨んで偃してゐる。靜かに谷川の水に對し、遠峰と齊しく聳え、その枝には春は煙が籠め冬は雪が積り、夏は僧と其影に涼み、秋は鶴に貸して棲ましめる。その姿は筆にも寫し難く、風の音は琴の音かと疑はれ、械械として暑氣を掃ひ、夜は露を湛へて涼味を增す。その傍に草舍を營み、その周圍に小徑をつけ、建築用材などには決してせず、永く保存して幽居の伴としたいものだ。

廬山草堂夜雨獨宿。寄(二)牛二・李七・庾三十二員外(一)

廬山草堂に夜雨獨り宿し、牛二・李七・庾三十二員外に寄す

【一】都尉　漢の武帝の時、李陵騎都尉に拜せられ步騎五千に將とし、匈奴と力戰し、力竭きて降る。詩に巧なり。これも李兵馬使と同姓である。【二】樓船將　漢の武帝楊僕を以て樓船將軍となし南越を擊たしむ。【四】燕頷　相者あり後漢の班超を相して、生は燕頷虎頸飛んで肉を食ふ。萬里侯の相なりと謂つたが、後果して定遠侯に封ぜられた。虬鬚は虬髯客なり。張は姓、排行は三。李靖に因つて唐の太宗に見え、その眞天子たるを知る。貞觀中東南蠻奏す、海船千艘、甲兵數十萬あり、扶餘國に入り其主を殺して自立すと。是れ卽ち虬髯客なり。

(一)丹霄攜ㇾ手三君子。　丹霄手を攜ふ三君子、
白髪垂ㇾ頭一病翁。　白髪頭に垂る一病翁。
(二)蘭省花時錦帳下。　蘭省の花時錦帳の下、
廬山雨夜草庵中。　廬山の雨夜草庵の中。
終身膠漆(三)心應ㇾ在。　終身膠漆心應に在るべし、
半路(四)雲泥迹不ㇾ同。　半路雲泥迹同じからず。
唯有(五)無生三昧觀。　唯無生三昧の觀あり、
榮枯一照兩成ㇾ空。　榮枯一照して兩ながら空と成る。

【題義】廬山の草堂（廬山に草堂を營んだことは樂天の微之に與ふる書に詳かに述べてある）に雨の夜に獨り宿し、感懷を敍して此詩を作り、長安に居る牛二・李七（宗閔、字は損之。）庾三十二員外に寄せたのである。

【詩意】君等は手を攜へて宮廷に仕へてゐるが、僕は白髪の老翁となつて江州に貶せられてゐる。君等は尚書省の花の時節に錦帳の下に時めいてゐるであらうが、僕は廬山の雨の夜に草堂の中にくすぶつてゐる。人生の半に際して君等は榮え僕は貶せられて雲泥の差を生じたが、併し膠漆にも比すべき交情は終身心に失はぬであらう。僕は釋敎の修養に心を打ち込んで、榮枯盛衰を同一視し、敢て差別を其間に置かぬやうに心懸けてゐる。

【字解】【一】丹霄　天空をいふ。宮廷に喩ふ。三君子は牛二・李七・庾三十二を指す。【二】蘭省　尚書省。【三】膠漆　親交なり。【四】半路　人生行路の半。【五】無生三昧觀　釋敎修養の理法。

聞楊十二新拜省郎。遙以詩賀

楊十二が新に省郎に拜せらるるを聞き、遙に詩を以て賀す

(一)文昌新入有光輝。　文昌新に入りて光輝あり、
(二)紫界宮牆白粉闈。　紫界の宮牆白粉の闈。
曉日雞人傳漏箭。　曉日雞人漏箭を傳へ、
春風侍女護朝衣。　春風侍女朝衣を護る。
(四)雪飄歌句高難和。　雪は歌句を飄して高くして和し難く、
鶴拂(五)煙霄老慣飛。　鶴は煙霄を拂つて老いて飛ぶに慣る。
官職聲名俱入ㇾ手。　官職聲名俱に手に入る。
近來詩客似ㇾ君稀。　近來詩客君に似るもの稀なり。

頃嘗有二贈ㇾ楊詩一、落句云、不ㇾ用更敎二詩過好一、折二君官職一是詩名、今故云俱入ㇾ手。

【題義】楊十二が新に省郎（省中の郎官。）に任ぜられた事を聞き、遙に此詩を寄せて賀意を表したのである。

【字解】【一】文昌　星の名。史記に「斗魁戴匡六星を文昌宮といふ」とある。人の大貴を主る星なりといふ。楊十二を此星に比す。【二】紫界　禁中をいふ。【三】雞人　宮中にて曉を報ずる事を掌る官吏。漏箭は時刻の意。【四】雪飄歌句　宋玉の文に「陽春・白雪をなせば國中屬して和する者數十人に過ぎず。是を以て其曲いよいよ高ければ其和いよいよ少し」とある。陽春・白雪は俱に古の歌曲の名。【五】煙霄　高き空。

である。

【詩意】君の身に幸運が廻つて來て近頃は宮省に仕へることになつたさうだ。宮中に宿直しては、曉を報ずる雞人の聲に目を覺まし、侍女の護る朝衣を纏うて參朝するであらう。君の詩は陽春・白雪にも比すべく、人の和することの出來ない高趣があり、身は老鶴の雲霄に翔るが如く榮進した。されば官職の方も詩名の方も倶に君の手中に入つたわけだ。（曾て詩を贈つた時に、君は詩名が高い爲に却つて昇進が出來ないのだから、あまり詩を上手に作らぬがよいと申したが）近來詩人で君のやうに有卦に入つてゐる者は稀である。

三月三日懷微之

三月三日微之を懷ふ

良時光景長虛擲。　良時の光景長く虛しく擲つ、
壯歲風情已闇銷。　壯歲の風情已に闇に銷す。
忽憶同爲校書日。　忽ち憶ふ同じく校書たりし日、
每年同醉是今朝。　每年同じく醉ひしは是れ今朝。

【題義】三月三日の節句に元稹を懷うて作つた詩である。

【詩意】春の好い景色も久しく相倶に賞することも出來ず、血氣の情味も已に失せてしまつた。憶へば君と同じく校書郎であつた頃は、每年今日は必ず酒宴を倶にしたものであつた。

【字解】【一】良時　春の好氣節。
【二】校書　官名。校書郎。

贈韋八

韋八に贈る

辭レ君歲久見レ君初。　君を辭し歲久しうして君を見るの初、
白髮驚嗟兩有レ餘。　白髮驚嗟兩ながら餘あり。
容鬢別來今至レ此。　容鬢別れ來りて今此に至り、
心情料取合二何如一。　心情料取す合に何如なるべき。
曾同曲水花亭醉。　曾て同うす曲水花亭の醉、
亦共華陽竹院居。　亦共にす華陽竹院の居。
豈料天南相見夜。　豈料らんや天南相見るの夜、
哀猿瘴霧宿二匡廬一。　哀猿瘴霧匡廬に宿せんとは。

【題義】韋八に贈つた詩、韋八も南方に貶せられて來たのであらう。

【詩意】別れてから久しく年を經て相會し、お互に白髮になつたことを驚嗟した。身は相離れて今日に至つたが、心は昔に變らぬことが料り知られる。昔は長安にゐて倶に曲江の畔の花亭に醉ひ、華陽

【字解】【一】曲水　長安の曲江をいふ。
【二】華陽　道觀の名。
【三】天南　南方の地方。
【四】匡廬　廬山をいふ。

觀に居を共にしたものであつたが、今南方で久し振りに相會し、哀猿の聲を聞き瘴霧を冒して俱に廬山に宿せんとは、實に意外である。

春江閒步。贈張山人

江景又妍和。牽愁發浩歌。
晴沙金屑色。春水麴塵波。
紅簇交枝杏。青含卷葉荷。
藉莎憐軟暖。憩樹愛婆娑。
書信朝賢斷。知音野老多。
相逢不閒語。爭奈日長何。

【字解】【一】妍和　美しくあたたかなこと。【二】浩歌　聲高く歌ふこと。【三】金屑　黃色の碎粉。【四】麴塵　麴に生ずる細黴。その色淡黃色なり。【五】荷　蓮の葉。【六】莎　しば草。【七】婆娑　樹の風に舞ふ貌。【八】朝賢　朝廷に仕ふる賢臣。【九】知音　知己。野老は田夫野人。

【題義】春、江畔を漫步し、張山人に贈つた詩である。

【詩意】江邊に滿つる春景色が、人の愁を牽いて覺えず浩歌を發せしめる。乾いた沙は金粉の色を敷き、春水の波は淡黃色を漂はし、枝を交ふる杏の花は紅を聚め、卷いた蓮の葉は青を含んでゐる。芝生に坐しては軟かに暖かきを愛し、樹下に憩ひては影の搖くに興ずる。近來は朝臣などとは全く音信が斷えて、田夫野人と知己になつた。日が長くて暮し兼ねるから、相逢うて君と閒語したいものぢや。

春聽琵琶。兼簡長孫司戶

四絃似不似琵琶聲、
亂寫眞珠細撼鈴。
指底商風悲颯颯、
舌頭胡語苦醒醒。
如言都尉思京國、
似訴明妃厭虜庭。
遷客共君相勸諫、
春腸易斷不須聽。

【字解】【一】四絃　琵琶には四絃あり。【二】亂寫　亂れてころがす。寫はソソグと訓ず。【三】商風　秋風。悲しげな聲。颯颯は風の音。【四】胡語　えびすの言葉。醒醒は興のさめること。【五】都尉　李陵騎都尉となり、匈奴を征して敗れ、遂に匈奴に降る。京國は帝都。【六】明妃　王昭君をいふ。匈奴王に嫁す。【七】遷客　貶謫せられてゐる人。

【題義】春琵琶を聽いた詩で、此詩を長孫司戶（長孫は姓、司戶は官名）に寄せたのである。琵琶はもと胡の樂器であるから、胡に關係のある故事を敍した。

【詩意】この琵琶の聲を聽くに全く琵琶とは思はれない。眞珠の珠を盆の上にころがすか、細に鈴を振ふかと怪まれるくらゐだ。指先で彈じ出す其音は秋風の颯颯として悲むが如く、舌端を發する胡語の興醒むるが如くである。或は李陵が漢京を慕ふ苦衷を語るが如く、或は王昭君の匈奴の宮廷を厭ふを訴ふるが如くである。我は君と共に遷客となつてゐるから、一言諫告するが、斷腸の聲は到底聽くに堪へないから聽かぬがよい。

吳宮詞

一入二吳王殿一無二人覩一翠蛾一。
樓高時見レ舞。宮靜夜聞レ歌。
半露胷如レ雪。斜廻臉似レ波。
妍媸各有レ分。誰敢妒二恩多一。

【字解】【一】翠蛾　美人の眉。【二】臉　顏。【三】妍媸　美醜なり。

【題義】吳王の宮女の事を借りて暗に仕官する身を諷した作である。

【詩意】一たび吳王の宮殿にはひつてからは、全く世間の人と接觸する機會がなくなり、高樓の中に日夜歌舞を事とし、半雪の如き胸を露し、秋波を送り顏を回らして媚を呈する。併し美醜各〻其天分が定まつてゐるから、美貌の者が特に君寵を擅にするとも敢て妬むべくもない。

送韋侍御量移金州司馬一　時予官獨未レ出。

韋侍御が金州司馬に量移せらるるを送る　時に予官獨り未だ出でず

春歡雨露同霑レ澤。
冬歎風霜獨滿レ衣。
留滯多時如レ我少。
遷移好處似レ君稀。
臥龍雲到須二先起一。
蟄燕雷驚尙未レ飛。
莫レ恨東西溝水別。
滄溟長短擬二同歸一。

【題義】韋侍御が金州司馬に量移（罪を得て遠方に貶せられた人が赦に遇うて近地に改め置かれること）せられるのを送つた詩である。

【詩意】春は歡ぶ雨露同じく澤に霑ふを、冬は歎ず風霜獨り衣に滿つるを。留滯多時我の如きは少し、遷移好處君に似たるは稀なり。臥龍雲到りて須らく先づ起つべし、蟄燕雷驚きて尙未だ飛ばず。恨む莫れ東西溝水の別、滄溟長短同歸を擬す。

【詩意】昔は同じく朝に仕へて春の如き聖恩に浴したこともあつたが、今は君が金州に去ることになつて我獨り風霜の寒を歎じてゐる。いつまでも江州に留滯すること我の如きは少く、好い處に遷されること君の如きも稀である。君は臥龍にも喩ふべき英才であるから、雲を得れば躍動するのは當然である。我は蟄燕と同じで雷が鳴つて春を告げても尚飛翔することも出來ない。今は溝水の如く東西に相別れ、長短相異るも末は同じく大海に歸したいと望んでゐる。

自到潯陽生三女子。因詮眞理用遣妄懷

潯陽に到りてより三女子を生む、因つて眞理を詮かにして用て妄懷を遣る

宦途本自安身拙。　宦途本自ら身を安んずること拙なり、
世累由來向老多。　世累由來老に向つて多し。
遠謫四年徒已矣。　遠く謫せらるること四年徒に已みぬ、
晚生三女擬如何。　晚に三女を生んで如何せんと擬する。
預愁嫁娶眞成患。　預め嫁娶を愁へて眞に患を成す、
細念因緣盡是魔。　細に因緣を念ふに盡く是れ魔。
賴學空王治苦法。　賴に空王苦みを治むる法を學ぶに賴り、
須拋煩惱入頭陀。　須らく煩惱を拋つて頭陀に入るべし。

【字解】【一】空王　佛の尊稱。【二】頭陀　佛僧をいふ。梵語で煩惱を拂除する意。

【題義】潯陽郡に貶せられて來てから三人の女子を生んだ。因つて眞理を明かにして己の妄想を霽らしたといふ意。

【詩意】官吏生活は身の浮沈が甚しく、世間の係累は年を取るほど多くなる。我も潯陽に貶せられて空しく四年を過ぎ、老いて三女を生んでどうしようもない。將來の嫁娶を考へると今から患の種となり、細に因緣を思へば全く一の魔である。ただ佛敎でも學んで煩惱を一掃するより外はない。

江西裴常侍以優禮見待。又蒙贈詩。輒敍鄙誠用伸感謝

江西の裴常侍優禮を以て待たれ、又詩を贈らる、輒ち鄙誠を敍して用て感謝を伸ぶ

一從簪笏事金貂。　一たび簪笏に從つて金貂を事とす、
毎借溫顏放折腰。　毎に溫顏を借して折腰を放す。
長覺身輕離泥滓。　長く覺ゆ身輕くして泥滓を離るるを、
忽驚手重捧瓊瑤。　忽ち驚く手重く瓊瑤を捧ぐるを。

【字解】【一】簪笏　簪は冠をとめるカンザシ。笏はシャク。仕宦すること。金貂は常侍の冠。【二】溫顏　顏色を和げる。折腰は拜禮すること。【三】泥滓　塵土といふが如

馬因回顧雖增價。　馬は回顧に因つて價を增すと雖も、
桐遇知音已半焦。　桐は知音に遇ふも已に半焦げたり。
他日秉鈞如見念。　他日鈞を秉りて如し念はるれば、
壯心直氣未全銷。　壯心直氣未だ全く銷せず。

【題義】江西の裴常侍（常侍は官名）が常に樂天を優待し、又詩を贈りなどした。因つて樂天は此詩を呈して感謝の意を表したのである。

【詩意】君は嘗て常侍の重職にゐた人であるのに、毎に溫顏を以て我を迎へて下さるのは辱なく存ずる。君の厚遇を受けては身が輕くなつて塵土を脫れたやうに思ひ、又佳詩を捧げて我に贈られしは驚き入つた御親切である。駑馬の如き我も君の眷顧を受けて大に價を增したが、惜しいかな知音に遇うても桐は半焦げて立派な琴にはなりさうもない。併し君が後日要路に當つて幸に我に目をかけて下さらば、我が壯心直氣は未だ全く消滅してはしまはないから、君の爲に微力を效したいと存ずる。

自江州司馬授忠州刺史。仰荷聖澤。聊書鄙誠

江州司馬より忠州刺史を授けられ、仰いで聖澤を荷ひ、聊か鄙誠を書す

炎瘴拋身遠。泥塗索脚難。　炎瘴身を拋つこと遠く、泥塗脚を索むること難し。
網初鱗撥刺。籠久翅摧殘。　網初は鱗撥刺、籠久しく翅摧殘。
雷電頒時令。陽和變歲寒。　雷電時令を頒ち、陽和歲寒を變ず。
遺簪承舊念。剖竹授新官。　遺簪舊念を承ぎ、剖竹新官を授けらる。
鄉覺前程近。心隨外事寬。　鄉は前程の近きを覺り、心は外事に隨つて寬なり。
生還應有分。西笑問長安。　生還應に分あるべし、西笑長安を問ふ。

【字解】【一】炎瘴　炎熱の惡氣。江州の氣候をいふ。【二】泥塗　泥の道。貶謫に喩ふ。【三】撥剌　躍剌に同じ。魚の躍る貌。【四】摧殘　損傷なり。【五】時令　時節といふが如し。【六】前程　前途といふが如し。【七】剖竹　竹符なさきて官職に任ずること。【八】遺簪　のこつてゐる簪。簪は冠をとめるカンザシ。

【題義】江州司馬から忠州刺史に轉任を命せられたので、仰いで聖天子の恩澤に感じ、感懷を敍した詩である。

【詩意】遠く炎熱の地に貶せられて行步の自由をも失つた。初めは網中の魚と同じではあつたがまだ潑剌たる勢もあつたけれども、年久しくなつては籠の鳥の翅が損傷したと同じく、全く氣力を失つてしまつた。忽ち一聲の雷（天子の恩命に比す）が鳴つて春の來たことを告げ、歲寒を變じて陽和の候となした。（轉任の恩命を拜したこと。）遺簪を見ては舊日在朝の時を念ひ、新に忠州刺史に任せられたことを喜んだ。かくて鄉里長安の近くなつたことを覺り、心も隨つてのびのびとした。其中には生き

て故郷に還ることも出來るであらうと思ひ、笑つて西の方長安の事を問ひなどした。

除忠州寄謝崔相公

忠州に除せられ崔相公に寄せ謝す

提拔出泥知力竭(一)　提拔して泥を出し力の竭くるを知り、
吹噓生翅見情深(二)　吹噓して翅を生じ情の深きを見る。
劍鋒缺折難衝斗　劍鋒缺折して斗を衝き難く、
桐尾燒焦豈望琴　桐尾燒焦して豈琴を望まんや。
感舊兩行年老淚　舊に感ずる兩行年老の淚、
酬恩一寸歲寒心　恩に酬ゆる一寸歲寒の心。
忠州好惡何須問(三)　忠州の好惡何ぞ問ふを須ひん、
鳥得辭籠不擇林(四)　鳥、籠を辭するを得れば林を擇ばず。

【題義】忠州刺史に任ぜられたので崔羣（元和十二年に同平章事になつた。故に相公といふ。）に此詩を寄せて其盡力を謝したのである。

【詩意】僕を泥の中から拔き擧げてくれたのは君の盡力に賴り、僕を推薦して翅を振ふことが出來るやうにしてくれたのは君の親切に賴る。併し僕は、譬へば鋒先の折れた劍の如く斗牛を衝く氣力もなく、燒け焦げた桐の如く到底立派な琴にはなりさうもない。ただ舊誼に感謝する涙と恩義に酬ゆる寸心とは今以て持つてゐる。忠州の好い處か否かは問題ではない。鳥は籠の中を出ることさへ出來れば枝のよしあしなどは擇ばないのだから。

【字解】【一】提拔　拔き擧げること。【二】吹噓　息を吹きかけること。人を推薦すること。【三】好惡　よしあし。【四】鳥　樂天自ら喩ふ。

初除官蒙裴常侍贈鶺鴒瑞草緋袍魚袋因謝惠貺兼抒離情

初めて官に除せられ裴常侍に鶺鴒瑞草の緋袍・魚袋を贈らる、因つて惠貺を謝し、兼ねて離情を抒ぶ

新授銅符未著緋　新に銅符を授けられて未だ緋を著けず、
因君裝束始光輝　君に因つて裝束して始めて光輝あり。
惠深范叔綈袍贈　惠は范叔が綈袍の贈よりも深く、
榮過蘇秦佩印歸　榮は蘇秦が印を佩びて歸るに過ぐ。
魚綴白金隨步躍　魚は白金を綴りて步に隨つて躍り、
鶺銜紅綬繞身飛　鶺は紅綬を銜んで身を繞りて飛ぶ。

【字解】【一】鶺鴒瑞草緋袍　鶺といふ鳥が瑞草をくはへてゐる模樣を織出してある緋色の上衣。刺史になれば緋袍を著ることが出來る。【二】魚袋　金銀を以て魚の形を作り、帶に繫けて飾となす。貴賤により差あり。【三】銅符　銅虎符なり。剖符を剖きて官を授けられたこ

明朝戀別朱(七)門淚。明朝別を戀ふ朱門の涙、
不敢多垂恐汚衣。敢て多く垂れざるは衣を汚さんことを恐ればなり。

秦に仕へて相となる。須賈秦に使す。睢微行して之を見る。須賈曰く、范叔一寒此の如き哉と。一綈袍を取りて之に贈る。綈袍は綿入れの著物。【五】蘇秦　六國合從の約を成し、六國の相印を佩びて故郷洛陽を過ぐ。【六】白金　銀なり。銀魚袋ないふ。【七】朱門　朱塗の門。貴人の邸。ここは裴常侍の邸を指す。

【題義】初めて忠州（今の四川省忠縣）刺史に任ぜられたので、裴常侍（前に見ゆ）から緋袍と銀魚袋とを贈られた。因つて其賜を謝し、兼ねて遠別の情を述べた詩である。

【詩意】新に忠州刺史に任ぜられたが、まだ緋衣は著なかつた。所が今君の御配慮によつて緋衣を著ることが出來て、始めて光輝を放つやうになつた。その恵は范睢が綈袍を贈られたぐらゐではなく、その榮は蘇秦が六國の相印を佩びたより以上である。銀魚袋は歩むたびに躍り、鶺鴒瑞草の緋袍は身を繞つてひらひらしてゐる。明朝は惜き別を告げねばならないが、多く涙を流さないのは、折角頂戴した著物の汚れることを恐れてである。

洪州逢二熊孺登一　洪州にて熊孺登に逢ふ

靖(一)安院裏辛夷下。　靖安院裏辛夷の下、

【字解】【一】靖安　長安の街名。

醉笑狂吟氣最粗。醉笑狂吟氣最も粗なり。
莫問別來多少苦。問ふ莫れ別來多少の苦、
低(二)頭看取白髭鬚。頭を低れて看取せよ白髭鬚。

【題義】洪州（今の江西省南昌縣）で熊孺登にめぐり逢つて作つた詩である。

【詩意】以前は君と共に靖安街の道院の辛夷の花の咲いてゐる下で、醉歌狂吟して豪氣を吐いたこともあつたが、一旦相別れてから以來、いかばかり苦辛を嘗めたかは問はずとも知れよう。よく頭を低れて我が白髭を見てくれ、これこの通りだ。

【字解】【一】多少　多いこと。
【二】看取　覩ること。

初著二刺史緋一答二友人見贈一　初めて刺史の緋を著け、友人の贈られしに答ふ

故(一)人安慰善爲(二)辭。故人安慰善く辭を爲す、
五十專(三)城道未(二)遲。五十城を專にするは道未だ遲からずと。
徒使二花袍紅似一(三)火。徒に花袍をして紅なること火に似しむるも、
其如二蓬鬢白成一(四)絲。蓬鬢の白くして絲と成るを其如せん。
且貪二薄俸一(二)君應(二)惜。且つ薄俸を貪る君應に惜むべし、

【字解】【一】故人　舊友。
【二】專ノ城　刺史となること。
【三】花袍　緋袍なり。
【四】蓬鬢　蓬の如く亂れた鬢の毛。

不レ稱二衰容一我自知。　衰容に稱はざるは我自ら知る。
銀印可レ憐將底用。　銀印憐む可し將た底の用ぞ、
只堪二歸レ舍嚇一妻兒一。　只舍に歸りて妻兒を嚇すに堪ふ。

【題義】江州司馬の時は綠袍しか著られなかつたが、忠州刺史に任ぜられて初めて緋の袍を著ることが出來た。因つて友人から祝賀の詩を贈られたのに答へたといふ意である。

【詩意】舊友たちは「五十歲で刺史になれば左程昇進の遲い方ではない」などと慰め顏にお世辭を言つてくれるが、徒に緋袍が火のやうに紅であつても、鬢の毛は蓬の如く亂れて且つ白毛と來てゐるのだから自慢にもならない。且つ此齡になつて僅ばかりの俸祿を貪るのは、君等も氣の毒だと內心思つてゐようが、この老人には相應しくないことは自分も萬萬承知してゐる。今更銀印を佩びても何の役に立たうか。ただ家に歸つて妻子を嚇かすに足るぐらゐのものだ。

又答二賀客一

又賀客に答ふ

銀章暫假爲二專城一。　銀章暫く假りて專城となる、
賀客來多懶二起迎一。　賀客來ること多くして起ちて迎ふるに懶し。
似レ挂二緋衫衣架上一。　緋衫を衣架の上に挂くるに似たり、

【題義】銀印を佩びて刺史になつたので、祝賀の客が續續來るが起つて迎へるのも大儀だ。老衰した身で刺史になるのは緋袍を衣桁に挂けたやうで、光榮でも何でもない。

【詩意】銀章　銀印。刺史の佩ぶる印。專城は刺史をいふ。
緋衫　刺史の服。衣架は衣桁。

朽株枯竹有二何榮一。　朽株枯竹何の榮か有らん。

【字解】【一】成レ絲　白毛になる。
【二】銀印　刺史の佩ぶる印。
【三】朽株枯竹　老衰した身に喩ふ。

別二草堂一三絕句

草堂に別る三絕句

正聽二山鳥一向レ陽眠。　正に山鳥を聽き陽に向ひて眠る、
黃紙除書落二枕前一。　黃紙除書枕前に落つ。
爲レ感二君恩一須二暫起一。　爲に君恩を感ずるが爲に須らく暫く起つべし、
爐峰不レ擬住多年。　爐峰は擬せず住すること多年なるを、

【題義】樂天が廬山に營んだ草堂に別れる時の感懷を敍した詩である。

【詩意】丁度鳥の聲を聽きつつ陽に寢てゐる時に、忠州刺史に任ずるといふ敕書が我が前に屆いた。因つて君恩の辱なきに感じて暫く其任に就くことに決心した。併し吾が愛する香爐峰は久しく忠州に住することを欲せぬのである。

【字解】【一】黃紙　敕書は黃色の紙を用ふ。除書は辭令書。
【二】爐峰　香爐峰。廬山の峰の名。
【三】不レ擬　擬は欲せずといふが如し。

〔二〕

久眠褐被爲居士。　久しく褐被に眠りて居士と爲り、
忽挂緋袍作使君。　忽ち緋袍を挂けて使君と作る。
身出草堂心不出。　身は草堂を出づれども心は出です、
廬山未要動移文。　廬山未だ移文を動かすを要せず。

【題義】久しく褐被の中に高臥して居士となつてゐたが、忽ち忠州刺史に任ぜられた。身はたとひ草堂を出るとも心は決して出ないから、廬山の神靈は移文をまきちらして吾が行動を警戒するには及ばない。

【字解】【一】褐被　毛布の夜具。居士は佛を奉ずるの士。【二】緋袍　刺史の服。使君は刺史の稱。【三】移文　ふれ文。各地に移示する文なり。周顒初め北山に隱る。後詔に應じ出でて海鹽縣令となる。孔稚珪乃ち山靈の意を假りて北山移文を作り、之を移して再び北山に至るを得ざらしむ。

〔三〕

三間茅舍向山開。　三間の茅舍山に向ひて開き、
一帶山泉遶舍廻。　一帶の山泉舍を遶りて廻る。
山色泉聲莫惆悵。　山色泉聲惆悵すること莫れ、
三年官滿却歸來。　三年官滿たば却つて歸來せん。

【字解】【一】三間　三室。

【詩意】僅に三室の茅堂が山に面して立ち、一筋の泉がそのまはりを流れてゐる。山も泉も余の去るを悲むには及ばない。三年の任期が滿つれば又此處に歸つてくるから。

鍾陵餞送　鍾陵の餞送

翠幕紅筵高在雲。　翠幕紅筵高くして雲に在り、
歌鐘一曲萬家聞。　歌鐘一曲萬家に聞ゆ。
路人指點滕王閣。　路人は滕王閣を指點し、
看送忠州白使君。　看送る忠州の白使君。

【題義】鍾陵（江西省に在る山の名。）で知人が白樂天の忠州に赴任するのを見送つてくれた時の樣を述べた詩である。

【詩意】高い山の上に送別の宴席を美美しく設け、歌鐘の聲が萬家に響き渡つて聞える。路行く人も遙に滕王閣を指しながら、忠州刺史白居易の行を見送つてゐる。

【字解】【一】翠幕紅筵　白樂天の送別の宴席。【二】滕王閣　もと江西省新建縣の西章江門上に在り。唐の滕王元嬰が洪州に都督たりし時建てたのである。【三】忠州白使君　忠州刺史白居易。

潯陽宴別　此後忠州路上作。　潯陽の宴別　此より後忠州路上の作

鞍馬軍城外。笙歌祖帳間。　鞍馬軍城の外、笙歌祖帳の間。

乘レ潮發二湓口一。帶レ雪別二廬山一。　潮に乘じて湓口を發し、雪を帶びて廬山に別る。
暮景牽二行色一。春寒散二醉顏一。　暮景行色を牽き、春寒醉顏を散ず。
共嗟炎瘴地。盡レ室得二生還一。　共に嗟く炎瘴の地、室を盡して生還するを得たるを。

【字解】【一】軍城　潯陽、卽ち江州を指す。【二】祖帳　送別の宴席。【三】湓口　潯陽に在る川の名。【四】行色　行旅の景況。【五】炎瘴地　江州を指していふ。

【題義】潯陽に離別の宴を設け、忠州に向つて去る時の情景を敍した詩である。

【詩意】鞍馬に跨つて潯陽を出で、宴席に臨んで笙歌の聲を聽き、潮に乘じて湓口を舟出し、雪を戴いた廬山に別を告げて去らんとすれば、夕暮の景色が旅心を誘ひ、春の寒さが醉を醒す。潯陽炎瘴の地に數年を送つたが、幸に家族一同生きて還るを得たことを共に嗟嘆した。

戲贈二戶部李巡官一　戲に戶部の李巡官に贈る

好去民曹李判官。　好し去れ民曹の李判官、
少レ貪二公事一且謀レ歡。　少く公事を貪つて且つ歡を謀らん。
男兒未レ死爭能料。　男兒未だ死せざること爭でか能く料らん、
莫レ作二忠州刺史看一。　忠州刺史の看を作すこと莫れ。

【字解】【一】戶部　官署の名。戶口財賦を掌る。漢では民曹と謂つた。巡官は官名。唐では節度・觀察・團練・防禦諸使には皆巡官あり、以て屬僚となす。位は判官・推官の次に在り。【二】看　徐選すること、高適の詩に不作二布衣看一とある。

【題義】戲に戶部の李巡官に贈つた詩である。

【詩意】李判官殿、やかましい事を言はないで往つてくれ。そんなに御役目大事に務めないで身の歡樂を謀らうではないか。人の身は明日をも知らぬ果敢ないものだ。あまり忠州刺史あつかひにはしてくれるな。

行次二夏口一先寄二李大夫一　行いて夏口に次り、先づ李大夫に寄す

連山斷處大江流。　連山斷ゆる處大江流る、
紅旆逶迤鎭二上游一。　紅旆逶迤として上游を鎭す。
幕下翺翔秦御史。　幕下に翺翔す秦の御史、
軍前奔走漢諸侯。　軍前に奔走す漢の諸侯。
曾陪二劍履一升二鸞殿一。　曾て劍履に陪して鸞殿に升り、
欲レ謁二旌幢一入二鶴樓一。　旌幢に謁して鶴樓に入らんと欲す。
假著二緋袍一君莫レ笑。　假に緋袍を著るも君笑ふ莫れ、
恩深始得レ向二忠州一。　恩深くして始めて忠州に向ふを得たり。

【字解】【一】紅旆　將軍の旗。逶迤は靡く貌。上游は水の上流の地。【二】翺翔　奔走服事すること。秦御史は節度判官などをいふ。【三】鸞殿　門下省をいふ。【四】旌幢　旗。李大夫を旌に比していふ。鶴樓は黃鶴樓。湖北省武昌縣の西南に在り、昔費文禕が登仙し黃鶴に乘つて憩ひし處である。【五】緋袍　刺史の服。

【題義】忠州に赴任する途中、夏口（今の湖北省武昌縣の西。）に次り、面謁する前に先づ節度使たる御史大夫李公に寄せた詩である。

【詩意】連山の斷えた處を長江が滔滔として流れてゐる。その上流の地に君は節度使として鎭護してゐる、して其幕下には數多の屬僚や地方長官などが奔走服事してゐる。私も嘗て君に陪して門下省に奉職した事もあつた。その緣故で、黃鶴樓に入つて面謁を賜はりたいと存じてゐる。假に刺史の服を著て往きますから、どうぞ笑はないで下され。やつと聖天子の御恩に浴して忠州刺史になりましたから。

重贈李大夫

重ねて李大夫に贈る

早接清班登玉陛。
同承別詔直金鑾。
鳳巢閣上容身穩。
鶴鏁籠中展翅難。
流落多年應是命。
量移遠郡未成官。

早く清班に接して玉陛に登り、
同く別詔を承けて金鑾に直す。
鳳は閣上に巢ひて身を容るること穩に、
鶴は籠中に鏁されて翅を展ぶること難し。
流落多年應に是れ命なるべし、
遠郡に量移せられて未だ官を成さず。

【字解】【一】清班　清貴の官。【二】別詔　特別の詔。【三】鳳　李大夫に比す。【四】鶴　樂天自ら比す。【五】量移　罪を以て遠地に貶せられた者が赦に遇うて近地に移されること。遠郡は忠州を指す。【六】慙　感謝する意。憔悴は痩せ衰へた身。樂天自ら謂ふ。歎は傷る意。【七】銀臺　翰林院をいふ。

慙君獨不歎憔悴。
猶作銀臺舊眼看。

慙づ君が獨憔悴を歎かず、
猶銀臺舊眼の看を作すに。

【題義】重ねて李大夫に贈つた詩である。

【詩意】早く君と相前後して宮殿に登り、又同じく別詔を承けて翰林學士となつたが、君は永く宮閣に仕へてめきめきと昇進し、私は貶謫の憂目に遇うて自由もきかぬ身になつた。かくて久しく江州に流落してゐたが是れも天命で致方もない。此度忠州に量移せられたがまだ赴任の途中で本官にはならないのに、君が尾羽打ち枯らした私を馬鹿にもせず、翰林學士たりし昔のやうにあしらつてくれたことは、誠に感謝に堪へない。

對鏡吟

對鏡吟

閒看明鏡坐清晨。
多病姿容半老身。
誰論情性乖時事。
自想形骸非貴人。
三殿失恩宜放棄。

閒に明鏡を看て清晨に坐す。
多病の姿容半老の身。
誰か論せん情性の時事に乖くを、
自ら想ふ形骸の貴人に非ざるを。
三殿恩を失ふ宜く放棄せらるべし、

【字解】【一】誰論　何ぞ論ぜんといふ意。【二】形骸　容貌なり。【三】三殿　麟德殿をいふ。一殿にして三面ある故なり。ここは唯宮殿の意と見るを可とす。【四】九宮　九星なり、推命は星まはりを見て吉が運命を推測すること。【五】如今

(四)九宮推ㇾ命合ニ漂淪一。　九宮命を推す合に漂淪すべし。
(五)如今所ㇾ得須ㇾ甘ㇾ分。　如今得る所須らく分に甘んずべし、
腰佩ニ(六)銀龜一朱ニ兩輪一。　腰に銀龜を佩びて兩輪を朱にす。

【題義】鏡に對して吾が姿を寫し、因つて其感想を述べた詩である。

【詩意】朝鏡を把つて老病の身を寫して見た。吾が性質が時流に合はないことは今更言ふまでもないが、一體吾が人相が貴人にはなれない相である。殿中に仕へて君恩を失つたからには放棄せられるのは當然で、九星から吾が運命を推定しても淪落すべき筈である。されば今日の境遇に對しては決して不足を言ふべきではない。忠州刺史となつて腰には銀魚袋を佩び朱塗の車に乘れるのであるから。

江州赴ニ忠州一至ニ江陵一以來舟中示ニ舍弟五十韻

江州より忠州に赴くとき、江陵に至りてより以來、舟中にて舍弟に示す五十韻

昔作ニ(一)咸秦客一。常思ニ江海行一。
今來仍盡ㇾ室。此去又專ㇾ城。
(二)典午猶爲ㇾ幸。(四)分憂固是榮。
(三)算簣州乘送。(六)艛艓驛船迎。

昔咸秦の客と作り、常に江海の行を思ふ。
今來りて仍室を盡し、此を去りて又城を專にす。
典午も猶幸と爲す、分憂は固より是れ榮。
算簣州乘送り、艛艓驛船迎ふ。

(一)咸秦客　咸陽の客。咸陽は秦の都。
(二)典午　晉の司馬氏の事を記すに干寶の晉紀を以てしたことから、晉の異稱となつた。
(三)算簣州　忠州の異稱。
(四)分憂　憂を分つ。
(五)艛艓　艛は船の一種。艓は小舟。

今。【六】銀龜　銀魚袋なり。官吏の腰に佩ぶるもの。困學紀聞に「唐時品官もと魚袋を佩ぶ。則天の時改めて龜となす」とある。

共載皆妻子。同遊卽弟兄。
寧辭(七)浪迹遠。且貴(八)賞心幷。
(九)雲展帆高挂。(一〇)颿馳棹迅征。
泝ㇾ流從ニ(一一)漢浦一。循ㇾ路轉ニ(一二)荊衡一。
山逐ㇾ時移ㇾ色。江隨ㇾ地改ㇾ名。
風光近ㇾ東早。水木向ㇾ南清。
(一三)夏口煙孤起。(一四)湘川雨半晴。
日煎紅浪沸。月射白砂明。
北渚寒留ㇾ雁。南枝暖待ㇾ鶯。
騈ㇾ朱桃露ㇾ蕚。點ㇾ翠柳含ㇾ萌。
(一五)亥市魚鹽聚。(一六)神林鼓笛鳴。
壺漿椒葉氣。歌曲(一七)竹枝聲。
繫ㇾ纜憐ニ沙靜一。(一八)垂ㇾ綸愛ニ岸平一。
水餐ニ紅粒稻一。野茹ニ紫花菁一。

共に載するは皆妻子、同く遊ぶは卽ち弟兄。
寧ぞ辭せん浪迹の遠きを、且貴ぶ賞心の幷するを。
雲展して帆高く挂り、颿馳して棹迅く征く。
流に泝りて漢浦從りし、路に循ひて荊衡に轉ず。
山は時を逐ひて色を移し、江は地に隨ひて名を改む。
風光は東に近づきて早く、水木は南に向ひて淸し。
夏口煙孤り起り、湘川雨半晴る。
日煎りて紅浪沸き、月射て白砂明かなり。
北渚寒くして雁を留め、南枝暖にして鶯を待つ。
朱を騈べて桃は蕚を露し、翠を點じて柳は萌を含む。
亥市魚鹽聚り、神林鼓笛鳴る。
壺漿椒葉の氣、歌曲竹枝の聲。
纜を繫ぎて沙の靜かなるを憐み、綸を垂れて岸の平かなるを愛す。
水には紅粒の稻を餐ひ、野には紫花の菁を茹ふ。

(七)浪迹　浪に隨ひて迹を留めること。
(八)賞心　心に適ふ景物を賞すること。
(九)雲展　雲の展ぶるが如くなること。
(一〇)颿馳　颿は船の帆。
(一一)漢浦　漢水の岸。
(一二)荊衡　荊山と衡山。
(一三)夏口　今の武昌。
(一四)湘川　湘水。
(一五)亥市　亥の日に開く市。
(一六)神林　神社の林。
(一七)竹枝　竹枝詞。
(一八)垂ㇾ綸　綸を垂れて釣をすること。

甌汎茶如乳。臺粘酒似餳。
膾長抽錦縷。藕脆削瓊英。
容易來千里。斯須進一程。
未曾勞氣力。漸覺有心情。
臥穩添春睡。行遲帶酒醒。
忽愁牽世網。便欲濯塵纓。
早接文場戰。曾爭翰苑盟。
掉頭稱俊造。翹足取公卿。
且味隨時義。徒輸報國誠。
衆排恩易失。偏壓勢先傾。
虎尾憂危切。鴻毛性命輕。
燭蛾誰救活。蠶繭自纏縈。
斂手辭雙闕。回眸望兩京。
長沙拋賈誼。漳浦臥劉楨。

甌に汎びて茶は乳の如く、臺に粘して酒は餳に似たり。
膾長くして錦縷を抽き、藕脆くして瓊英を削る。
容易く千里に來り、斯須一程を進む。
未だ曾て氣力を勞せず、漸く心情有るを覺ゆ。
臥すこと穩かにして春睡を添へ、行くこと遲くして酒醒を帶ぶ。
忽ち愁ふ世網に牽かるるを、便ち塵纓を濯はんと欲す。
早く文場の戰に接し、曾て翰苑の盟を爭ふ。
頭を掉ひて俊造と稱せられ、足を翹げて公卿を取らんとす。
且つ時に隨ふ義に味く、徒に國に報ゆる誠を輸す。
衆排して恩失ひ易く、偏壓せられて勢先づ傾く。
虎尾憂危切に、鴻毛性命輕し。
燭蛾誰か救活せん、蠶繭自ら纏縈す。
手を斂めて雙闕を辭し、眸を回らして兩京を望む。
長沙賈誼を拋ち、漳浦劉楨を臥せしむ。

鶺鴒鳴きて還た歇み、蟾蜍破れて又盈つ。
年光激箭に同く、鄉思搖旌を極む。
潦倒して親知笑ひ、衰羸して舊識驚く。
烏頭感に因りて白く、魚尾勞の爲に頽し。
劍を學ぶも將た何ぞ用ひん、丹燒けども竟に成らず。
孤舟萍一葉、雙鬢雪千莖。
老いて人情を見て盡し、閒に物理を思うて精し。
湯に冷熱を探るが如く、博して輸贏を鬪はしむるに似たり。
險路應に須らく避くべし、迷塗兵に爭ふこと莫れ。
此心に止足を知る、何物か經營を要せん。
玉は泥中に向ひて潔く、松は雪後を經て貞し。
朝市に隱るるを妨ぐる無し、必ずしも寰瀛を謝せず。
但前非を悟るに在り、後患に嬰ること無きを期す。
知ること多きは景福に非ず、語ること少きは是れ元亨。

鶺鴒鳴きて還た歇み、蟾蜍破れて又盈つ。
年光激箭に同く、鄉思搖旌を極む。
潦倒して親知笑ひ、衰羸して舊識驚く。
烏頭感に因りて白く、魚尾勞の爲に頽し。
劍を學ぶも將た何ぞ用ひん、丹燒けども竟に成らず。
孤舟萍一葉、雙鬢雪千莖。
老いて人情を見て盡し、閒に物理を思うて精し。
湯に冷熱を探るが如く、博して輸贏を鬪はしむるに似たり。
險路應に須らく避くべし、迷塗兵に爭ふこと莫れ。
此心に止足を知る、何物か經營を要せん。
玉は泥中に向ひて潔く、松は雪後を經て貞し。
朝市に隱るるを妨ぐる無し、必ずしも寰瀛を謝せず。
但前非を悟るに在り、後患に嬰ること無きを期す。
知ること多きは景福に非ず、語ること少きは是れ元亨。

(四二)晦卽全身藥。明爲(四三)伐性兵。
(四四)昏昏隨世俗。(四五)蠢蠢學黎甿。
鳥以能言(四六)縛。龜緣入夢烹。
知之一何晩。猶足保餘生。

【字解】【一】咸秦　長安。秦の咸陽の地なればなり。【二】專城　刺史となること。【三】典午　司馬をいふ。【四】分憂　刺史をいふ。【五】簨簋　車の屏蔽なり。州乘は州の車。【六】艛艓　船の名。【七】浪迹　行蹤の定なきをいふ。【八】賞心　心の歡樂をいふ。【九】雲展　雲の如くのぶること。【一〇】飈馳　風の如く走る。【一一】漢浦　漢水のほとり。【一二】荆衡　荆州・衡州。【一三】夏口　今の湖北省武昌縣の西。【一四】湘川　湘水。【一五】亥市　亥の日に開く市。【一六】神林　神社の森。【一七】竹枝　土俗を歌ふ詩。【一八】垂綸　釣絲を垂れる。【一九】瓊英　美玉。【二〇】酒醒　酒に醉ふこと。【二一】塵纓　汙れた冠の紐。【二二】文場戰　進士の試に應じたこと。【二三】翰苑盟　文人の仲間入りをしたこと。【二四】俊造　禮記に「鄉に命じ秀士を論じて之を司徒に升せしむるを選士といひ、司徒選士の秀なる者を論じて之を學に升するを俊士といひ、司徒に升せらるる者は鄉に征かず、學に升せらるる者は司徒に征かず、之を造士といふ」と。【二五】性命　生命なり。【二六】燭蛾　火中に飛び込む蟲。【二七】雙闕　宮殿。【二八】兩京　洛陽・長安。【二九】賈誼　漢の文帝に仕へて寵あり。讒に由りて長沙王の太傅に貶せらる。【三〇】劉楨　建安七子の一。嘗て曹操の子丕に從つて飲む。酒酣なるとき丕夫人甄氏に命じて出で拜せしむ。坐中皆伏す。楨獨り平視す。操之を聞き乃ち收めて罪を治む。【三一】鶗鴂　もず。秋至れば此鳥鳴く。【三二】蟾蜍　月をいふ。【三三】潦倒　零落する貌。【三四】烏頭　黑髮。【三五】丹燒　仙藥を錬る。【三六】博　博奕。輸贏は勝敗。【三七】迷塗　迷へる道。【三八】止足　老子に「足ることを知れば辱められず、止ることを知れば殆からず」とある。【三九】寰瀛　世間。【四〇】景福　大なる幸福。【四一】元亨　大通なり。幸福なること。【四二】晦　智をくらます。【四三】伐性兵　兵は刃物。韓詩外傳に「徵幸は性を伐るの斧なり」とある。【四四】昏昏　暗き貌。【四五】蠢蠢　蟲の如くうごめく貌。黎甿は庶民。【四六】縛　縛られる。

【題義】江州から忠州に赴任する時、既に江陵（湖北省荆州府治）を過ぎ、長江を遡る舟中で此詩を作り弟行簡（樂天の作つた三遊洞序に據れば舍弟は行簡であることが明かである）に示したといふのである。五十韻は卽ち百句。

【詩意】昔長安に客寓してゐた頃は、江海の間に旅して見たいものだとも思つたが、今既に一家を擧げて江州に來り、又此を去り刺史となつて忠州に赴任することになつた。江州に司馬（官名）となつてゐたのさへ幸福だと思つてゐたのに、刺史となるとは非常な光榮である。經る所の州縣では舟や車で送迎してくれ、妻子兄弟相攜へての旅であるから、漂流の遠きも敢て厭はず、心の樂みを倶にするのを喜んでゐる。船の進みも速かに江流を泝つて漢浦荆衡を歷れば、山は時に因つて色が變り、江は土地の異ると共に名も變り、景色は東に近寄るほど早く、水や木は南に向いてゐるほど淸い。夏口のあたりには孤煙が立ちのぼり、湘水のあたりは雨が半晴れてゐる。日が射しては波が紅になり、月が射せば砂が白く見え、北岸は寒くして雁を留めて居るが、南岸の樹は鶯を待ち顏である。桃の蕾が紅を露し、柳の芽が綠を呈し、濱邊の市には魚鹽が聚り、社の森には笛太鼓が賑かである。汁を吸へば山椒の香が深く、歌を聽けば土地風を味ふことが出來る。船を泊しては沙の靜かなるを愛し、釣を垂れては岸の平なるを愛し、稻粱の飯や紫花の菁を食ひ、乳の如き茶や餳の如き酒を飲み、錦絲の如き膾や玉を割くが如き蓮根を賞味し、既に千里を過ぎ來りて更に一日程を進めた。格別氣力も費さな

いが益〻興味の深きを覺え、穩かに臥して春睡を貪り、醉うて船の進みが遲くなつた。ふと世上の煩累を愁へ官を辭して隱退しようかなどと思つた。回顧すれば早く進士の試驗に應じて及第し、頭を掉つて俊士とか造士とか稱讚され、手に唾して卿相の位に登ることも出來ると自負してゐた。併し徒に報國の志ばかり厚くて時俗に隨ふことを知らなかつたので、忽ち衆人の排擊を招き、虎の尾を踏むやうな危險にも遇ひ、身命の輕きは鴻毛にも比すべき狀態になつた。飛んで火に入る蟲と同じだから誰あつて救つてはくれず、蠶が自ら繭を作つて吾と吾が身を閉ぢ籠めるのと同じやうなはめになつた。因つて謹愼して宮闕を辭し兩京を回望しながら賤處に遷り、賈誼が長沙に貶せられ、劉楨が漳浦に流されたやうであつた。歲月の移ることは箭よりも速く、懷鄕の情は風に飄る旗のやうであつた。老衰零落して人の笑草になり、黑髮も愁の爲に白くなり、苦勞の爲に赤くなつた魚尾と同樣であつた。（魚が勞苦すれば其尾が赤くなるといふこと詩經に見ゆ）嘗て劍を學んでも何の役にも立たず、丹は燒いて見たが是も失敗に終つた。老いて人情の機微を悟り靜かに物の道理を考へ、湯の冷熱を探り博して勝敗を爭ふ如く、すべて愼重な態度を取つて險路を避け名利を爭はぬことにした。心に止足を知りさへすれば何も汲汲として求むる所はない。玉は泥の中に在つても潔く、松は雪の後にも綠を變へない。大隱は市に隱るといふから、敢て世間を引退するにも及ぶまい。ただ前非を悟り後の禍に罹らぬやうにしよう。智多きは身の幸ではなく、語少きこそ幸である。暗默は身を全うする藥で、明智は性を戕ふの刃である。默默として世俗に隨ひ蠢蠢として愚民に做つてゐるがよい。鵾鵬は能く言ふので人の爲に縛られ、龜は卜に供せられるのだ。かう悟つて見れば既に曉かつたとも思ふが、併しまだ今後の餘生を全うするには足りる。才氣瀾翻潮湧し、一筆掃ひ就す」と評してある。

【餘論】唐宋詩醇に「議論と敍事と相間へて行る。

題岳陽樓

岳陽樓に題す

岳陽城下水漫漫(一)、
獨上危樓(二)凭曲欄(三)。
春岸綠時連夢澤(三)、
夕波紅處近長安。
猿攀樹立啼何苦。
鴈點湖飛渡亦難。
此地唯堪畫圖障(四)、
華堂(五)張與貴人看。

【題義】岳陽樓（湖南省岳陽縣城の西門の上に在り、洞庭湖を下瞰し風景絶佳なり）に題した詩である。

【字解】【一】漫漫　廣き貌。
【二】危樓　高樓なり。
【三】夢澤　雲夢澤。大澤の名。
【四】障　ついたて。からかみ。
【五】華堂　華美な堂。

【詩意】岳陽の城下には洞庭の湖水が漫漫として廣がつてゐる。吾は獨り岳陽樓に上り欄干に凭つて展望した。時正に春であるから岸草綠にして遠く雲夢澤に連り、夕波の紅なるを見て長安の近くなつたやうに思はれる。樹上に啼く猿の聲は悲しげで、湖水に飛び込む鴈は去り難げである。此地の風景は屏障に畫いて華堂に張り、貴人の賞玩に供すべき價値がある。

入峽次巴東

峽に入り巴東に次る

不知遠郡何時到。
猶喜全家此去同。
萬里王程三峽外。
百年生計一舟中。
巫山暮足霑花雨。
隴水春多逆浪風。
兩片紅旌數聲鼓。
使君艘艓上巴東。

知らず遠郡何の時にか到らん、
猶喜ぶ全家此を去る同きを。
萬里の王程三峽の外、
百年の生計一舟の中。
巫山暮に足る花を霑すの雨、
隴水春多し浪に逆ふ風。
兩片の紅旌數聲の鼓、
使君の艘艓巴東に上る。

【題義】船江を泝つて三峽に入り、巴東（今の湖北省巴東縣大江の北岸）に次つた時の詩である。

【字解】【一】遠郡　忠州を指す。【二】王程　王の爲の務の旅程。【三】峽は瞿塘峽・巫峽・西陵峽をいふ。三峽の中長さ七百里。兩岸の連山斷ゆる處なし。江水峽の束ぬる所となり舟行甚だ險なり。【三】百年　人の一生をいふ。生計は活計といふが如し。【四】隴水　川の名。【五】使君　刺史。樂天自ら謂ふ。艘艓は舟の名。

【詩意】江上路遠く何日忠州に到著するかも知れぬほどであるが、一家暴つて同行するだけは誠に嬉しい。既に萬里の水程を歷て三峽に入り、一生の資財を盡く舟中に藏めてある。巫山のあたりは夕に雨が降つて花を霑し、隴水が增して風浪が逆捲いてゐる。吾が乘れる舟はかかる險難を凌ぎ、二本の紅旌を建て鼓を鳴らして、今や方に巴東を上つて行く。

十年三月三十日。別微之於灃上。十四年三月十一日夜。微之自峽中。停舟夷陵。三宿而別。言不盡者以詩終之。因賦七言十七韻以贈。且欲記所遇之地與相見之時。爲他年會話張本也

灃水店頭春盡日。

灃水の店頭春盡くる日、

十年三月三十日、微之に灃上に別れ、十四年三月十一日夜、微之に峽中に遇ひ、舟を夷陵に停め、三宿して別る。言の盡さざる者は詩を以て之を終へんとす。因つて七言十七韻を賦して以て贈り、且つ遇ふ所の地と相見るの時とを記し、他年會話の張本となさんと欲するなり

【字解】【一】灃水　源は陝西省